【カリ垣外】
カリガイト。
この小字は天竜川沿いの喬木村との境にある。村境には境之沢川が流れている。この小字は天竜川と境之沢川との合流点の南東側にある崖地となっている。
カリガイトのカリとは何を意味しているのであろうか。仮説を二つ挙げておきたい。
①カリは動詞カル（刈）の連用形の名詞化した語。地力維持のための重要手段であった、かっての苅敷用の山野草や樹木の茎葉を供給する傾斜地であったと思われる。カリガイト付近には水田が見当たらないのが気になるが、苅敷は畑にも入れたという。カリガイトとは、「苅敷のための草や茎葉を刈り取った所にあった屋敷跡」とする。
②カリ（刈）は崩壊地のこと。「ナグ（薙）の名詞形ナグが崖地に使用されていることから見て、カリ（刈）もまた崩壊地形を示す用語であってもおかしくない」（語源辞典）という。カリガイトとは、「崖地にある居住地跡」となる。現地をみれば納得のいく仮説ではある。
国土地理院の2.5万分の一地図には、カイリガイト地名は無い。
【弁天】
ベンテン。
天竜川沿いの左岸にある小字であるが、天竜川にある岩塊の島に弁天を祀ってある。この小字は岩塊と対岸の崖地である急傾斜地を含んでいる。
ベンテンとは、「弁財天を祀る祠のある所」である。
弁財天は古代インドの河の女神で豊饒の神として信仰されていたが、真言密教の普及に伴って次第に固有の民俗信仰との習合を遂げて多種多様な信仰習俗を作り出したといわれている。本来の水の神としての特性から川などの水辺に祀られることが多く、この下久堅の弁天様も島に置かれているのであろう。
国土地理院の全国地図には、ベンテン地名は、中・大字として17ヵ所に記載されている。
【丸山】
マルヤマ。
この小字は、天竜川左岸の県道下久堅知久平線と主要地方道下条米川飯田線が合流する南側にあるホテル弁天付近となる。
マルヤマとは、「お椀を伏せたような山」をいう。ホテルができる前には、天竜川からみれば、この付近はマルヤマであったと思われる。
マルヤマ小字は、飯田市付近には多く、全国地図をみても、中・大字として記載されているマルヤマ地名は352ヵ所にもなる。
【北ノ沢】
キタノサワ。
喬木村との境を流れている、もっとも北側にある川が境之沢川で、その南側にあるのが北の沢川である。
キタノサワとは何か。敢えて二説を掲げたい。
①キタノサワとは、当然のことながら「下虎岩の中心部からみて、北側にある沢」であることを意味する。
②しかし、別の解釈も成り立つ。キタ←キダ（キダハシ。階段）と転訛したもので、「階段状に谷を刻んでいる川」をいう。
全国地図にはキタノサワ地名は21ヵ所がある。

【天神山・天神原】

テンジンヤマ・テンジンバラ。

二の小字は隣り合っている。県道下久堅知久平線の東側にある急傾斜地を登ると、広い平坦地が見えてくる。これがテンジンヤマ小字やテンジンバラ小字のある段丘面である。

テンジンとは、天満天神として神格化された学問の神様、菅原道真をいうのであるが、この地域では、主に天神講として行われていたものと思われる。飯田市嶋地区では昭和２５年頃まで小・中学校の子どもたちが集まって、菅原道真公の石碑に参拝して、その後はそれぞれが持ち寄った重箱を廻しながら飲食をし、その後はテープ取りなどの遊びを外でやって楽しんだ、という思い出がある。この地域の天神講はこれに近いものだったのではないだろうか。確かめてはいないが、天神講は寺子屋と関わりがありそうである。

テンジンヤマとは「天神様が祀られている山」、テンジンバラとは「天神様が祀られている広い平坦地」を意味するものと思われるが、下虎岩の天神講についての具体的な様態は不明である。

全国地図には、中・大字として、テンジンヤマ地名が４１ヵ所、テンジンバラ地名が１１ヵ所に挙げられている。

【池ノ平】

イケノタイラ。

この小字は境之沢川と北の沢川の間にある台地面にあり、天神原小字に接する。

イケノタイラとは、文字通り、「池のある山中の平坦地」をいう。現在でも、このイケノタイラ小字の隣になるコナカオ・オオナカオ小字には堤がある。東側にある尾根筋から湧水が補給されているのか、竜東の龍江にもイケノダイラ小字がある。

国土地理院の全国地図には、イケノタイラ地名は、中・大字として１４件の記載がある。なお、イケノダイラ地名は６件となっている。

【境ノ沢】

サカイノサワ。

喬木村との村境を流れる境の沢川の左岸に沿って細長く延びている小字である。

サカイノサワとは、これも字面の通りで、「喬木村との村境を流れる川に沿っている土地」を意味する。

全国地図にも、サカイノサワ地名は、７ヵ所が中・大字として挙げられている。

【小中尾・大中尾】

コナカオ・オオナカオであるが、「小中尾」をコナコウと呼んでいるところもある。コナカオ→コナコウと音便変化したものであろう。

ナカオとは何か。明快な解釈とはいえないが、次のように考えることはできないだろうか。

ナカ（中）は「二つのものにはさまれた間の地」（語源辞典）をいう。“二つのもの”というのは、この場合、境之沢川と北の沢川という二の沢をさしているものと思われる。オはヲ（尾）で、「高処」（語源辞典）を指す。

ナカオとは、「二本の沢に挟まれた高い所」を意味する。コナカオは「小さいナカオ」で、オオナカオは「大きなナカオ」ということになる。

全国地図には、コナカオ地名は５ヵ所、オオナカオ地名は３ヵ所ある。

【岩ノ沢・岩ノ沢日向・岩ノ沢日蔭】
　イワノサワ・イワノサワヒナタ・イワノサワヒカゲ。
　これらの小字は北の沢川の左右の沿岸に分布している。北の沢川はこの付近の下流部も深い谷になっていて、両岸は急傾斜地である。
　「岩がごつごつしている沢」だからイワノサワと名づけたと思われるが、北の沢と岩ノ沢との関係ははっきりしない。しかし北の沢川のこの部分の川はかってはイワノサワと呼ばれていたのではないだろうか。
　沢の北側にイワノサワヒナタ小字があり、南側にはイワノサワヒカゲ小字があるのは当然であるが、南側に１ヵ所イワノサワヒナタがあるのはなぜだろうか。北東に傾斜した斜面でなぜヒナタなのか、わからないでいる。
　全国地図にはイワノサワ地名は、中・大字として１１ヵ所が挙げられている。
【冨十洞】
　トミジュウボラ。
　下虎岩最北部の山間には境之沢川と北の沢川の間に広大な平坦地が段丘状になっている。トミジュウボラ小字は二つの段丘間の急傾斜地にあり、この中を伊那南部広域農道信州フルーツラインが通っている。
　トミジュウボラとは何か。よくわからない難解地名。
　「冨十洞」はト・ミジュウ・ボラか。ト（戸。門）は「出入口」（国語大辞典）をいう。瑞祥名の冨は後に与えたものであろう。ミジュウ←ミズ（水）と転訛したもので「湿地」（語源辞典）のこと。この小字の中を段丘の湧水が流れている。
　トミジュウボラとは、「下の段丘と上の段丘の出入口になっていて湧き水のある谷」を意味する。
　全国地図には、トミジュウボラ地名もトミジュウ地名も載っていない。
【机原】
　ツクエハラ。
　この小字は２ヵ所にある。一つは境之沢川と北の沢川の間の段丘上にあり、もう一つは、北の沢川の南側の段丘上にある。
　ツクエハラとは何か。
①ツクエハラとは、「机状の広い段丘または開墾地」とするのが、素直な解釈と思われる。
　あるいは次のように解することも可能か。
②ツク（尽）・へ（辺）またはツキ（尽）・クエ（潰）で「崩壊地形、浸食地形」を意味するという（語源辞典）。とすれば、ツクエハラとは、「周辺が崩壊している広い平野あるいは開墾地」ということになる。いささか回りくどすぎるか。
　机状の台地とする①の解釈だと、全国的にはかなりの数になりそうだが、実際には、ツクエハラ地名は全国地図には見当たらない。
【岩ノ沢北向】
　イワノサワキタムキ。
　この小字は北の沢川（岩ノ沢）の左岸にある北向きの傾斜地にある。前にも触れたように、「岩ノ沢」は北の沢川のこの付近での呼び名であったろうと思われる。
　イワノサワキタムキとは、文字通り「岩ノ沢の左岸の北向きの傾斜地」をいう。北の沢川の氾濫原には、現在は畑もある。
　全国地図には、この地名は無い。

【亀ヶ洞】
カメガホラ。
この小字は北の沢川右岸の急傾斜地にある。
亀が使われているのは瑞祥名だからであるが、カメガホラとは何を意味しているのだろうか。語源辞典に添いながら仮説を二つ。
①カメ←カハ（川）・メ（目）と転じたもので、メ（目）はべ（辺）のこと。カメガホラとは、「北の沢川の川辺に開いている谷」ということになる。
②カメ←カベ（壁）と転訛したもので、カミガホラとは、「壁のような急傾斜地のある谷」を意味する。
国土地理院の全国地図には、中・大字として挙げられているカメガホラ地名は、意外なことに一つも無い。
【センゲン山南向・センゲン山頂上】
センゲンヤマミナミムキ・センゲンヤマチョウジョウ。
これらの小字は、喬木村との村境にあり、修験道の一形態といわれている浅間信仰にかかわる小字と思われる。浅間信仰とは、富士山に対する信仰のうち浅間神社を中心とする信仰で、中部地方・関東地方を中心に広く分布しているという（日本民俗大辞典）。
これらの小字の近くに、これも喬木村境にナカノトウゲという小字があり、ここには標高５９２．６ｍの富士山型の独立峰がある。この山をセンゲン山と呼んで富士山に見立てたものと思われる。
センゲンヤマミナミムキとは、「浅間山を南に仰ぐ所」であろう。この小字には、南向きの斜面も北向き・西向きの斜面があるので、その傾斜地の傾いている方向ではなく、富士山を見立てたセンゲン山を南に見ることを意味していると解したい。
同様にセンゲンヤマチョウジョウは、「センゲン山の頂上を仰ぎ見る場所」としたい。「センゲン山頂」小字に山頂は無いから、こうした解釈にしたいが、どうであろうか。
国土地理院の全国地図には、センゲンヤマ地名は、中・大字として２０ヵ所に記載されている。
【中ノ峠】
ナカノトウゲ。
喬木村との村境にあって、センゲン山と思われる独立峰のある小字である。
ナカノトウゲとは何を意味しているのか。わかりきっているようで分かりにくい。二つの仮説を挙げておきたい。
①文字通り解釈すれば、ナカノトウゲとは「中頃にある峠」であるが、”中頃”とは何を意味しているのであろうか。喬木村との村境を見ていくと、主要地方道下条米川飯田線より北側の部分が喬木側に食い込んでいるようにみえる。この東に出ている部分の”中頃”にナカノトウゲがある。とすると、ナカノトウゲとは、「喬木村との境界線が東に張り出している部分の中頃にある峠」と解することができる。
②ナカ（中）には、「神社の境内」の意味がある（語源辞典）ので、神聖な場所を表すと考えてもいい。ナカノトウゲ小字は浅間信仰に関わる場所であるから、ナカノトウゲとは、「神聖な場所の中にある峠」であったかもしれない。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、ナカノトウゲ地名は４ヵ所に挙げられている。

【岩ノ沢入迫南北向両ヒラ】
　イワノサワイリマデナンボクムキリョウヒラ。
　下久堅では最も長い小字名である。北の沢川すなわち岩ノ沢の最上流部にある。
　「岩ノ沢入迫」とは、「岩ノ沢の最上流部」を意味するものと思われる。イリ（入）は、長野県や愛知県北設楽郡の方言で、「川上。上流」を意味する（国語大辞典）。イリマデ（入迫）がよく分からないが、「最上流部」とした。
　ヒラは黄泉平坂のヒラで、傾斜地をいう。
　以上から、「岩ノ沢入迫南北両ヒラ」とは、「岩ノ沢最上流部渓谷の両岸の傾斜地」ということになりそうだ。
　全国地図には記載のありえない地名ではないだろうか。
【ナギ洞】
　ナギボラ。
　北の沢川の中流付近で「岩ノ沢」小字群のあるところ。北の沢川の支流の谷に、この小字がある。
　ナギはこの地方には多い地名で、動詞ナグ（薙）の連用形が名詞化した語である。
　ナギボラとは、「崩壊地のある谷」か。当然すぎるような地名と思えるが、全国地図には、一つの記載もない。
【吉原・吉原日向・吉原日影】
　ヨシハラ・ヨシハラヒナタ・ヨシハラヒカゲ。
　これらの小字は、北の沢川に架かる庚申橋のある付近に固まっている。
　ヨシハラとは、「葭の生えているような湿地で耕作していない平地」をいうか。ここは北の沢川の川原で畑にはなっていない。
　ヨシハラヒナタは北の沢川の右岸にあって日当たりは良く、ヨシハラヒカゲは北の沢川の左岸で北東向きの傾斜地になっていて、日当たりは良くない。
　国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヨシハラ地名は３１ヵ所に挙げられている。
【ザトウナギ北向】
　ザトウナギキタムキ。
　この小字は富田に向かう県道手塚原米川飯田線に沿った北側にある。県道の南側にはコウシンバラ小字が県道に沿うように長く伸びている。
　ザトウナギとは何か。「近くに崩壊地のある座頭が住んでいた所」というのが素直な解釈であろう。
　ザトウは琵琶法師の別称だというが、民間では盲僧と座頭を区別はしていない。彼らは呪的能力を持っていると思われたり、盲目性は神の世界に近い存在でもあるとされていた。
　柳田國男は次のように述べている。全体に日本は語りごとを職とする者が法師とか比丘尼とか、その種類の多い国であったが、その中でも最も活発に、長く働いていたのは瞽女と座頭であった。彼らの特長はその専心の暗記力によって長い時間一座をもてなすことができたこと、師弟の恩誼によって団結の力を養いやすかったことだという。（口承文芸史考）
　ザトウナギには複数の座頭が住んでいて、旅のわらじを脱ぐ座頭たちもいたのであろう。近くには「庚申原」「コウシン平」「孝心原」などの小字もある。庚申の夜にも呼ばれることが多かったのではないだろうか。
　全国地図にザトウナギ地名は無い。

【コハシミブ・コハシミブ日カゲ】
コワシミブ・コワシミブヒカゲ。
これらの小字は、北の沢川（岩ノ沢）左岸にある。
コハシミブとは何か。解釈は二通り。
①コハシは動詞コワス（壊）の連用形が名詞化した語で、崩壊している地形を表す。語源辞典によれば、ミブはミ（水）・ブ（「辺」の転）で、北の沢川の川辺をいう。コハシミブとは、「崩壊地のある北の沢川の川辺」を意味する。
②コハシミブ←コワシミズ（強清水）と転訛したもの。コワシミズとは、コワは動詞コワス（壊）の語幹で、シミズ（清水）は湧水を表す。コハシミブとは、「崩壊地のある崖下の湧水地」（語源辞典）をいう。現地は急傾斜地の麓で、自然の湧水の豊富な場所である。
コハシミブ日カゲとは、「コハシミブ小字に接する日陰地」を意味する。北向きの傾斜地となっているので、日蔭であることがわかる。
全国地図では、コワシミズ地名は、６件記載されているが、コワシミブ地名は無い。
【カンヲハラ・カンヲン原】
カンオハラ・カンオンハラ。
他に「観音原」小字があるが、場所を特定できないので省く。
これらの小字は、北の沢川左岸の段丘上にある。近くには「熊ノ林」小字や北原諏訪社がある。
カンヲハラ←カンヲン原と転じたもので、いずれも観音信仰に関わる小字である。
観音信仰とは、仏教の諸菩薩のうちの一つである、現世・来世利益のほとけとして信仰されてきた観世音菩薩・観音に対する信仰である。
北側に接している「熊ノ林」小字に関わると思われる熊野神社や南側にある北原諏訪社という神社とも、神仏習合が盛んであった中世から近世にかけては、深いつながりがあったと思われる。現に、熊野十二所権現には、本地として千手観音・十一面観音・如意輪観音・正観音などの観世音菩薩が祀られている。
中近世の伊那谷南部でも、上の四観音に准底観音と馬頭観音を加えた六観音が各地に祀られている。
カンヲンハラとは、「観音信仰が行われていた場所」となろうか。
この下虎岩のカンヲン小字には、北原観音堂があり、戦国期までは北原千寿寺という寺院であり、千手観音が祀られていた（村誌）。さらにこの観音堂は河東秩父三十四ヶ所観音の札所になっていたという。
なお、全国地図には、不思議なことに、カンオンバラ地名もカンノンバラ地名も載ってはいない。
【熊ノ林】
クマノハヤシ。
この小字は、机原段丘と上平段丘の間に傾斜地にある。
ハヤシ（林）には樹木の生えている所であるが、「神の森」という含みもある（語源辞典）。
クマノハヤシとは、「熊野信仰に関わる森」ではなかっただろうか。この地に何があったのか不明であるが、一つの仮説としておきたい。
中近世に、御師や先達の活動で庶民の間に熊野信仰が流行し、分祀も盛んであったという。
全国地図にはクマノバヤシが１件。

【上平】
ウワダイラ。
この小字は芦の沢川の左右両岸に３ヵ所に分布している。
下虎岩北原の中心部からみて、高い段丘となっている。
ウワダイラとは、「中心部からみて上の方にある広い平坦地」ということになる。
全国地図には、想定通り中・大字として、１７ヵ所に記載されている。
【庚申原・孝心原・カウシン平】
コウシンバラ・コウシンダイラ。
これらの小字は芦の沢川右岸の傾斜地に多い。「庚申原」「孝心原」小字はそれぞれ１ヵ所、小さな「カウシン平」小字は３ヵ所に分布している。
「庚申原」小字には庚申塔が多くまとまってみられるという（村誌）。庚申講が行われた場所であろう。先に述べたように、すぐ近くにはザトウナギキタムキ小字もあり、座頭が琵琶を抱えて語りで、これらの庚申講に参加していたことも考えられる。
コウシンバラとは、「庚申講が行われた野原」で、この小字は傾斜地になっていて、庚申講もおこなわれるので、耕作はしていなかったと思われる。
カウシンダイラとは、ハラとダイラの意味をを区別して、「庚申講が行われた傾斜地の中腹から麓のあたり」であろうか。
全国地図には、コウシンバラ地名は、なぜか１ヵ所しか載っていない。
【タカジケ・タカジキ】
これらの小字は、県道手塚原米川飯田線を広域農道分岐点から２５０ｍほど富田方面へ上ったあたりに並んでいる。
タカジキ←タカジケと転じたのではないかと考えるが、それはジキに適当な解釈がみつからなかったからである。
ではタカジケとは何か。シケは動詞シケル（時化）の連用形が名詞化した語で、「しめった状態」をいう。
タカジケとは、「高い所にある湧水のある所」としたいがどうであろうか。いずれも段丘山麓の湧き水のあるところと思われる。
全国地図には、タカジケ地名もタカジキ地名も載っていない。
【大ヒラ日向】
オオヒラヒナタ。
この小字は県道手塚原米川飯田線沿いで、タカジケ・タカジキ小字の富田寄りにある。尾根幅の広い側稜にある大きな小字である。
オオヒラとは、この場合は、「広い平坦地」としたい。従ってオオヒラヒナタとは、素直に「日当たりのいい、広い平地」であろう。段丘面とみてもいいほどの広い尾根筋になっている。
オオヒラ地名は全国地図にも１３７件と多くなっているが、オオヒラヒナタ地名は一つも無い。
【池ノ上】
イケノウエ。
芦の沢川の上流部にあり、これも富田へ向かう県道手塚原・米川・飯田線に沿っている。
イケとは、堤や自然水が溜まり易い場所をいうが、現在は堤の姿は見えないが、自然にできた池があったのかもしれない。
イケノウエとは、字面通り、「池の上流側にある土地」であろう。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、１３件が記載されている。

【ウシナクボ・ウシナクボ日向・ウシナクボ日カゲ】

これらの小字も、県道手塚原・米川・飯田線の道沿いにあり、６ヵ所に分布している。

ウシナクボとは何を意味するのか。分かりにくい地名である。仮説を二つ。

①ウシ←フチ（縁）が転じた語で（語源辞典）、「台地または川の縁」という。ナは場所を表す接尾語（語源辞典）。以上から、ウシナクボとは「台地の縁にある窪地」あるいは、「川の縁にある窪地」か。

②ウシ←ウジで、ウジケル（化膿する）から、「湿地」をいう（語源辞典）。ウシナクボとは、「湧水の多い窪地」となるが、しっくりしない。

全国地図にもウシナクボ地名やウシナ地名は記載が無い。

【イリ・イリ日向】

イリ・イリヒナタ。

これらの小字は、芦の沢川支流の上流部にある。イリ小字が３ヵ所、イリヒナタ小字が１ヵ所となっている。

イリ（入）とは、長野県や愛知県北設楽郡の方言になっていて、「奥。川上。上流」をいう（国語大辞典）。

ここのイリは、「芦ノ口沢川の上流部」を示しているものと思われる。

イリヒナタとは、「芦ノ口沢川上流部で日の当たる所」を意味する。芦ノ口沢川の右岸北側にあり、日当たりのいい所である。

全国地図には、中・大字として２２件が載っている。

【一作林】

イッサクバヤシ。

この小字は芦の沢川上流部左岸の傾斜地にある。

イッサクバヤシとは何を意味するのか。はっきりしない地名である。

イッサクとは、「同じ耕地に一年に一回作物を作ること」（国語大辞典）とある。北向きの傾斜地で、現在は広葉樹林帯になっていて畑として耕作されてはいない。イッサクに他に適当な意味があれば別だが、こうした条件の土地で畑作が行われたとすれば、焼畑より他に考えようがないように思える。

イッサクバヤシとは、「焼畑で一年に一回作物を作っていたことのある植林地」と解したい。

全国地図には、イッサクバヤシ地名もイッサク地名も載っていない。

【中鶴祢】

ナカヅルネ。

この小字は、芦の沢川本流の右岸にあって、長い側稜の南向き斜面となっている。

ナカヅルネとは何か。

ツルネは「連嶺。尾根」のこと（語源辞典）。ナカは二通りの解釈ができる。①中段を意味する。山地の高い所と麓に近い所の中間地をいう。②ナカ←ナガで、「長い」の意。従って、ナカヅルネの意味も仮説は二つになる。

①ナカヅルネとは、「山地の中段にある連なった嶺」をいう。

②ナカヅルネとは、「長く連なった嶺」か。

ナカヅルネ小字内には嶺は無いが、隣の小字内にある側稜に関わらせて名づけられたか、あるいは、この小字発生時には、ナカヅルネ小字が側稜まで延びていた可能性もある。

国土地理院の２．５万分の１地図には、ナカヅルネ地名は無いが、ツルネ地名は２ヵ所に記載されている。

【日向】
ヒナタ。
この小字はナカヅルネ小字に接する長い側稜になっている。
ヒナタは勿論、「日当たりのいい土地」である。尾根の北側も含んでいるが、尾根の近くでもあり北側の斜面の傾斜は緩いので、日蔭にはなりにくいものと思われる。
全国地図にも、ヒナタ地名は１４１件と非常に多い。
【ヒエダボラ・ヒエタ洞】
ヒエダボラ・ヒエタボラ。
これらの小字は、喬木村との村境で芦の沢川本流の左右両岸にある。
ヒエダボラもヒエタボラも、「ヒエタ（稗田）のある沢」ということになる。ヒエタとは何か。二通りの解釈がある。
①ヒエタはヒエタ（冷田）で、「水温の低い田んぼ」をいう。山間地にある水田は自然の湧水を利用している場合が多く、水温は低い。
②ヒエタはヒエタ（稗田）で、「稗を栽培する耕作地」（国語大辞典）をいう。民俗大辞典によれば、稗には畑稗と田稗があって、田稗は水温が低くても育つので、稲の生育のよくない水口などに栽培されたり、肥過田の調整田として有効に利用されていたという。
全国地図に、中・大字として、ヒエダ地名が３４ヵ所にもあることも頷ける。
【ヒルミ】
この小字は、芦の沢川中流域の左右両岸に広がり、河岸の傾斜地も含む大きな面積をもつ。
ヒルミとは何か。分かりにくい地名である。仮説を二つ。
①ヒルミは動詞ヒルム（怯）の連用形が名詞化した語で、一般には、「気力がくじけること。おじけること」（国語大辞典）をいみするが、語源辞典によれば、「低湿地」をいうらしい。とすれば、ヒルミとは、「芦の口沢川の両岸の湿地」ということになる。
②ヒルミとは建築用語で「曲り」をいう地域がある（方言大辞典）。これを活かせば、ヒルミとは、「芦の沢川の曲りの多いところ」となる。岡山の方言として採録されているので、伊那谷とは離れすぎているという不安はある。
全国地図にはヒルミ地名は記載が無いのが不安である。
【足沢・アシサハ・足沢日向・アシサハ日向】
アシサワ・アシサワヒナタ。
これらの小字は、芦の沢川が富田沢川に合流する地点の上流部に５ヵ所分布している。
まず、アシザワとは何か。芦の沢川がこれらの小字の間を流れており、この小字から川の名前が生まれたのであろう。ではこの小字の由来は何であろうか。二説を掲げたい。
①アシ（悪）から交通困難な所をいう（語源辞典）。急傾斜地を伴う沢である。沢に達するまでは足場の悪いところを通らなければならない。水を汲んだり洗い物をしたりするのに不都合だったのであろうか。
②現在、水田になっているところもある。芦の沢川に芦が生えていた可能性はある。ヨシと言い換えることが多かったらしいが、アシのままであることは気になる。
全国地図には、中・大字として、アシザワ地名は３９ヵ所と多い。

【ムカイボン日向】
　ムカイボンヒナタ。ムカイボシヒナタとなっているデータもある。
　この小字は、芦の沢川中流域の左岸の北向きの傾斜地にある、小さな小字である。ヒルミ小字に囲まれている。
　ムカイボン（シ）ヒナタとは何か。難解地名で、北向きの傾斜地にあるので、日当たりがいいとは思えない、ということもあって難しい。加えて、ボンとホシがある。
　ムカイボンといえば、盂蘭盆のことであるが、この場所で盆行事が行われたとは考えにくいし、日当たりのいい場所ではないので、採りあげないことにする。
　無理筋もあるが、めげずに、いくつか仮説を挙げてみたい。
①ムカイはムカイ（向）で、芦の沢川の対岸、つまり北原中字をいう。ボンはボウ（坊）の転で、「堂宇」のこと（語源辞典）。ムカイボンヒナタとは、「日当たりのいい御堂のある対岸の地」としたい。対岸には庚申原があって、御堂もあった可能性がある。
②ホシは動詞ホス（干）の連用形が名詞化した語で、「乾燥地」「水乏地」をいう（語源辞典）。ムカイボシヒナタとは、「日当たりのいい乾燥地である北原上平の段丘かその傾斜地の向かい側にある土地」となる。
③ホシは唐干田の略で、赤米を栽培している田んぼをいう（語源辞典）。芦の沢川の向こう側には現在でも水田がある。ムカイボシヒナタとは、「日当たりのいい唐干田のある向かい側の土地」というのはどうであろうか。北原諏訪社では、秋祭におこわ（赤飯）と甘酒を朴の葉にのせて進ぜていた（村誌）という。
　なお、全国地図には、当然のことながら、ムカイボシ地名もムカイボン地名も載っていない。
【トミダサハ】
　トミダサワ。
　この小字は、芦の沢川が富田沢川に合流直後の富田沢右岸にある。
　富田沢川→トミダサハであって、この逆ではないと思う。即ち、喬木村富田から流れてくる沢だから富田沢川であり、富田沢川が岸を洗う場所だからトミダサハと名づけられたのであろう。逆のトミダサハ→富田沢川→喬木村富田では、いかにも重すぎる。
　アシザワ→芦の沢川とは逆になっているがどうであろうか。
　全国地図には、トミダ地名は２４件、トミタ地名は３４件の記載がある。
【ジンガ・神加】
　ジンガ。
　これらの小字は、芦の沢川・富田沢川の右岸にある。
　ジンガとは何か。あまり聞かない地名である。二説を挙げる。
①ジンは「山間の小平地」をいい、カ（ガ）は場所を表す接尾語でアリカ、スミカ等のカと同じという（語源辞典）。ジンガとは、「山間の小平地となっている所」であろうか。この小字の地形はその通りの場所にはなっている。
②村誌には、下虎の北原のジンガはすぐ下に菅沼小大膳定利の親が一時住んでいた、との記載がある。ジンガに陣を張ったこともあるのではないか、というニュアンスか。村誌に従えば、ジンガとは、「陣営か陣屋のあった所」となる。
　全国地図にはジンガ地名は１ヵ所。

【南平】
ミナミヒラ。
この小字は、北原中字の中心地からみて南側の緩傾斜地にある。
ミナミヒラとは、文字通り、「中心地からみて南の方にある緩い傾斜地」ということになろうか。あるいは、北原諏訪社の南の方にある緩い傾斜地」か。ここのヒラは黄泉平坂のヒラである。
全国地図には、中・大字として４ヵ所に記載されている。
【サガリ・サカリ】
サガリ・サカリ。
サガリ小字は２ヵ所、サカリ小字は１ヵ所、いずれも北原中字の西側に位置している。
サガリもサカリもサカオリが転じた語で、サカ（坂）・オリ（下）から「北原諏訪社からみて、坂を下りた所」を意味する。坂を下りた所が平坦地になっている場合と、傾斜地になっている場合がある。
全国地図にも、中・大字として、８ヵ所に載っている。
【ウラ】
この小字は北原段丘の南端にあって、南側の芦の沢川の谷を見下ろす位置にある。
この小字は北原段丘の中心と思われるキタハラ小字の南隣にあり、イエノマエ小字と並んでいる。また、ウラには、「裏」の意の他に、逆に「家の前」とか「表」を意味する場合がある（語源辞典）。
以上のことから、ウラとは「中心地と思われる北原小字の表、即ち南側にある土地」を意味するものと思われる。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、５１ヵ所にも挙げられており、多い地名の一つである。
【垣外】
カイト。
この小字は北原段丘上にあり、キタハラ小字の北西側に接する。
カイトとは、今までは「住居跡」で通してきているが、もう一つ、ここで挙げておきたい。
それは、カイ（峡）・ト（処）で、「山間の小平地」とする解釈（語源辞典）である。
カイト地名は、この地域に多い地名らしく、全国地図には意外と少なく８ヵ所が中・大字として挙げられているだけである。
【シナミ】
この小字は、北原段丘のキタハラ小字の北側に接している。
シナミとは何を意味するのであろうか。二つの解釈を示す。
①シナは信濃のシナ、駄科のシナで、「段丘」をいう。ミ（廻）は「曲がった地形」（語源辞典）をいう。従って、シナミとは「縁辺が曲がった段丘」となる。
②シナミは動詞シナム（匿）の連用形が名詞化した語で、「隠田」をいう（語源辞典）。
全国地図には、シナミ地名が２ヵ所にある。
【北原】
キタハラ。
この小字は北原段丘の中心部にある。
キタはケタ（桁）の転か、「谷に沿った高い台地」としたい（語源辞典）。ミナバラに対する「北原」というのには無理があるからである。
全国地図には９１件とかなり多い。

【家ノ前・家裏】
イエノマエ・イエウラ。
これらの小字は北原段丘のキタハラ小字の南の方にある。
イエノマエのイエとは、どこの家か。この小字の北の方に、イエウラ小字が２ヵ所にある。マエとウラの間にキタハラ小字があることから、イエとはキタハラ小字にあった家と思われる。
イエノマエとは、「キタハラ小字の前の方、即ち南側の土地」をいい、イエウラとは「キタハラ小字の裏の方、すなわち北の方にある土地」をいう。
全国地図にも、イエノマエ地名は９ヵ所に挙げられているが、イエウラ地名は無い。但し、ウラ地名は５１ヵ所にもなる。イエウラという地名は忌避されていたのであろう。
【ムラ】
この小字は北原段丘の南東端の崖の上にある。
ムラとは何か。二通りの解釈が可能と思われる。
①ムレ（群）から「集落」のことをいう（語源辞典）。
②「村落の中心地。かっての中心地」を意味する（語源辞典）。
この小字はキタハラ小字のすぐ東側にあり、かっての中心地の一つであった可能性がある。
全国地図には７ヵ所にムラ地名の記載がある。
【ホリタ】
この小字は北原段丘の中央部にある小さな小字である。
ホリタ＝ホッタ（堀田）で、一般には「開墾地」のことをいう。ここでは「小規模な開墾でごく小さい田」か、あるいは「隠田」を意味する（語源辞典）という。
近世の堀田は「堀上田」のことで、春に水田の周辺を土で盛り上げ、秋には盛土の一部を切り落として排水するという簡便な水田形態で用排水路を持たずに潅漑を行っていたという（原田信男 2008）。
全国地図には、ホリタ地名は、中・大字として１２件が記載されている。
【バン上畑】
バンジョウバタ。
この小字は北原諏訪社の南の方にある。
バンジョウバタとは何を意味するのか。解釈を二つ。
①バンジョウとは、中世からの大工の呼び名であることから、バンジョウバタとは、「大工が耕作していた畑」となるが、免租の対象地であったかもしれない。
②バンジョウはバジョウメンの転訛した語という（語源辞典）。馬上免とは中世、荘園の騎馬検注使の立入を免除された耕地で、神社・寺院所有の耕作地であったという。このバンジョウバタは北原諏訪社の所領であったかもしれない。
全国地図に、バンジョウバタ地名は無いが、バンジョウ地名は１０ヵ所にある。
【中畑】
ナカバタ。
この小字は２ヵ所にあるが、いずれも北原段丘の東端にあり、上の段丘との境になっている傾斜地の裾にある。この付近は、段丘崖の湧水を利用したらしく、現在も集落を形成している。
ナカバタとは、「その地域の中心地にある畑」を意味するか。現在はいずれも住宅地になっている。

【田畑】
タバタ。
この小字は、北原段丘の東端にある、大きな小字である。
タバタといえば、一般的には、でんばた（田畑）のことをいう。田んぼと畑である。しかし、これだけでは地名にはなりにくいのではないだろうか。
語源辞典には、タバタはタ（接頭語）・ハタ（端）で、「台地の端」であるとしている。これを採りたい。
全国地図には、中・大字として、タバタ地名が４８ヵ所もある。
【マイダ】
この小字は北原段丘の南東端の崖の上にある。
マイダ←マエダ（前田）と転訛したもので、何のマエかというと、①「ナカバタ小字にあった屋敷」か，②「北原諏訪社」のどちらかであろう。
北原諏訪社の方は、２００ｍほど離れているのが気になる。
全国地図には、マイダ地名が１ヵ所にある。
【イエノ上・家上】
イエノウエ・イエガミ。
これらの小字は、北原諏訪社の境内とその周辺に集まっている。
イエノウエ＝イエガミで、「北原集落の奥の方」を指すものと思われる。”奥の方”というのは、集落の北側をいう。
全国地図には、イエノウエ地名が４件記載されているが、イエガミ地名は載っていない。
【宮ノ下】
ミヤノシタ。
北原諏訪社の隣の小字で、段丘崖に懸かっている。
ミヤノシタとは、当然のことながら、北原諏訪社の下側にある土地で、諏訪社の西側になる。
全国地図には、中・大字としてミヤノシタ地名は６５件が記載されている。
【前ノ沢・前ノ沢ヒカゲ・下前沢】
マエノサワ・マエノサワヒカゲ・シモマエザワ。
これらの小字は、北原段丘の西の崖地にある。
マエノサワとは、「北原諏訪社の前にある沢」で、標高の低い方を”前”とみているようだ。
マエノサワヒカゲは、「諏訪社の前、すなわち西の方にある急傾斜地で日当たりのよくない土地」となっている。
シモマエザワは、「前ノ沢川の下流域にある小渓谷」となる。
国土地理院の全国地図には、マエノサワ地名は３ヵ所にある。
【ホッキ】
この小字は、県道下久堅知久平線に沿った東側の急傾斜地にある。天竜川の左岸になる。
ホッキとは、「渓谷沿いの急傾斜面に通路の開かれた所」（語源辞典）となっており、下伊那地方の方言とされている。「歩危」の漢字を宛てることが多い。全国的には、こうした場所をホキと名づけている所が多い。
ホッキ小字は、竜丘・龍江・下久堅の南原にもある。
【はちまん】
ハチマン。
この小字は、北原段丘の西端にある小さな小字。
「八幡宮があった地」と思われる。天保１３年の虎岩村北原神々にある八幡社（村誌）はこれか。

【ノヒラ・ヒラ】

これらの小字は北原段丘から天竜河畔に下る傾斜地にあり、ノヒラ小字は２ヵ所にあるヒラ小字に挟まれている。

ヒラは「傾斜地」をいう。黄泉平坂のヒラである。

ノヒラとは何か。語源辞典によりながら二説を挙げる。

①ノはヌ（沼）から転じたもので、「湿地」のこと。ノヒラとは、「自然湧水のある傾斜地」を意味する。

②ノはノ（野）で、「入会地の草刈場」をいう。ノヒラとは、「入会地で草刈場となっている傾斜地」を意味する。

全国地図には１件だけノヒラ地名が載っていて、「野平」の字を宛てている。

【大善畑・大善ヤシキ】

ダイゼンバタ・ダイゼンヤシキ。

これらの小字は、県道下久堅知久平線の東側にあって、崖が天竜川に落ちる斜面上にある。

ダイゼンは固有名詞で、村誌によれば、菅沼小大膳定利のこと。織田信長の死後、徳川家康によって派遣されてきた代官で、ダイゼンヤシキ小字には定利の親が一時住んでいたという。その場所が、ダイゼンヤシキと思われる。

ダイゼンバタはダイゼンヤシキに住んでいた人が耕作していたということであろう。

当然のことであるが、全国地図には、ダイゼンバタ地名もダイゼンヤシキ地名も記載はない。

【ヲト洞】

オトボラ。

この小字も県道下久堅知久平線に沿った傾斜地にあり、ダイゼン小字の間にあって富田沢川に接している。

オトとは何か。ここで考えられるのは三つ。

①オトは動詞オトス（落）の語幹で、「傾斜地。崖」をいう（語源辞典）。オトボラとは、「崖のある小さな谷」となる。しかし、洞には崖はつきもので、当然すぎて地名にはなりにくいか。

②オトはオト（音）で、オトボラとは、「富田沢川の川音が響く小さな谷」を意味する。この小字のある所で、富田沢川は大きく曲がっているので、川音は激しいものと思われる。

③この小字は、イドボラ小字に挟まれているので、「ヲ←井」と写し間違えたことも考えられるがどうであろうか。

全国地図には、オトボラ地名もオトホラ地名も載ってはいない。

【井戸洞・イド洞・イト洞】

イドボラ・イトボラ。

これらの小字は、富田沢川下流域に２ヵ所、亀平段丘に３ヵ所ある。

イド（ト）ボラとは何か。イは掘り井戸というよりは、水路や川の意味で地名に使われることが多いらしい（語源辞典）。

イドボラ小字の所在場所によって、意味も異なるように思えるので、次のように分けて考える。

富田沢川下流域のイドボラは、「富田沢川の川辺の物洗い場のある小さな谷」（語源辞典）としたい。ここでいうイとは、富田沢川のことをいう。

亀平のイド（ト）ボラは、ヰ（井）・ド（処）で、「湧水があって、水を汲み取ることができる小さな谷」か。

国土地理院の全国地図には、イドボラ地名が２ヵ所、イドホラ地名が１ヵ所、記載されている。

【舟林】
フナバヤシ。
この小字は、二方を天竜川と富田沢川に接している。
フナバヤシとは、字面を追っていけば、「舟を発着させた樹木の生えている所」となりそうだ。舟を富田沢川に引き込んでいたかもしれない。知久平の渡船場とは別に、虎岩村にも通船の継所が万延二年に設置されているから（村誌）、それ以前から通船を利用し荷の積み下ろしをする港があったと思われる。その虎岩村の港が、このフナバヤシだったのではないかと思われる。
富田沢川の河口が水量が多くて港には適していたのではないかと想像している。
なお、全国地図には、フナバヤシ地名は１件の記載もない。
【サシキトウ・サジキ堂・サジキダウ】
サシキトウ・サジキドウ。
これらの小字は、天竜川に沿った県道下久堅知久平線の東西に広がっている。
いずれの小字も同じことを意味していると思われる。サジキ（桟敷）とは、「祭の行列などを見物するために高く構えた床」（広辞苑）である。ここでは、段丘を桟敷に見立てたものであろう。
ドウはドウ（堂）だから、「仏堂のあった所」（語源辞典）としたいのであるが、あったかどうかがはっきりしない。現在、亀平第三組合生活センターがあるので、仏堂が存在した可能性はある。ドウには、「川音による音響地名」（語源辞典）とする見方もある。
では、サジキドウとは何か。二説を挙げる。
①サジキドウとは、「桟敷に見立てた段丘にある仏堂」をいう。
②サジキドウとは、「富田沢川の川音が響く、桟敷に見立てた段丘」か。この場合は、語順に問題がありそうであるが、富田沢川がほぼ直角に曲がっており、川音が激しかったと思われる。
全国地図には、サジキドウ地名もサシキドウ地名も載っていない。
【天伯・テンバク】
テンパク・テンバク。
いずれもテンパクのこと。天竜川岸にあり、県道と天竜川の間にある。
テンパクは広辞苑にも国語大辞典にも載っていないが、民俗大辞典には、「信州を分布の中心とし、東北・関東から東海、伊勢志摩にかけて広く見られる神名」とある。その性格は多様であるが、ここでは水神として祀られているものと思われる。
元禄二年（1689）の虎岩村神社数をみると、天伯は９社となっているが、天保十三年（1842）には、天伯１社、天伯山神１社と減少している（村誌）。
この天竜河畔のテンパクにも祠があったのではないだろうか。
全国地図には４ヵ所に、中・大字として記載されている。
【イチバ】
この小字は、天竜川と県道下久堅知久平線に挟まれた河原にある。
イチバとは、定期的に市が開かれる場所で、古くは河原、中洲、山野、坂などが市の場であったという（民俗大辞典）。
河原のこの場所で市が立っていたのであろう。市の場にはしばしば自然の石や木柱が市神として祀られたというが、ここではどうであったろうか。

【淵田】
フチダ。
この小字も、天竜川と県道下久堅知久平線の間に挟まれている。
フチダとは何を意味するのか。
フチはフチ（縁）で、ダ←タ（処）と濁音化したもので、場所を表す接尾語。フチダとは、「川べりにある土地」を意味するものと思われる。
全国地図には１ヵ所にフチダ（淵田）地名がある。
【フカサハ・深沢】
フカサワ。
これらの小字は、宮の沢川の下流域で段丘を下る急傾斜地にある。
フカサワとは、字面通りの「谷の深い沢」を意味するものと思われる。
全国地図には、中・大字として５０ヵ所にフカサワ地名は挙げられている。
【京田】
キョウデン。
この小字は、亀平の天竜川河原から一段目の段丘上にある。
キョウデンとは何か。語源辞典によれば、二通りの解釈がある。
①キョウデン←キュウデン（給田）と転じたもので、「中世、領主が荘官や地頭に給与した田地。領主にたいする年貢課役を免除され、荘官・地頭はこれらの田地を自分に所属する下人、所従に耕作させた」（国語大辞典）を意味する。
②キョウデンはキョウデン（経田）のことで、「寺院に寄進された田」をいう。近くには、仏堂があったかもしれない「サジキ堂」小字があるが、支えにはならないか。
全国地図には、キョウデン地名は中・大字として１４ヵ所が挙げられている。
【コセヒラ】
この小字はキョウデン小字の段丘崖になっており、県道下久堅知久平線の東側の傾斜地にある。
コセヒラのコセは長野県の一部で、「一方が山側になった道」をいう（国語大辞典）。ヒラは「坂道」のこと。黄泉平坂のヒラである。
コセヒラとは、「東側が山の急傾斜地になっている道のある坂」か。この小字には、県道から急傾斜地を登る広い道が分岐している。
全国地図にはコセヒラ地名は載っていない。
【イリヤウ】
イリヨウ。
この小字は、キョウデン小字とトヤバ小字の間にある細長い小字である。村誌によれば、この小字でもキョウデン・コセ（コセヒラか）・ハンノウなどの小字と共に井水を利用していたらしい。富田沢川から引いていた井水である。
イリヨウ（入り用）ともイリョウ（井料）ともとれるが、「その収穫物が井水の維持管理のための費用に使われた耕作地」と考えてほぼ間違いないように思える。
なお、全国地図にはイリヨウ地名は載っていない。
【トヤバ】
イリヨウ小字の傾斜地の上の段丘にある小字で、西北西に開けている。
トヤバはトヤバ（鳥屋場）で、下伊那郡と栃木県安蘇郡の方言といわれており、「網を張って小鳥をとる所」となっている（国語大辞典）。
全国地図には２ヵ所に記載がある。

【モチイ田】
　モチイダ。
　この小字は、トヤバ小字と同じ段丘面にあり、クボタ小字を挟んで２ヵ所にある。西側のモチイダ小字の西隣はキョウデン小字になっている。
　モチイダとは何か。これが意外と難しい。二通りの解釈を示したい。
①モチイは動詞モチイル（用）の連用形で名詞化したもの。モチイルとは、「役に立てて使う」こと。では何に使ったのか。考えられるのは、寺社か井水の管理維持。モチイダとは、「寺社か井水の管理維持に役立てた田んぼ」としておきたい。
②モチイダ←モチダ（持田）と転訛したもので、モチイダとは、宮持田のことで、「寺社所有の水田」を意味する。
　国土地理院の２．５万分の１地図には、中・大字として、モチイダ（持井田）地名は１ヵ所が挙げられている。
【ハンノウ田】
　ハンノウタ。
　この小字はトヤバ小字と同じ段丘面にある。
　ハンノウタとは何か。仮説を二つ。
①ハンノウはハンノウ（半納）で、「災害などにより年貢が半減され、これが恒久化した地」（語源辞典）としたい。ハンノウタとは、「災害などで年貢が半減され、これが恒久化した田んぼ」となる。
②半納を半分ずつの意に考えて、ハンノウタとは、「領主と寺社に半分ずつ年貢を納めている土地」とすることもあったと思われる。
　全国地図にはハンノウタ地名もハンノウダ地名も無いが、この地域特有の地名かもしれない。
【大門尻】
　ダイモンジリ。
　この小字は、トヤバ小字の段丘から登る緩い傾斜地にある。
　ダイモン小字群は、ここから、直線距離にして南の方、５００ｍほどの所にあるが、段丘面にほぼ平行に走る道路で繋がっている。
　ダイモン（大門）は、大きな門をいうが、一般的には、寺院の門をいうことが多い。少し離れてはいるが、ここでダイモンといえば、常信院の総門のことであろう。
　ダイモンジリとは、「常信院の総門の奥にある土地」としたい。
　全国地図には、ダイモンジリ地名は載っていないが、ダイモン地名は９３ヵ所と多い。
【ホウシガキ・ホシガキ】
　これらの小字は、ダイモンジリ小字の傾斜地と北側に連なっている斜面にある。
　ホシガキ←ホウシガキと変化したもので、逆ではないと思う。
　ホウシガキとは何か。二通りの解釈を挙げておきたい。
①ホウシはホウシ（法師）で僧侶のこと。ガキ←カキ（垣）と濁音化したもので、ホウシガキとは、「僧侶が住んでいる，垣根のあるところ」か。
②ガキはガキ（餓鬼）で「施餓鬼」のこと（語源辞典）。ホウシガキとは、「僧侶が施餓鬼を行っていた所」で、施餓鬼堂があったのかもしれない。
　この他に、ガキを動詞カク（欠）の連用形が名詞化した語とする解釈も成立しそうであるが、崩壊地と僧侶の住居とは繋がりにくいとみて、採りあげなかった。
　全国地図には、いずれも記載が無い。

【百田】
ヒャクダ。
この小字は、傾斜地を登る亀平の大きな道路に沿っている。
ヒャク（百）は「数が多いこと」（語源辞典）だから、ヒャクダとは、「たくさんの田んぼのある所」ということになる。ここでは棚田が並んでいる。
この地域にはヒャクダ（百田）小字が多いが、全国地図には２ヵ所にあるだけ。
【カンジョウ田】
カンジョウタ。
この小字は、県道下久堅知久平線の東側にある。傾斜地とその上の小平坦地を含んでいる。
これもまた難しい地名である。
カンジョウには、①「感状」、②「勘定」と③「勧請」がある。
①「感状」であれば、カンジョウタは、「知行を宛て行う旨を記した書状が出されている水田」ということになるが、ぎくしゃくとした感じは否めない。
②「勘定」であれば、カンジョウタは、「年貢を代金で支払うことになっている水田」ということになるが、よく使われている「銭田」とはどう異なるのか、疑問が残る。
③「勧請」であれば、「収穫した稲を神仏の分霊を請じ迎えてまつるための費用にするための水田」となる。どの神仏かは決定できないが、近くには、テンパク（天伯）、サジキドウ（サジキ堂）そしてキョウデン（京田）などの小字がある。
なお、全国地図にはカンジョウタ地名は一つも無い。
【塚越】
ツカゴシ。
この小字には塚越古墳がある。県道下久堅知久平線より５０ｍほど高い東側の段丘上にある。塚越古墳は村誌によれば、円墳であるが、宅地造成で崩れており、径４．３ｍ、高さ１．４ｍの隆起は残されているという。
ゴシには、「付近」の意味があるが、他に「水が湧き出る地」をいう場合がある（語源辞典）。動詞コス（漉）の連用形が名詞化したものであるという。
以上から、ツカゴシには、二つの意味がありそうだ。
①ツカゴシとは、「古墳がある付近の土地」をいう。
②ツカゴシとは、「古墳があって自然湧水のあるところ」を意味する。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、ツカゴシ地名は１８ヵ所で挙げられている。この地域の中でもツカゴシ小字は多い。
【コダイラ】
この小字は２ヵ所にある。一つは富田沢川下流の左岸に。もう一つはもっと東の上の段丘にあるミョウジンバラ（明神原）小字に囲まれている。
コダイラとは、コは「小さい」を意味する接頭語であるので、文字通り、「山中にあるちょっとした平らなところ」か。
カミ（神）→コウ→コとする（語源辞典）は、やや無理筋だが、これを活かせば、「近くに神を祀る山中の平らな所」となる。東側の小さなコダイラ小字はミョウジンバラ（明神原）小字に囲まれているので、現場は、まさにその通りではあるが、採りあげにくい。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、コダイラ地名は１９ヵ所にも記載されている。

【ナギノハキ】
ナギノワキ。
この小字は２ヵ所にある。一つは富田沢川が芦の沢川と合流する付近の左岸にあり、もう一つは、それより上流の富田沢川の両岸にかかる小さな小字である。
ナギノハキとは、①字面通りに、「崩壊地の傍らの地」と解釈するのが普通であるが、②ワキは動詞ワキ（湧）の連用形が名詞化した用例で、「湧水地」を意味することもある（語源辞典）。とすると、ナギノハキは、「崩壊地があって、自然湧水のあるところ」となる。
全国地図には、ナギノワキ地名は１件もない。
【橋場】
ハシバ。
この小字は、ナギノハキ小字を挟んで２ヵ所にある。これらの小字はそれぞれ富田沢川の両岸を跨いでいる。
ハシバは「富田沢川に架かる橋のある（あった）所」を意味する。上流側のハシバには、現在橋がかかっており、下流側は幅が広いので水面すれすれに架かっていた昔の橋の跡かもしれない。
全国地図には、３８ヵ所と多いハシバ地名が記載されている。
【丸山】
マルヤマ。
富田沢川の右岸断崖にある。
マルヤマとは、「一方から見て、鉢を伏せたような山」のことをいう。勿論、どこから見ても鉢を伏せたような円錐形の山もマルヤマであるが、この亀平のマルヤマのように左岸下流側からは、丸く見える場合もマルヤマということもあるようだ。
【井カイト】
イカイト。
この小字は、亀平集落の西端にある。
イカイトとは、「水を汲み取ることができる湧水のある住居跡」か。
全国地図には、イガイト地名もイカイト地名も載っていない。
【亀平・カメタイラ】
カメダイラ・カメタイラ。
これらの小字は、亀平の集落の段丘上にある。
村誌によると、祖先が畑を掘っていて立派な甕が出てきたので、カメダイラという地名になったという。
だから、カメダイラとは、「甕が出土した山中の平坦地」ということになる。中世には銭が大量に蓄蔵されたといわれている。それらが忘れられていて銭の入った甕が後に掘り出されるケースが全国的には多いらしい。
カメ←カミ（神）とする解釈もある。上の段丘上にはミョウジンバラ（明神原）小字があるので、ありえないことではないが、ここでは村誌に従っておきたい。
カメタイラ＝「亀平」であろう。
なお、全国地図には、カメダイラ地名もカメタイラ地名も記載は無い。
【カメタイケ】
この小字はカメダイラ小字に囲まれている。
分かりにくい地名で、カメタイケとは、①「亀平にあった池」でもあったのか、それとも、②ケ←ラと転じたもので、土地を分けるときに、小字名の一部だけを区別するために変えたのか。よく分からない。
全国地図には、カメタイケ地名は記載が無い。

【明神原】
ミョウジンバラ。
この小字は亀平上段の段丘にあり、中には、諏訪明神社がある。
ミョウジンバラとは、「諏訪明神が祀られている神聖な平坦地」である。
この諏訪明神社境内には、青面金剛像が複数あり、この付近一帯の庚申講が盛んであった様を偲ぶことができる。
しかし、全国地図には、不思議なことであるが、ミョウジンバラ地名もミョウジンハラ地名も記載はされていない。
【宮下・宮ノ前】
ミヤシタ・ミヤノマエ。
ミヤシタ小字は伊那南部広域農道を挟んで、諏訪明神社の西側の低いところにある。ミヤノマエ小字は神社の正面の南側にある。
いずれも字面通りで、ミヤシタとは「明神社の斜面の下側にある土地」であり、ミヤノマエとは、「明神社の前方、南の方にある土地」を意味する。
全国地図でも、これらの地名は多く、ミヤシタ地名は８４ヵ所、ミヤノマエ地名は９４ヵ所が中・大字として挙げられている。
【上平】
ウエダイラ。
北原の上段にウワダイラ小字はあったが、ウエダイラ小字は亀平の中心地の上の段丘に２ヵ所ある。
ウワダイラとは、「亀平の上段にある土地」を意味する。
全国地図には、ウエダイラ地名は、中・大字として、１５件が記載されており、その全てに「上平」の字が宛てられている。
【フジツカ・フジヅカ・冨士塚平・フジツカ平・フジツカタイラ】
フジツ（ヅ）カ・フジツ（ヅ）カタ（ダ）イラ。
これらの小字は、芦の沢川と洞ヶ沢（富田沢川支流）の間にある側稜及びその周辺にあり、喬木村境に近い。諏訪明神社東側の側稜の尾根が中心になっている。
亀平の富士信仰の中心地となる富士山に見立てられている山は、フジツカ小字の南東側にあるツシマ山と思われる。標高 580.7m で、ほぼ円錐形の山となっている。
富士講が行われたのは、その近くのフジツカ、富士塚、フジヅカ平フジヅカなどの小字で、さらに少し離れてはいるが、西側や北西側のフジヅカタイラやフジヅカ小字でも富士講は行われたのではないだろうか。
全国地図で、中・大字になっているフジヅカ地名は１１ヵ所と意外に少ない。この地方のフジヅカ小字は、非常に多い。旧村でフジヅカ小字が無い所はないと思われる。
【井戸洞・イド洞．イト洞】
イドボラ・イトボラ。
これらの小字は、諏訪明神社の西側の低い段丘にある富田沢川の小さな沢筋につながっている。
イト、イドはいずれも自然の湧水で、それを利用していたのがイト（ド）ボラ・井戸洞であったと思われる。
上流から順に、イド洞→井戸洞→イト洞と自然の湧水は流れていたのであろう。その末端に亀平の公民館がある。
国土地理院の全国地図には、イドボラ地名が２ヵ所に挙げられており、「井戸洞」の字が宛てられている。

【タイザ・タイサ】

タイサ小字が２ヵ所、タイザ小字が２ヵ所。いずれも諏訪明神社の南～南西方向にある。

タイサ＝タイザと思われるが、タイザの意味がはっきりしない。

時又のタイザは、トノガイト小字の南側にあり、有力者との関わりを思わせる。また駄科のタイザは諏訪神社の南側にある。これらのことから、タイザとは、①「芸能集団が田をつくりながら居住していた場所」。②「段丘などの平坦な場所で、貴人や神仏がおわした所」とした。

龍江にも３ヵ所、タイザ小字がある。

兎城の西側と樋ヶ沢右岸のカミノボウ小字の南西側、三つ目が天竜峡の竜峡園跡地。三つ目の神社が直線で５００ｍほど離れているが、ほぼ②説に近い。

下虎岩のタイザのデータを加えるとどうなるであろうか。整理してみたい。

Ⅰ．タイザ地名は伊那谷南部に多い。タイザ分布がどこまで広がるのか、確かめてはいないが、全国的には少ないと思われる。

Ⅱ．タイザ小字の貴人住居・寺社との関係は、タイザ小字との位置が近いことから明らかである。

Ⅲ．タイザ小字のある所は、貴人の居住地や境内の中ではなく、必ずある程度の距離を置いている。中には、天竜峡のタイザのように、直線で５００ｍ離れている所もある。

以上のことから、ここで三つ目の仮説を提示したい。

③タイは「たいのや（対屋）」の略で、もともとは寝殿造りの正殿に対する別棟の建物をいったらしいが、後世、「別棟の離れ屋」をいうようになったという（国語大辞典）。ザは基本的には、「仏事や神事を修行し、また教理を抗議する所」であるが、「主として中世、神社の氏子が祭りを行う特定の組織・集団」をいうこともある。これを宮座と呼ぶことが多い（以上は国語大辞典）。従って、タイザとは、「寺院の仏事や神社の祭を行うために組織された集団が使用した寺院や神社とは別棟の離れ屋のあった所」となる。

こうしたタイザの離れは芸能集団が実演したり、宿泊したりしたこともあったかもしれない。

全国地図にはタイザ地名は２ヵ所に載っているが、宛てられている字は「間人」で、寺社とは関係はしていない。

【サイノカミ・サイノ神】

サイノカミ。

これらの小字は３ヵ所にあり、諏訪神明社の南の方になる。

サエノカミともいい、道祖神ともいう。「塞の神」の字を宛てる。道の神であり、防塞・除災・縁結び・夫婦和合などの神ともされる。村境を通るときに拝んだり供え物をしたりする。虫送りや風邪の神送りなど災いを外の世界に送りだそうとするときに、この神のまつられているところまで送ってくることにしているところは各地に見られる（民俗大辞典）。

この諏訪明神社近くのサイノカミ小字群は喬木村との境界を意識して祀られていると思われる。石碑等の痕跡はまだ確認していない。

国土地理院の 2.5 万分の１全国地図には、中・大字として、サイノカミ地名が 29 件も挙げられている。

【一番洞・二番洞】
イチバンボラ・ニバンボラ
いずれも喬木村境の洞で、諏訪明神社の東側にある。フジツカ丘陵の北東側にある、大きな洞がイチバンボラで、東側にある、いくつかの小さな洞がニバンボラになっている。いずれも芦ノ沢川の支流が開析した洞である。
ホラは伊那谷南部の方言で、「小さな谷」をいう（長野県方言辞典）。
全国地図には、イチバンボラ地名は載っていない。
【大洞】
オオボラ。
この小字も喬木村との村境にあり、喬木村側の芦ノ沢川の大きな洞に面している。
オオボラとは文字通り、「大きな洞に面したところ」を意味するものと思われる。
全国地図には、オオボラ地名は、中・大字として、意外に多く、20 ヵ所も挙げられている
【城越】
ジョウコシ。
これも喬木村との村境にある。東側には、富田の城山公園がある。富田城趾である。富田城趾から側稜に沿って尾根を下りてきた所にジョウコシ小字がある。
ジョウコシとは、「城があった山の麓」のこと。
全国地図には、不思議なことに、ジョウコシ地名は 1 件も載っていない。
【アラシウ】
この小字は喬木村の富田城趾とジョウコシ小字の間にある、北向きの斜面にある。
アラシウとは何を意味するのか、よくわからないが、敢えて三つの解釈をあげておきたい。いずれもぴったりとはしないが。
①アラシは「山から伐り出した材木を落とす坂道」（国語大辞典）。神奈川県、東筑摩郡、静岡県西部の方言だという。伊那谷南部でも使っている。ウはウ（迂）で、「曲がること」（広辞苑）をいう。アラシウとは、「材木を落とす曲がった坂道」であろうか。
②アラシは「山の斜面で営まれる焼畑」（語源辞典）で、ウ（芋）で「さといもの類」（国語大辞典）をいうらしい。アラシウとは、「さといもを作っている傾斜地の焼畑」か。
③アラはアラ（粗）で、「崩壊地形」をいい、シウ←シフで「～になった所」であるから、アラシフとは、「崩壊地になっている所」をいう（語源辞典）。
当然であるが、全国地図には、アラシウ地名は載っていない。
【ツシマ山・ツシマ山日カゲ・ツシマ山日向】
これらの小字は喬木村境に集中している。ツシマヤマ小字は二ヵ所にあり、小さな方はツシマ山の麓にある。富士講で富士山に見立てた山である。
ツシマ山日カゲはツシマ山続きの日陰地であるが、南面しているが谷が深いために日影になっているためか。
ツシマ山日向は南面する傾斜地の高いところで、日当たりのいい所である。
ツシマヤマとは何か。
ツはツ（津）で、「水の湧き出る所」（国語大辞典）であり、シマはシマ（島）で、「四方から見える山」（和句解）をいう。ツシマヤマとは、「自然湧水のある四方から見える山」である。
全国地図には無い。

【セハ】
セワ。
この小字は、富田沢川の狭窄部の渓谷に二ヵ所ある。大きい方は富田沢川の右岸の急傾斜地に、小さいな方は支流の小さな谷にある。
セハはセ（瀬）・ハ（端）で、瀬は富田沢川とその支流のこと。ハ（端）は縁辺を意味する。セハとは、「縁辺を早瀬が流れる所」をいう。
あるいは、セ（狭）で、ハ（端）は単なる「場所」（語源辞典）を意味し、セハは「狭くて急峻な谷」をいうこともあるかもしれない。
全国地図にはセハ地名は載っていない。
【カゴ畑・カゴバタ・カゴハタ】
これらの小字は、富田沢川の狭窄部の両岸に分布している。「カゴ畑」小字は三ヵ所、カゴバタ小字が二ヵ所、カゴハタ小字が一ヵ所となっている。
カゴハ（バ）タとは何を意味するのだろうか。二説を挙げたい。
①カゴは古語コゴシ（凝）の語幹コゴの転で、「険しい地形」をいう。ハタ（バタ）は、「川岸」のこと（以上は語源辞典）。カゴハ（バ）タとは、「富田沢川の川岸の険しい急傾斜地」を意味する。
②ハタは「焼畑」をいう。かなりの急傾斜地でも焼畑が行われたらしい。カゴハ（バ）タとは、「焼畑が行われた急傾斜地」か。
国土地理院の2.5万分の１全国地図には、中・大字としてカゴハタ地名が１ヵ所にあり、「楮畑」の字が宛てられている。
【ニセンマチ・二千町】
ニセンマチ。
これらの小字はフジツカ丘陵の南西側斜面にあり、富田沢川右岸に当たる。
ニセンマチとは何か。これも難しい地名である。
ニセンマチ←ニセマチと撥音便化したか。ニセ←ノセの転（語源辞典）で、遠山では、ノセとは「ゆるやかな傾斜」をいう（長野県方言辞典）。
マチはマチ（襠）で、袴の内股から「山間のかくれ地」を意味するという（語源辞典）。
以上から、ニセンマチとは、「山間のかくれ地になっている、緩い傾斜地」となる。
国土地理院の全国地図には、ニセンマチ地名は記載されていない。
【コウザ・カウザ】
コウザ。
これらの小字は原ノ平集落の東の高い所にあって、伊那南部広域農道の両側に広がる。また、諏訪明神社の南方になる。
コウザとは何を意味しているのか、これもよくわからない小字であるが、二説を挙げておきたい。
①コウザはコウザ（神座）で、「神を祀っている場所」となるが、神の気配がない。ただすぐ北側に接しているのがカミナシ小字で、この小字が神に関係しているとすれば、この仮説は生きてくる。
②コウザはコウザ（高座）で、一般には、説教師や僧侶、あるいは寄席の芸人が座る一段と高い所をいうが、ここでは、コウザとは「タイサ小字やカミナシ小字よりも一段と高い所」のこと。
全国地図には、中・大字として、コウザ地名は８ヵ所あり、いずれも「高座」の字を宛てている。

【カミナシ】

この小字は、諏訪明神社の南方、コウザ小字の北側になり、伊那南部広域農道の両側にまたがっている。

カミナシとは何を意味するのか、これも難しい地名である。仮説を三つ。

①カミナシは一般的には、カミナシ（上無）で、「これより上はない。最高である」ということ（国語大辞典）。ここでのカミナシは、「この付近の最高点がある所」を意味するか。ここには、標高 526.2mの峯がある。しかしナシ（無）とする地名は少ないという（語源辞典）。

②カミはカミ（神）で、「神聖な地」をいう。ナシは動詞ナス（成）の連用形が名詞化した語で、「～になった所」を意味する（以上語源辞典）。カミナシとは、「神聖な地となっている所」をいうか。明確な印はないが、神聖な所になっているという意味を含むか。

③カミはカミ（神）。ナシはナラシ（平）の転で、「平坦地」のこと（語源辞典）。カミナシとは、「神聖な場所で、平坦地のある所」であろうか。

全国地図には、中・大字として、カミナシ地名が 1 ヵ所にある。「上梨」の字を宛てている。

【カシラナシ・カシラナシ日向】

これらの小字は喬木村との村境で、フジツカ丘陵の南側の谷にある。

カシラナシとは何か。二説を挙げる。

①カミナシ小字が近くにあり、同じ地形を言葉で言い直していることも考えられる。カシラナシはカシラ（頭）・ナシ（無）で、「頭になるような高い所がない場所」となる。ただ、先にも触れたように、ナシ（無）を意味する地名は少ない（語源辞典）というのが気になる。

②カシラは「川の上流」をいう（語源辞典）。ナシはナラシ（平）で「緩傾斜地」のこと（語源辞典）。従って、カシラナシは、「川の上流部の緩傾斜地」を意味する。

カシラナシヒナタは、カシラナシ小字の南側にあって、北向きの緩傾斜地となっている。傾斜が緩いので、日当たりも悪くはないと思われる。

全国地図には、中・大字として、カシラナシ地名が 4 ヵ所にあり、ずべて「頭無」の文字が宛てられている。

【タル下】

タルシタ。

この小字は富田沢川中流域の狭窄部にある。

タルはタル（垂）で、「滝」のこと。三遠南信地域の方言である。

タルシタとは、「滝のある下の方」であるが、「谷にある水田」を意味するものと思われる（原田信男 2008）。

全国地図にタルシタ地名が無いのは、方言であるためだろうか。

【山ノ畑】

ヤマノハタ。

この小字は、2 ヵ所にあるが、いずれも富田沢川右岸の西向きの傾斜地にある。

ヤマノハタは定畑にたいして、切替畑とか切畑などとも呼ばれている「焼畑」を意味する。傾斜地に作られることが多い。かっては、定畑を畠といい、焼畑を畑としたが、現在でも「畑」と「畠」を区別している地方はあるという。

全国地図には、ヤマノハタ地名は載っていないが、ヤマハタ地名は 10 ヵ所にあり、ヤマバタ地名も 1 ヵ所にある。

【フツクデ・ブツクデ】
フツクデ小字は１ヵ所、ブツクデ小字は２ヵ所にある。これらの小字は、富田沢川左岸の傾斜地にあるが、現在は一部が水田になっている。
フツクデ・ブツクデ←ブツクデン（仏供田）と転化したもので、仏供田とは、「寺院の所有する田地で、賦課を免除された免田であり、収穫米は仏への供物にあてられた」（民俗大辞典）とある。
ここで寺院といえば、南の方にある常信院のことであろうか。
なお、全国地図には、フツクデ地名・ブツクデ地名はもちろんであるが、ブツクデン地名も載っていない。
【ヤノ入】
ヤノイリ。
この小字は、富田沢川左岸の渓谷の北向き傾斜地にある。
ヤはヤツ（萢）の略で、「湿地」をいう。ノは助詞で、イリ（入）は「奥」のこと。
ヤノイリとは、「湿地の奥である、斜面の上の方」をいう。
この小字は段丘崖の中腹にあって、自然湧水があり、下流側のブツクテ小字には水田がある。
全国地図には、中・大字として、ヤノイリ地名は１ヵ所にあり、「谷ノ入」の字を宛てている。
【アミダメン】
この小字は、富田沢川左岸の段丘上にある。
アミダメンは阿弥陀免で、「阿弥陀様を祀る阿弥陀堂を維持する費用に宛てられた田んぼで、免租されていた」ことを意味する。
村誌によれば、元禄二年の寺社改帳には、虎岩村の阿弥陀堂のことが記されている。
しかし、なぜか、全国地図にはアミダメンは載っていない。
【ガラン坂】
ガランザカ。
この小字は、富田沢川左岸の原ノ平段丘へ登る傾斜地にある。
ガランザカとは何か。敢えて二説を挙げたい。
①ガランといえばガラン（伽藍）で、寺院の建築物のことをいう。ガランザカとは、「寺院の建物がある緩傾斜地」となるが、この付近に寺院があったかどうか、いまのところはっきりしない。ガランドであれば、「山の側面が欠け落ちて、崖となったところ」という意味があるが、ここではガランドを用いることは難しい。
②ガラン←ガランガラン←ガラガラと転訛したもので、ガラガラは「物のくずれ落ちる音」（国語大辞典）であることから、ガランザカとは、「かって、大雨や地震などの災害時に崖が崩れたことのある坂」である可能性もある。
なお、全国地図にはガランザカ地名は載っていない。
【ナカワリ】
この小字は、富田沢川左岸の段丘上の水田地帯にある。
ナカワリとは、何を意味するのか。
ナカはナカ（中）で、「中ほどのこと」をいい、ワリは動詞ワル（割）の連用形で「区分された所」をいう。
ナカワリとは、「短冊形に分けられた、その中ほどにある区分された所」を意味するものと思われる。
全国地図にはナカワリ地名は３ヵ所にある。

【クネガ】
この小字は、富田沢川左岸の段丘上の北端にある。段丘上は水田地帯になっている。
クネは動詞クネル（曲。拗）の語幹で「曲がる」の意。ガ←カの濁音化で、「場所」を表す接尾語（広辞苑）。
従って、クネガとは、「曲がった田の周囲の畦のある所」を意味するか。水田になっている丘陵の端で、水漏れの多いことも考えられるので、目立つほどにしっかりした畦にする必要があったに相違ない。
全国地図には、クネガ地名は無い。
【中ソリ・中ゾリ】
ナカソリ・ナカゾリ。
これらの小字も、ナカワリ小字のある段丘の水田地帯にある。ナカゾリ小字は一ヵ所、ナカソリ小字が二ヵ所にあるが、一つは斜面上にある。
ナカゾリ＝ナカソリで、ソリには「何枚かの田が階段をなしているうちの一番上と下の中間の田」（語源辞典）という意味がある。ナカ（中）は意味が重複するが、ナカソリとは、「高い田んぼと低い田んぼの間にある田んぼ」と思われる。
ナカソリ小字の一つは斜面上にあるので、「二つの段丘の間にある傾斜地の崖」としておきたい。
本来ならば、三ヵ所とも同じ意味でなければならないが、一致させることはできなかった。どこかに無理があるのかもしれない。
全国地図には、中・大字として、ナカゾリ地名は２ヵ所にあり、「中反」の字を宛てている。
【西ノ平】
ニシノヒラ。
この小字は、富田沢川左岸の二つの段丘の間の傾斜地にある。
ニシノヒラとは何を意味しているのか。
ニシ（西）は、水田地帯の西側をいうのか、それとも、ハラノタイラ（原ノ平）を基準にして西の方をいうのかはっきりしないが、ニシノヒラとは、「西の方にある傾斜地」を意味するものと思われる。ヒラは黄泉平坂のヒラであろう。
全国地図には、中・大字として、ニシノヒラ地名は４ヵ所と多い。
【キミサキ】
この小字は、原ノ平段丘の西に下る傾斜地にある。
キミサキとは何か。
キミは、キ（牙）・ミ（場所を表す接尾語）から、「突き出た所」をいうか。サキはサキ（先）で「先端」を意味する。合わせて、キミサキとは、「山稜の先端部分」を意味するものと思われる。
２．５万分の１の全国地図には、キミサキ地名は記載が無い。
【高ゴシ】
タカゴシ。
この小字は二ヵ所にある。一つは、原ノ平丘陵の西端の傾斜地に、もう一つはさらに一段下の丘陵の西端にある。丘陵が西に突出しているところである。
タカゴシとは何を意味しているのか。タカには限度とか限界の意があり、「台地の端」を示す（語源辞典）。また、コシ（腰）には、「山の麓に近いところ」をいう（広辞苑）。
従って、タカゴシとは、「それぞれの段丘の西端にあって、山の中腹の傾斜地」を意味するか。

【西ウラ】
ニシウラ。
この小字は、富田沢川左岸の水田段丘の南西側斜面にある。
ニシウラとは、「段丘の西端にある傾斜地（裏側とみなしている）」のことか。中心である水田段丘から見て西の端にある所という意味と思われる。
全国地図には、ニシウラ地名は、中・大字として５３ヵ所に記載されている。多いのは海岸のある地方であろう。
【北ウラ・キタウラ】
キタウラ。
この小字は、それぞれ離れている３ヵ所にある。
３ヵ所とも同じ解釈が成り立ちそうにもないので、別々に見ていきたい。
①ジョウザカ（城坂）小字の東隣で、神明社の北側になる。キタは「神明社の北」か「北向きの傾斜地」か、はっきりしないが、ここでは後者をとりたい。ウラはウラ（裏）で表の反対の「日陰地」としたい。ここのキタウラは「北向きの日陰地」ではないだろうか。
②宮の沢川に北から合流する支流の上流部にあって、棚田を形成している。ここのキタはキダ（階段）で、「棚田」を意味していると思われる。ウラはウラ（末）で「川の上流」をいう。ここのキタウラは、「宮の沢川支流の上流部の棚田のある所」をいうか。
③このキタウラ小字は、県道下久堅知久平線の西側にあって天竜川に接触している。キタはキタ（北）で方角を表す。ウラはウラ（浦）で「入江」（語源辞典）をいう。ここのキタウラとは、「北の方にある入江」としておきたい。知久平の港からみて、北の方にあるということであろうか。
全国地図には、中・大字として、キタウラ地名は４９ヵ所が挙げられている。
【向麦田】
ムコウムギダ。
この小字は水田丘陵の南西端となる緩傾斜地にある。
ムコウというのは、宮の沢川の谷を越えた南側の原ノ平から見ているものと思われる。原ノ平にはダイミョウジン（大明神）小字があり、寺沢氏観音（村誌）も祀られている。
ムギダは二通りの解釈がある。
①ムギダ（麦田）で「麦をつくる田」で二毛作田のことと思われる。現在は果樹園と荒れ地がほとんどであるが、小字名発生時には二毛作田であった可能性はある。ムコウムギダとは、「宮の沢川渓谷の向こう側にある二毛作田のある所」となる。
②ムギダはムキ（剥）・タ（処）で「崩壊地でむき出しになった所」（語源辞典）を表す。ムコウムギダとは、「宮の沢川渓谷の向こう側にある、崩れてむき出しになった所」をいう。離れてみれば、こちらの方が目立つかもしれない。
全国地図には、ムコウムギダ地名は載っていないが、ムギタ地名は３ヵ所にある。
【洞】
ホラ。
この小字は、宮の沢川本流の谷にある。
この地域では、谷が小さくなるに従って、呼び名が変わる。谷→沢→洞→垰と。ホラとは、「小さな谷」をいう。
全国地図には、中・大字として、ホラ地名が２６ヵ所に記載されている。

【小沢】
コザワ。
この小字は、宮の沢川の支流の上流部にある。
コはコ（小）で、「小さい」を意味する接頭語。コザワとは、文字通り「小さな沢」をいう。
全国地図には、コザワ地名が、中・大字として３４ヵ所にもある。宛てられている字は、ほとんどが「小沢」である。
【サハジリ】
サワジリ。
この小字は、宮の沢川の支流の中流域にあり、４ヵ所ある。
サワは、西日本では湿地を意味するが、東日本では谷のことをいう（語源辞典）。ジリはシリ（尻）で、「道・川などの終わる所」（広辞苑）というのであるが、「小さな川が、より大きな川に合流する所」としたい。
サハジリとは、「山あいの小さな川の合流点付近」であろうか。
ジリには、シル（汁）に通じるとか、あるいは、形容詞ジルイの略で、「湿地」とする説（語源辞典）があるが、サワと意味が重複するので、ここでは採りあげない。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、サワジリ地名は１７ヵ所に記載がある。
【中尻】
ナカジリ。
この小字は、宮の沢川と大きな支流の間の二段になっている段丘の大部分を占める小字である。
ジリ＝シリで、「末端部」をいう。
ナカジリとは、「中ほどにある中段の段丘の末端部」を意味するものと思われる。
全国地図にはナカジリ地名は記載が無い。
【中尾】
ナカオ。
この小字は、宮の沢川の本流右岸の側稜末端部にある。
①オはヲ（丘）で、ナカオとは、「二本の谷川の間で、山の小高い所」を意味するものと思われる。
②付近には、ナカのつく小字が多いので、あるいは、「下虎岩の中心地の一つにある山の小高い所」の可能性もある。
国土地理院の全国地図には、ナカオ地名が、ナカ・大字として、１４８ヵ所も記載がある。
【中尾沢】
ナカオザワ。
この小字は、宮の沢川の本流と支流とその付近に三ヵ所ある。
ナカオザワとは、「ナカオ小字付近にある谷川」をいう。支流も含めて三本の流があるということであろうか。
全国地図には、ナカオザワ地名が１ヵ所あり、「中尾沢」の字が宛てられている。
【中尾番】
ナカオバン。
この小字は、中尻・中尾丘陵の南よりの緩傾斜地にある小さな小字で、付近には水田も多い。
ナカオバンとは、「中尾の番所のあった所」であろう。
何のための番所だろうか。三つほど考えられる。①見張場であるが、通行税を取ることもあったかもしれない。②近くにジョウ（城）小字がある。防御のための見張場か。③水を平等に配分するための見張場か。

【狢久保・狢名窪・ムジナクボ】
ムジナクボ。
これらの小字は、伊那南部広域農道の東側にかたまっている。宮の沢川の左岸になる。現在は、ほとんどが，果樹園になっている。
ムジナクボとは、「アナグマかタヌキの多い窪地」の意味と思われる。三つの小字は、元々は一つの小字であったが、分筆が必要になって、同じ呼び名で文字を少しずつ変えたためであろう。「狢久保」小字には、大きな堤もあるので、窪地であることがはっきりしている。
全国地図には、中・大字として、ムジナクボ地名が３ヵ所に記載されている。
【上ノ城】
カミノジョウ。
この小字は、宮の沢川本流の右岸にある。東隣にダイミョウジン小字、南には神明社がある。
カミノジョウとは、字面の通り、「上流にある城」である。下流側には、ジョウ（城）小字がある。直線距離にして、１７５ｍほど離れているだけである。
念のために、もう一つの解釈を記録しておきたい。カミはカミ（神）で、「神聖な地」を意味する。カミノジョウとは、「神の加護のある、神聖な場所にある城」となるがどうであろうか。
全国地図には、カミノジョウ地名は１ヵ所あるが、「上野条」の字を宛てている。
【ヲシナ】
オシナ。
この小字は、宮の沢川右岸の急傾斜地にある。
ヲシナとは、ヲ（尾）は「山裾の末端」（語源辞典）をいい、シナはシナ（階）で、「階段」のこと。合わせて、「山裾の末端部で階段状になっている所」となる。
全国地図では、おなじみ２．５万分の１「時又」に１ヵ所あるだけ。
【大明神】
ダイミョウジン。
この小字の中を、伊那南部広域農道が南北に、宮の沢川が東西に貫いている。
大明神といえば、諏訪大明神か稲荷大明神と思われるが、まだほかにあるかもしれない。
いずれにしても、ダイミョウジンとは、「大明神を祀っていた所」であろう。城趾も近いので、城主が勧請した可能性がある。
全国地図には、ダイミョウジン地名は、１６ヵ所に記載されている。
【ミチ上】
ミチカミ。
この小字の中に、原ノ平第二集会所がある。この小字内を伊那南部広域農道が通っている。
ミチカミのミチ（道）は、この広域農道ではない。集会所の前を通る道と思われる。ミチカミとは、文字通り、「主要道路より高い所」を意味する。
全国地図には、中・大字として、ミチカミ地名は１件だけ記載がある。
【中ノ段】
ナカノダン。
この小字は二ヵ所、原ノ平の「大明神」小字北側の緩傾斜地にある。
ナカノダンとは、「上の段と下の段の間のきざはし状の土地」か。
全国地図には、中・大字として、５ヵ所に記載されている。

【桃ノ木平・桃木平】
モモノキダイラ・モモノキタイラ。
二つの小字は繋がって、東西に延びている。原ノ平丘陵の緩い傾斜地にある。西端を伊那南部広域農道が走っている。
モモノキダ（タ）イラとは、文字通り、「桃の木がある山中の平坦地」を意味する。この小字発生当時、桃の木があったのかどうか迷ったが、モモは日本には古くから渡来し野生化しているところもある（牧野植物図鑑）という。
全国地図にも、モモノキダイラ地名は、１ヵ所に中・大字として載せられている。
【大ヒラ・大ビラ】
オオヒラ・オオビラ。
これらの小字は、原ノ平丘陵にあり、モモノキダイラ小字の北側の傾斜地にある。二つの小字が繋がっている。
ヒラ（平）は、「山中にある相当広い緩斜面」（広辞苑）である。
オオヒ（ビ）ラとは、文字通り、「山中にある相当に広い緩い傾斜地のある所」を意味するものと思われる。
国土地理院の全国地図に、中・大字として挙げられているオオヒラ地名は、１３７ヵ所と多い。
【山田】
ヤマダ。
この小字は，原ノ平丘陵で、コザワ小字に囲まれている。
ヤマダとは、字面のとおりで、「山間にある田んぼ」の意味であろう。
２．５万分の１の全国地図には、ヤマダ地名は、中・大字として、２９６ヵ所と非常に多い数が記録されている。
【水舟】
ミズフネ。
この小字は、原ノ平丘陵にある、大きな小字である。
ミズフネとは、「飲料水などをたたえて置く大きな桶」（広辞苑）のこと。自然の湧水の多い所で、実際にはこうした方法で生活用水に利用していたものと思われる。
全国地図には、ミズフネ地名が２ヵ所、ミズブネ地名も２ヵ所が記載されている。
【アカナギ】
この小字は、原ノ平丘陵の中にあるいくつかの傾斜地の一つ。
アカナギとは、「赤い土の見えている崩壊地のある所」をいう。この付近は表面がほとんど赤土で覆われているので、崩壊して、地肌が出ている所は赤くみえるためであろう。
全国地図でアカナギ地名が、中・大字となっているのは、１ヵ所だけと少ない。
【原ノ平】
ハラノタイラ。
この小字は、富田沢川の左岸中流部の段丘上にある。現在は、ほとんどが水田になっている。
ハラ（原）とは、「平らで広い土地。特に耕作しない平地」（広辞苑）であるという。ダイラ（平）は、「山頂または中腹の平らな場所」（語源辞典）のこと。
ハラノタイラとは、「まだ耕作してない山腹で、平らな広い土地」のことと思われる。原ノ平に井水が通るのは明治三年のこと（村誌）。小字名発生時には、まだ水田にはなっていなかったものと思われる。
全国地図には２ヵ所が記載。

【インノ城・犬ノ城】
インノジョウ・イヌノジョウ。
これらの小字は、伊那南部広域農道の東の方で、富田沢川左岸の傾斜地にある。二つの小字とも、東西の山道が通じている。
インノジョウ←イヌノジョウの撥音便化で、もともとは同じ意味を表しているものと思われる。
イヌ（犬）は、「小さい。狭い」こと。ジョウ（城）は城塞を表す。
イヌノジョウとは、「小さな山城」のことと思われるがどうであろうか。天竜川に近い本城が落とされた時に、上久堅の方に逃れる途中に、この山城で体をやすめたのかもしれない。
全国地図には、イヌノジョウ地名もインノジョウ地名も載ってはいない。
【犬ノ城道上】
イヌノジョウミチガミ。
この小字は、イヌノジョウ小字の奥、道に沿った南東側にある。側稜の尾根にもそっており、道より高いところにある。イヌノジョウとも何らかの関わりのあった場所であろう。
イヌノジョウミチカミとは、文字通り、「犬ノ城につながる道の上の斜面と尾根」をいうか。
【セノアガリ】
この小字は、富田沢川狭窄部の左岸の急傾斜地にある。
セノアガリとは何か。二通りの解釈ができる。
①セ（瀬）・ノ（格助詞）・アガリ（上）で、セノアガリとは、「急流の富田沢川から、急傾斜地を登る一帯」をいう。
②セ（背）・ノ（格助詞）・アガリ（上）で、セノアガリとは、「尾根筋が背のように上がっている所」をいうか。
全国地図には、セノアガリ地名は１件も無い。
【ツルネ】
この小字は、イヌノジョウ小字の南側にある小さな小字。
先にナカツルネ小字のところで説明した通りで、ツルネとは、「山背線が著しい高低なしに続いている地形」をいう。
【コウド】
イヌノジョウ小字の東側にある小さな小字で、側稜の末端の独立峰になっている。
コウドとは、カミ（上）・ド（処）の転で、「高い所」を意味する（語源辞典）。標高５７０．９ｍの峯は周辺より高くなっている。
全国地図には、中・大字として１８ヵ所に挙げられているが、宛てられている文字は１２種類にも及ぶ。決定的な解釈がないためかもしれない。
【タカウド・タコウド・田幸土】
タコウド。
これらの小字は喬木村村境で、富田沢川左岸の丘陵地帯にある。大部分は山ノ神側稜と犬ノ城道上側稜の間に入る。
タコウドとは何を意味するのか。二つの解釈を挙げる。
①タコウはタガウ（違）で、「食い違った地形」のこと（語源辞典）。ドはト（処）で「場所」を表す接尾語。合わせて、タコウドとは、「階段状になっている所」となる。侵食・堆積した小さな谷が階段状になっていて、下流域は今も棚田になっている。
②タカ（高）・ウド（狭い谷）で、タコウドとは、「高い所にある狭い谷」をいう。
全国地図にタコウド地名は無い。

【タカウド道下】
タコウドミチシタ。
この小字は２ヵ所にある。タコウド（田幸土）小字の東西の両側にある。
タコウドミチシタとは、文字通り、「タコウドを通る道路の下側の土地」であろう。現在の道をみると、その通りになっているので、小字名発生当時の道とそれほど変わっていないのかもしれない。
【山ノ神・山ノ神洞・山神洞西向】
ヤマノカミ・ヤマノカミボラ・ヤマガミボラニシムキ。
これらの小字は富田沢川左岸の喬木村との村境にある。
村誌によれば、虎岩村の山神について、元禄二年(1689)には３３社があったのに、天保十三年（1842）には 7 社と減少している。理由はわからないが、祭神が替わっていったのだろうか。
山神を祀る山村民にとっては、祭神は大山祇命ではなく、自然神に近い神格であったらしい。小祠・磐座・大木または特徴のある樹木を依代としてまつっているほか、幣帛（はく）または常盤木をもって山中の随所でまつったという（民俗大辞典)。
ヤマノカミとは、「山神を祀った場所」であり、ヤマノカミボラとは「山神を祀った小さな谷」をいい、ヤマガミボラニシムキとは「山神を祀った洞で、西向きの斜面になっているところ」をいう。山神を祀ることと西向きの傾斜地とはどのような関係があるのか、はっきりはしない。
全国地図には、中･大字として、ヤマノカミ地名は７０件と多い。
【ウサギクボ】
この小字は、富田沢川左岸にあり、川から側稜中腹にいたる急傾斜地にある。
ウサギクボは問題は無いような気もするが、二説を挙げる。
①ウサギは「兎狩りをする場所」（語源辞典)。ウサギクボとは、「兎狩りをする洞」をいう。
②ウサ←ユサの転で「砂地」をいい、ギ＝キで「場所」を示す接尾語（語源辞典)。ウサギクボとは、「砂地の洞がある所」となる。
ウサギクボ地名は、全国地図に１ヵ所だけ載っている。
【マタギダ・又木田】
マタギダ。
これらの小字は、宮の沢川の上流部にある。マタギダ小字が３ヵ所、「又木田」小字が１ヵ所ある。
マタギダとは何を意味するのか。以下、語源辞典によってみていきたい。マタはマタ（又）で、「二股状に分かれた谷の分岐点」をいう。ギダはキダ（木田）が転訛したもので、キダハシ（階段）のキダ。段丘とか自然堤防をいう。
以上から、マタギダとは、「谷が分かれていて、階段状の地形になっている所」であろう。原ノ平第一集会所付近で谷が分岐しており、階段状の地形の多くは、現在、棚田になっている。
【前田】
マエダ。
この小字は、桃木平の大きな洞の中にある。小さな小字であるが、二ヵ所。現在もある住宅に近い。
マエダといえば、「前の方にある田んぼ」のことであるが、どこの“マエ”なのかがよく分からない。この地域の有力者か寺社かと思われるが、どうであろうか。

【家下】
イエシタ。
この小字も桃木平の洞にあり、近くには２ヵ所のマエダ小字もある。
イエシタとは、「有力者の居住地の下側の土地」をいうのであろう。先に触れているマエダ（前田）小字も、この有力者の居住地と関係しているのかもしれない。現在も、この小字内に住宅がある。
【道金洞】
ドウキンボラ。
この小字は、原ノ平第一集会所とその裏山と、その西にある小さな谷を含んだ地域である。
ドウキンボラとは何を意味するのか、はっきりしないが、語源辞典によって二説を挙げる。
①ドウはドウ（堂）で、「半球状で堂に見立てた地形」。キン←キ（割）の撥音便化した語で、「割れ目のような地形」をいう。ドウキンボラとは、「小山がお堂のようにみえ、近くに割れ目のようになっている小さな谷のある洞」とならないだろうか。
②キは「場所」を表す接尾語で、ドウキンボラ←ドウキボラと転訛したもの。ドウキンボラとは、「お堂のような小山のある場所の洞」か。
他の解釈もあるかもしれないと思われる小字名である。
むろん全国地図には、この地名の記載は無い。
【アラシノ山】
アラシノヤマ。
この小字は、伊那南部広域農道の両側に広がる。目名振丘陵の北北西に延びる側稜の傾斜地にある。
アラシノヤマとは何か。三通りの解釈を挙げる。
①アラシノヤマとは、「風の強い山」をいう。地元でも、風の強いところであるという。西南西の風を受けやすいように見受けられる。どうして、その風を意識したかはよく分からない。焼畑であった可能性もある。
②アラシはアラス（転）の連用形の名詞化した語。アラシノヤマとは、「伐採した材木を川へ落とした山」であろうか。この小字は宮の沢川に接しており、川をせき止め、一気に天竜川まで流した可能性もある。
③アラシは焼畑のこと。アラシノヤマとは、「焼畑が行われていた傾斜地」であろうか。アラシは焼畑の休閑地をいうことが多いが、焼畑そのものを表すこともある。
全国地図には、アラシノヤマ地名の記載は無い。
【トラ石・トラ石原】
トライシ・トライシバラ。
これらの小字は、常信院のあるダイモン小字の南隣にある。トライシ小字が２カ所、トライシバラ小字が２カ所になる。
村誌によれば、南組や知久平の方面からみると、虎がうずくまっているように見える石があるという。虎岩の地名もこの虎石から由来するらしい。
トライシは「虎石のある所」をいい、トライシバラとは、「虎石のある周辺の山の中腹」をいう。ハラはハラ（腹）で、「山の頂と麓の中間の部分」（国語大辞典）の意である。
なお、さらに村誌によれば、本物の虎石は、現在、常信院の本堂の床下にあり、夜な夜な出歩いてあばれるのを封じ込めてあるのだという。
なお、全国地図には記載は無い。

【ヤクシ】
この小字は、常信院の南１５０ｍほどの所にある。
ヤクシとは、「薬師信仰に関わる土地」と思われる。
薬師信仰は薬師如来がもつ治病効験に期待をかけるものであったが、近世以降は如来が眼病治癒の仏として崇められるようになった。
薬師堂などが、このヤクシ小字にあったのか、それとも常信院の関連で薬師如来を祭祀するお堂などがあったか不明であるが、この地が薬師信仰の場であったらしいことはわかる。
全国地図にも、中・大字として、ヤクシ地名は１５カ所に記載されている。
【アイタ】
この小字は、ダイモン小字とヤクシ小字の間にある。
アイタとは何か。
語源辞典によれば、アイタ←アイノタの転で、「饗庭の田」を意味するという（語源辞典）。「饗庭の田」とは、「神社や朝廷に食料を供給する田んぼ」といわれている。神社や朝廷の範疇に寺院が入るのかどうかは明瞭ではない。
この下虎岩のアイタとは、「神社に食料を供給する田んぼ」となる。該当する神社はミゾカミ小字にある神明社か。もし寺院まで含むことが可能であれば、該当するのは常信院になる。神明社より常信院の方がアイタ小字に近いのではあるが。
全国地図には、アイタ地名が、中・大字として、３件が記載されており、「愛田」「相田」の字が宛てられている。
【寺】
テラ。
この小字は常信院そのもの。ダイモン小字に囲まれている。
村誌によれば、常信院は永正年間（1504～1521）に創立、釈迦如来を本尊としている。江戸時代には虎岩村唯一の寺院であったという。
全国地図にも、テラ地名は、中・大字として１３カ所が挙げられている。
【大門】
ダイモン。
この小字は常信院を取り囲む広い小字と南の方にある小さな小字の２カ所にある。側稜とその傾斜地に広がる。
ダイモンは、「寺の総門などのあった所」（語源辞典等）のこと。この場合は、もちろん、常信院の総門をいう。現在の道路の状況から、総門は常信院の南側にあったと思われる。
全国地図には、中・大字として、ダイモン地名は９３カ所もある。小字の数であればもっと多くなるはずである。
【タラ】
この小字は、ダイモン小字の北西側の緩傾斜地にある。
タラはテラの転訛とも、最初は考えたが、全国地図には、タラ地名が５カ所もあることもあって、この考えを放棄した。ではタラとは何を意味するのか。
語源辞典によれば、緩傾斜地の坂をダラダラ（タラタラ）坂という。このダラダラやタラタラと同じで、タラとは「断面の滑らかな緩斜面になっている所」をいう。
現地も大門側稜の西側の緩傾斜地になっていて、よくマッチしている。

【トウケンナ・トウゲンナ・東源名】
トウケ（ゲ）ンナ。
これらの小字は、県道下久堅知久平線と中段の道路との間にある。
難しい小字名が続く。
トウケンナとは何を意味するのか。語源辞典によってみていきたい。
トウケ（ゲ）はトウゲ（峠）のこと。ナは（場所）を示す接尾語で、古語のナ（土地）からきている。トウケ（ゲ）ンナはトウケ（ゲ）・ナの撥音便化したもの。
以上から、トウケ（ゲ）ンナとは、「峠になっている所」の意となる。この付近は宮の沢川と鎮守沢川の間にあり、大門側稜が膨らんでおり、峠になっているためと思われる。峠らしい峠でないのが気になるが、他の解釈が浮かんでこない。
難しい地名であるので、全国地図にも、トウケンナ地名もトウゲンナ地名も載ってはいない。
【井ノ上・井戸上】
イノウエ・イドウエ。
これらの小字は、大門側稜の北西端の中腹にある。
イドは、イ（井）・ド（処）で「水の流れている所」をいう。とすれば、イノウエもイドウエも同じことを意味している。
つまり、イノウエもイドウエも、「水が流れている所より上の部分、少し高い所」を意味しているものと思われる。
この流水は自然の湧水なのか、井水なのかはっきりしないが、位置的には宮の沢川から引いている井水というのが、妥当と思われるが、実際にはどうであろうか。村誌によれば、この付近では、富田沢川が水量が多いので井水が引かれているが、他の沢からの井水はないようだが、どうであろうか。
ただ、近くにミゾガミ（溝上）小字があるので、宮の沢川からの井水があった可能性は高い。
全国地図には、中・大字として、イノウエ地名が５６カ所もあるが、イドウエ地名は記載がない。
【溝上】
ミゾガミ。
この小字は２カ所にある。一つの大きい小字は、ダイモン小字の北側にあり、神明社がある。神明社というのは、中世以降は伊勢神宮の神霊を奉祀した神社で、祭神は天照大神である。
小さなミゾカミ小字は、大きい方のミゾカミ小字の北西側にあるが、かっては、この二つの小字は繋がっていたものと思われる。
ミゾガミとは何を意味しているのか。語源辞典によりながら、解釈を二つ挙げる。
① ミゾはミ（水）・ゾ（場所を示す接尾語）。ガミ←カミ（神）で、「神聖な地」「神社領」を表す。つまり、ミゾガミとは、「流水のある神明社神社領であった所」か。
② カミはカミ（上）で、「高い所」。ミゾカミとは、「流水より高い所」を意味する。
全国地図には、中・大字としてミゾカミ地名は１件だけあり、「溝上」の字を宛てている。
【ミツカミ】
この小字は、二つのミゾカミ（溝上）小字の間にある。
ミツカミとは、ミゾガミ（溝上）と同じで、かっては、ミゾガミであった可能性が高い。意味するとことろは、上記の通り、二通りの解釈ができる。

【城坂】
ジョウザカ。
この小字は宮の沢川本流の左岸の中腹にあり、ドウノウエ小字の南東側に接している。
ジョウザカとは、「城へ繋がる傾斜地」を意味するか。城とは虎岩城であろう。虎岩城があったのは、ジョウザカ小字のすぐ上にあるドウノウエ小字ではないかといわれている（村誌）。
村誌によれば、小林城にいた小林玄番頼春が虎岩に移って虎岩城を築き、姓も改めて虎岩大蔵少輔政春となり、後に、菅沼小大膳の家来になって虎岩を出たという。
全国地図には、ジョウザカ地名は１カ所にあるが、「上坂」の字を宛てている。
【堂ノ上・堂ノ前】
ドウノウエ・ドウノマエ。
ドウノウエ小字は、宮の沢川本流の左岸にあって、ジョウ（城）小字とジョウザカ（城坂）小字の間になる。ドウノマエ小字は、トウゲンナ小字の西に接している。
ドウノウエとは、「お堂のある所より上の方」であり、ドウノマエとは、「お堂のある所の前の方」ということになる。
お堂があったのは、二つの小字の間ということになる。それはジョウ（城）小字か、トウゲンナ（東源名）小字のどちらかにあったのであろう。
お堂とは、虎岩城の跡地に建てられたと思われる仏堂であろうか。詳しいことはわからない。
全国地図には、ドウノウエ地名が４件、ドウノマエ地名が５件、記載されている。
【ブイタ】
この小字は、県道下久堅知久平線とジョウ小字の間にある。
ブイタという地名も分かりにくい。ブイタはブキタのイ音便化したものか。ブキタ←フキタ←フケタの転で、「湿地」を意味すると考えたがどうであろうか。フケタは静岡では「湿田」のことをいい、山梨では「年中水のある湿田」のことをいい、「低地の田」を表す地域もあるらしい。
因みに、ブイタ小字は、現在は水田が多く、自然湧水の多いところである。
全国地図には、ブイタ地名もフイタ地名もブイダ地名も無い。
【竹ノ下】
タケノシタ。
この小字は、３カ所にある。２カ所は県道下久堅知久平線と天竜川の間にあり、もう１カ所は虎岩城のお堂の下側にある。
タケノシタとは何か。「竹藪の下」も考えたが、当たり前すぎて地名としては不適当と思い、取り上げないことにした。ここに、二説を挙げる。
① タケ←ダケで、「崖などの崩壊地」のこと（語源辞典）。タケノシタとは「崖の下」を意味する。
② タケは「信仰に関係のある山の称」（語源辞典）。タケノシタとは、「お堂の下の方の土地」とするのはどうであろうか。一つの小さなタケノシタ小字は、すぐ上にお堂があったと思われるので問題はない。他の二つのタケノシタ小字も、範囲を広くとらえて、「お堂の下の方」とすることも可能ではないかと判断したがどうであろうか。
タケノシタ地名は、全国地図に、中・大字として、３３カ所も記載されている。

【ホタヒタ】

この小字は、天竜川の河畔にある。

ホタは「土手」のこと、この地域でよく使う方言か。ヒタは動詞ヒタス（漬）の語幹で、「水に漬かる地」をいう。ヒタヒタという副詞もあって、水が漬いてくる時に、この地域ではよく使う言葉もある。

以上から、ホタヒタとは、「土手まで天竜川の水に漬かりやすい土地」を意味する。

全国地図には、ホタヒタ地名は載っていない。

【ハンバ・バンバ】

これらの小字は、県道下久堅知久平線の東西に分布している。一番下の段丘崖である。ハンバは１カ所、バンバは２カ所にある。

ハンバもバンバもババと同義で、「崖。傾斜地」をいう。ハンバ・バンバ←ハバ（岨）と転訛したものと思われる。ハバは群馬・山梨・長野・岐阜の方言になっている。

【カジヤ垣外】
カジヤガイト。
この小字も天竜川の河畔にあって、北側にキンシハタ小字、南側にはシバガキ小字がある。
カジヤガイトとは、「鍛冶屋の住居跡」であろう。
鉄の加工には、鋳造に当たる鋳物師と鍛造にあたる鍛冶屋がある。鍛冶屋とは、鉄を打ちきたえて刀剣･刃物・馬具・農具・碇･釘などを製作し、あるいは修理にあたる職人のことをいう（民俗大辞典）。
これも虎岩城と関係があるのではないだろうか。ここの鍛冶屋は武器だけでなく、後には農具の製造･修理にかかわるようになったものと思われるがどうであろうか。
全国地図には、カジヤガイト地名は載っていないが、カジヤ地名は８２ヵ所に記載がある。
【ホラ】
この小字は、県道下久堅知久平線の天竜川の側にある。小さな沢が流れている。
伊那谷では、谷が狭くなるにつれてタニ（谷）→サワ（沢）→ホラ（洞）→タオ（垰）という呼称があるという（大平宿）。
ホラはホラ（洞）で、「小さな谷」を意味する。ホラ小字は、その通りの地形になっている。伊那谷には多い地名である。
全国区地図には、先に触れたように２６ヵ所の記載がある。
【アタゴ】
この小字は、ドウノマエ（堂ノ前）小字の北隣にある。
アタゴは何を意味しているのだろうか。仮説を二つ。
①アタゴといえば愛宕神社を思い浮かべる。飯田にもある。虎岩城の近くでもあり、愛宕権現を祀った所と考えることもできる。アタゴとは、「愛宕権現を祀っていた所」ということになる。虎岩にはないが、延享元年（1744）の柏原村神社名別社名には「愛宕地蔵権現」が記載されている（村誌）。因みに愛宕権現は火伏せの神であるが、伊那谷では火伏せの神といえば、秋葉大権現を祀る所の方が圧倒的に多い。アキハミチの道標も各地にある。
②アタゴはア（特に意味の無い接頭語）・タコ（高）で「高い所」をいう（語源辞典）。アタゴは「少し高い所」を意味するかもしれない。少なくとも、ドウノマエ小字よりは高いところにある。
全国地図には、アタゴ地名が、中･大字として、３１ヵ所に挙げられている。
【トノ平】
トノヒラ。
この小字は、県道下久堅知久平線の東側にある、緩傾斜地でほとんど平坦地となっている。殿平屋商店の周辺の広い小字である。
ヒラには、「傾斜地」の意味と、「平地」をいう場合があるが、前者にしたい。
トノヒラとは何を意味するのか。二通りの解釈を挙げたい。
①トノヒラとは、「殿の住んでいた緩い傾斜地」か。虎岩城は直線距離で100～200mと近い。
②トノ←タナ（棚）と転訛したもので、トノヒラとは、「棚状の段丘になっている緩い傾斜地」ともいえる。
全国地図には、トノヒラ地名は無い。

【司馬垣・柴垣】
シバガキ。
これらの小字は、主に県道下久堅知久平線と天竜川との間にある。
シバガキといえば、一般的には、「山野に生える小さな雑木で作った垣根のある所」となる。
もう一つの解釈を参考のために挙げておきたい。シバはシバ（仕場）で、「ある事柄の行われる場所」（国語大辞典）をいう。シバガキとは、「各種の行事かが行われる区画」といことになるが、どうであろうか。
全国地図にはシバガキ地名が２ヵ所に採りあげられている。
【林ノ腰】
ハヤシノコシ。
この小字も二ヵ所にあり、それぞれ県道下久堅知久平線の両側の傾斜地にある。
ハヤシのコシとは何か。二通りの解釈を示したい。
①ハヤシは樹木などの生えている所だから、ハヤシノコシとは、「樹木などの生えている所の中腹」を意味する。
②ハヤシは、ハヤ（逸。急）・シ（接尾語）で、「急傾斜地」を表すという（語源辞典）。であれば、ハヤシノコシとは、「急傾斜地の中腹」をいう。ハヤシは形容詞ハヤシの終止形とみてもいいような気もするが、どうであろうか。
全国地図には、ハヤシノコシ地名は１ヵ所もないのは不思議である。この地域にはかなりの小字数になると思われるのに。
【サハ】
サワ。
この小字は、県道下久堅知久平線の東側にあり、小川の合流点になっている。
サハとは、文字通り「小さな谷川の流れている所」である。
全国地図にも、中･大字として６１ヵ所と意外と多い数が上げられている。
【三つ田】
ミツダ。
この小字は二ヵ所にある。一つは、県道下久堅知久平線と天竜川の間にある。周辺を、シバガキ・ヤシキ・ナカソリ・モンサタの小字に囲まれた小さな小字である。もう一つは、県道の東側にあり、サハ小字の南側の斜面にある小さな小字である。
ミツダとは何を意味するのか。「三枚の田んぼ」ではない。二つのミツダ小字は、それほど離れているわけではないので、二つとも同じ由来であろうことは確かと思われる。二つの仮説を挙げておきたい。
①南の方のミツダは、ミズダが転訛したもので、ミツ（水）・タ（処）を意味するものと思われる（語源辞典）。ミツダとは、「自然湧水のある所」としたい。傾斜地であるので水田ではないと思われるからである。北の方のミツダ小字は、ほぼ平坦地で、水田であっても不思議ではないが、ここでは南の方のミツダに合わせたい。自然湧水のある可能性は高いと判断した。
②ミツはミツ（密）で、「人に知られないで」（国語大辞典）という意味もある。ミツダとは隠し田と同じような「貢租を免れるための隠し耕地」だったと考えるのはどうであろうか。傾斜地もあるので、納得しにくいか。
全国地図には、ミツダ地名は１ヵ所に記載されている。

【ヤブ下】
ヤブシタ。
この小字は、県道下久堅知久平線の西側にある。天竜川氾濫原にもかかっている傾斜地である。
ヤブシタとは何か。解釈を二つ挙げておきたい。
①ヤブシタとは、文字通り、「やぶの下にある土地」をいう。このヤブは、竹藪と思われる。
②ヤブシタとは、「藪神が鎮座する場所の下にある土地」ともとれる。ヤブと同じような言葉にタケやハヤシがある。これらの語がヤブとどう異なるのか、気になっている。ヤブには、藪神を意味することが多いのではないだろうか。藪神は由緒が分からなくなった神で、社殿などはない、神格が低い雑神であるが、鎮座する場所を荒らすと、激しい祟りを発現するといわれている。祟りを怖れ、手を着けない所が藪になっていることが多いのであろう。
やや意外な感じがするが、全国地図には、１件のヤブ地名も載っていない。
【ウハフトコロ】
ウバフトコロ。
この小字は、イシハラ小字の北と南の２ヵ所にある。いずれも県道下久堅知久平線の東側にある。
ウバフトコロ＝ウバガフトコロ＝ウバノフトコロ＝ウバガホトコロで、全国的に散在する地名（国語大辞典）で、ウバフトコロ２ヵ所、ウバガフトコロ４ヵ所となっているが、伊那谷南部では小字として旧村ごとにあると思われる。調査済みの４つの旧村のうち無いのは川路だけであるところから、小字規模の地名なのかもしれない。
ウバガフトコロとは、「（うばに抱かれているところの意から）㋑安全な場所。㋺風のこない暖かい場所。とくに、南面の山ふところをなす地形で、日だまりの地をいう。また、このような土地は製陶に適していたところから、陶土を産する場所の地名として呼ばれた」（国語大辞典）という。
下久堅のウバフトコロも、南～西向きの斜面になっており、冬は暖かい。風向きも南寄りの風が強く、瓦を焼くには適していると思われるが、農村で瓦が普及するのは明治以降といわれているので、瓦を焼いたのではないのかもしれない。
【ヤシキ・屋敷】
ヤシキ。
この小字は県道下久堅知久平線と天竜川の間にある。天竜川原から登る最初の傾斜地とその上の段丘の一部にかかっている。
ヤシキとは、文字通り、「屋敷のあった所」である。その屋敷は有力者の屋敷であり、虎岩城に関わる屋敷であった可能性は高い。
全国区地図には、ヤシキ地名が、中・大字として、７３ヵ所もある。小字に相応しい地名であるのに、意外に多い。
【モンサタ】
この小字は、県道下久堅知久平線の西隣にある、小さな小字。
モンサタも分かりにくい地名で、全国地図にも無い。二説を挙げる。
①モンはモン（門）で、「木戸門」をいうか。サタはサ（狭）・タ（処）で、「狭くなった所」のこと。モンサタは、「狭くなっている木戸門」か。
②サタ←サダ（定）は、「崖下の平地」。モンサダとは、「崖下の平地にある木戸門」の可能性もある。

【ジョアミダ】
この小字は、県道下久堅知久平線の南側にあり、南から登る坂道を上りきったあたりにある。
ジョアミダとは何か。これも分かりにくい地名である。敢えて二説を挙げたい。
①ジョアミダ←ジョウアミダと転訛したもので、「丈阿弥陀」ではないだろうか。ジョウ（丈）は一丈の長さで約３ｍほど。仏像の丈六のことで、ショアミダとは、「阿弥陀像に見立てた岩のあった所」と解してみた。南原にはジョウロク小字もあるので、可能性はありそうに思えるがどうであろうか。
②ジョアミダ←ショアミダと転じたか。ショはショ（初）で、「初阿弥陀」とは、「阿弥陀堂がはじめに設置された所」としたいが、無理筋であろうか。
むろん全国地図にジョアミダ地名は載っていない。
【ボタシタ】
この小字は、県道の東側にあり、鎮守沢川の右岸の段丘にある。
ボタは三遠南信地方の方言で、田畑の畦とか、土手を意味する。今でもよく使われている方言である。
ボタシタとは、字面の通りで、「土手の下側にある土地」である。この小字の東側には、傾斜地があって、それが土手である。
ボタシタ地名は、当然のことながら、全国地図には記載が無い。方言であるためと思われる。
【中島・ナカシマ】
ナカジマ。
これらの小字は、ボタシタ小字の上にある段丘とその斜面にある。鎮守沢川の右岸になる。
ナカジマといえば、海の中の島か川の中洲を意味するが、ここでは当てはめることはできない。ではナカジマとは何を意味するのか。
ナカ（中）は、「広い平面などのその範囲内の不特定の場所」をいう。シマ（島）は「ある一区画をなした土地」のこと（以上は国語大辞典）。
ナカジマとは、「トノヒラ段丘の中にある周囲を上り下りの傾斜地に囲まれた一区画の土地」としておきたい。
全国地図には、ナカジマ地名は、中・大字として、なんと２６２ヵ所にも記載されている。
【野井輪】
ノイワ。
この小字は、ナカジマ小字の北東側にある大きな小字で緩い傾斜地になっている。
ノイワとは何か。
ノ（野）は「緩傾斜地」（語源辞典）をいい、イワはイワ（岩）で「砂利」（国語大辞典）をいう。
従って、ノイワとは、「小石混じりの緩傾斜地」を意味するものと思われる。
全国地図にはノイワ地名は記載が無い。
【ビクヤ】
この小字は、ナカジマ小字の南東の隣にあり、鎮守沢川の右岸にある。
ビクはビク（比丘）で、「出家して具足戒を受けた男子。一般的には僧」（国語大辞典）のこと。ヤはヤ（屋）で、「家屋」のこと。
以上から、ビクヤとは、「僧が居住していた家屋のあった所」を意味する。
ビクヤ地名は、国土地理院の全国地図には１件の記載も無い。

【井野口】
イノクチ。
この小字は、鎮守沢川右岸にある。ノイワ小字とヤクシ小字の間にある。
イノクチとは、イノクチ（井ノ口）で、「せき止めてある水を落とす口。特に水田の取り入れ口」（国語大辞典）である。
ここのイノクチも「井水を取り込んでいる所」と思われる。はっきりはしていないが、鎮守沢川から井水を引き込んでいる取り入れ口があるのではないかと考えられるが、まだ確認はしていない。
なお、全国地図には、イノクチ地名は、中･大字として、３５ヵ所で採り上げられている。
【スキノキ】
この小字は、鎮守沢川の両岸にわたっている。イノクチ小字の南隣になる。
スキノキとは何か。語源辞典によって見ていきたい。
スキは、ス（砂）・キ（場所を示す接尾語）。ノキ←ヌキ（抜）の転で、「崩壊地形」をいう。
合わせると、スキノキとは、「崩れた崖のある砂地の土地」か。
他の解釈もありそうだが、今のところ思いつかない。
全国地図にはスキノキ地名は無い。
【ジンデン・神田】
ジンデン。
これらの小字は、鎮守沢川中流域の右岸にある。ジンデン小字が２ヵ所、「神田」小字が１ヵ所にある。
ジンデン←シンデンと転訛したもの。シンデン（神田）とは、「神社に付属して、その収穫を神社の祭典や造営、または神職の給料などの諸費にあてるための田地。不輸租田とした」（国語大辞典）である。
これらの小字は、地名発生当時は、ほとんどが水田であったと思われる。今でも水田になっている所が多い。
国土地理院の全国地図には、ジンデン地名は１５ヶ所あり、すべてが「神田」の字を宛てている。シンデン地名となると、５７２ヵ所にも及ぶが、ほとんどが「新田」の文字で、「神田」の文字となっているのは、３ヵ所にすぎない。これから判断すると、辞書類の記述にも拘わらず、全国的には、この下虎岩と同じように、シンデンは新田であり、ジンデンは神田とみているものと思われる。
ここのジンデンは神明社に付属していたのであろうか、それとも諏訪社であろうか。
【日向沢・ヒナタサワ】
ヒナタザワ・ヒナタサワ。
これらの小字は、鎮守沢川の両岸にかかっており、主には南～西向きの傾斜地になっていて、日当たりがいいことから名づけられたと思われるが、一部には日当たりのよくない北向きの傾斜地になっているところもある。
全国地図には、ヒナタザワ地名が、７ヵ所で中･大字として登録されている。
【宮ノ沢】
ミヤノサワ。
この小字は、鎮守沢川の両岸にわたっている。
ミヤ（宮）とは、神社をいうこともあり、また寺をさすこともある（広辞苑）。ここのミヤノサワは、常信院のことをいうか、すぐ北側の薬師堂をいうのかわからないが、ミヤノサワとは、「お堂の近くを流れる谷川」であろう。

【北平】
キタヒラ。
この小字は、２ヵ所、いずれも鎮守沢川中流域の左岸にある。
キタをキタ（北）とすると、現地の状況と合わない。というのは、何に対して北になるのか、理解できないからである。
キタ←キダと転訛したもので、キタハキダハシをいう。ヒラは黄泉平坂のヒラで「傾斜地」を表す。
キタヒラとは、「階段状になっている傾斜地」を意味する。
全国地図には、中･大字として、キタヒラ地名は５ヵ所に載っている。
【三島山・ミシマヤマ】
ミシマヤマ。
これらの小字は、標高 565.0m のシモミネ小字の側稜尾根から下る中腹の傾斜地にある。
ミシマヤマとは、「三島神社の末社を祭祀したことがある山」か。他には考えようがないと思えるがどうであろうか。
小林に三島社があり、その関係も考えられる。村誌によれば、元禄年間、虎岩村には二社で明神が祭祀されている。その中に三島明神があるかもしれない。また、次のようなことも考えられる。三島社の本来の祭神は大山祇命といわれている。山神である。山神は元禄二年（1689）の記録によれば、虎岩村には３３社あったという（村誌）。ミシマヤマ地名の発生当時、これらの山神の一つが、この山に祀られていて、祭神が同じことから三島社が勧請されることになったのかもしれない。いずれも想像の域をでないのではあるが。
ミシマヤマ地名は、全国区地図には、１ヵ所にだけある。
【天王山】
テンノウヤマ。
この小字は、ミシマヤマ小字に囲まれている。
テンノウヤマとは「天王を祭祀していた山」である。天王は牛頭天王の略で、春から夏にかけて疫病の蔓延することがあって、それを疫神の祟りとして牛頭天王を祀るようになったという。
これも村誌によれば、元禄二年の虎岩村には、「天王」が一社数えられている。
なお、全国区地図にはテンノウヤマ地名が、中･大字として、５ヵ所に挙げられている。
【道下・上大道】
ミチシタ・ウエオオミチ。
これらの小字は、側稜の尾根の中腹にあり、ミチシタには道路が通っているが、ウエオオミチにはそれらしい道路は無いが、二つの小字は接近している。
ミチシタとは、「道路の下側の土地」ということになるが、現在の道路との関係でいえば、道上とならなければならない位置にある。だから現在は無いが、地名発生当時には道が上の方を通っていたことになる。
その、かっての道が通っていたと思われる場所にウエオオミチ小字がある。
ウエオオミチとは、「上の方にある大きな道」ということになる。これに対応する下大道に該当するのが、現在の県道下久堅知久平線かその付近にあったと思われる大きな道である。
全国地図にミチシタは２１ヵ所。

【北ウラ】
キタウラ。
この小字は、鎮守沢川が最後の段丘を下る、その左岸にある。
キタは「北側」であろう。ウラはウラ（裏）で、「後ろ側」である。段丘の上から見て、谷の傾斜地は後ろ側になる。
キタウラとは、単純に、「段丘面の裏側に当たる北向きの渓谷の斜面」か。
国土地理院の全国地図には、キタウラ地名は、中･大字として、４９ヵ所にも挙げられている。
【北ハシ】
キタハシ。
この小字は、鎮守沢川の左岸の傾斜地にあり、二つのキタヒラ小字に挟まれている。
キタハシとは、何か。意外に難しい。語源辞典によって、三通りの解釈を挙げておきたい。
①ハシはハシ（端）で、特に台地や丘陵の端をいう。キタハシとは、この小字の南側に広がる「三島山丘陵の北の端」をいうのかもしれない。
②ハシはハシ（橋）のこと。「北側にある橋」か。この付近は大道が通っていた可能性がある。その大道の鎮守沢川に架かる橋であろうか。
③キタハシ←キダハシ（階段）と清音化したもの。キタハシとは、「階段状の地形」をいう。この小字の南北両側には、キタヒラ（階段状になっている傾斜地)があり、同じ地形を別の言葉で表現した可能性はある。小字の所有者を明確に区別するためか。
国土地理院の２．５万分の１地図には、中･大字として、キタハシ地名が２ヵ所に記載されている。
【塚平】
ツカダイラ。
この小字は、三島山丘陵の北西端にある。
ツカダイラとは、「古墳のある平坦地」であろう。
村誌によれば、塚平古墳という。ここには円墳があって石室の残骸が露出しているという。巨大な天井石四枚が残っているという。天井石一枚を台にして、「長袖霊神」の石碑があるという。長袖とは、「武士に対して、神主･僧侶をいう」（広辞苑等)。神主か僧侶が不慮の死にあったのであろうか。
全国地図にはツカダイラ地名は、なぜか１ヵ所しか記録されていない。
【西ノ平】
ニシノヒラ。
この小字は、三島山丘陵の北西側傾斜地にある。下虎岩には、他に富田沢川左岸にも、ニシノヒラ小字がある。
ニシノヒラは、「西の方にある傾斜地」であるが、三島山の西をいうのか、大道の西をいうのか、よくわからない。
【濱井場】
ハマイバ。
この小字は、南組沢川中流域の右岸にある。ハマイバとは何か。二説ある。
①ハマはハマ（岨）で、「崖」をいう（語源辞典)。イバはイバ（井場）で、「水の流れている所」のこと。ハマイバとは、「崩壊地があって水の流れている所」となる。この小字は、龍江をはじめ、山間の各地にある。
②ハマイバとは、「正月の遊戯である破魔打を行った場所」（広辞苑）か。二組に分かれ、勝負で運勢を占った。村境に多いという。知久平の村境までは１８０ｍある。

【ウシナクボ】
この小字は、三島山丘陵の西側中腹にあって、南組沢川に向かう南向き斜面にある。
ウシナ←ウジナと清音化したものではないだろうか。ウジナとはムジナ（狢）と同じだという（国語大辞典）。とすれば、ウシナクボとは、「アナグマかタヌキの多い窪地」ということになる。
全国地図には、ウシナクボ地名は記載がない。
【中ツルネ】
ナカツルネ。
この小字は、三島山丘陵の西向きの傾斜地にある。西に突き出た尾根が三つほどあって、その真ん中あたりの尾根にある。
ナカツルネとは、「西に張り出した側稜の尾根の中の真ん中の尾根」か。
全国地図にはナカツルネ地名も載っていない。
【石原】
イシハラ。
この小字は「南の組」中字にあって、県道下久堅知久平線の東側の緩傾斜地にある。
イシハラとは、広辞苑にあるように、「故生石の多くある平地」であろう。
全国地図には、中･大字として、イシハラ地名は、７８ヵ所もある。
【タッショ場】
タッショバ。
この小字は、県道下久堅知久平線の東側、三島山丘陵の西側に下る最末端の傾斜地にある。
タッショバとは何を意味するのか。辞書類には無いが、タッショバ←タッチュウバと転訛したものと思われる。タッチュウバ（塔頭場）は「墓地」のことで、静岡･群馬の方言であるという（国語大辞典）。
タッショバとは、墓地のことをいう。この小字のすぐ近くには、現在でも墓地がある。
もちろん、全国地図には、タッショバ地名の記載は無い。
【油メン】
アブラメン。
この小字は、「南の組」中字の天竜川氾濫原の上の段丘上にある。
アブラメンとは、寺社で使用する灯明用の油の費用に宛てるために、免租されていた土地のことをいう。ここ、下虎岩では、北方にある常信院あるいは神明社で使う灯明用の油であったのであろう。
アブラメンとは、「常信院か神明社で使用する油代に宛てるために免租を受けていた土地」ということになる。
国土地理院の全国地図には、アブラメン地名は、中･大字として、１ヵ所に記載があるだけである。
同じような意味をもつアブラデン小字が上川路にはある。
【梨木平】
ナシノキダイラ。
この小字は、アブラメン小字の南側にあり、南組沢川の両岸に懸かる。
ナシノキはバラ科の果樹のこと。人家近くの山林中にあるヤマナシから育成されたもので、古くから栽培されている。ダイラ←タイラと濁音化したもので、「山間の平地」（広辞苑）をいう。
ナシノキダイラとは、「梨を栽培している丘陵地の中の平坦地」をいう。
全国地図には、ナシノキダイラ地名は４ヵ所に、中･大字として記載。

【シマノ洞】
シマノホラ。
この小字は県道下久堅知久平線と南組沢川との交差点の北東側にある。
シマとは、「水流に臨んでいて、周囲を水で囲まれた陸地」（国語大辞典）である。この小字は南組沢川とその支流の合流点にあり、二方向を水流に囲まれている。
シマノホラとは、「水流に囲まれた小さな谷」を意味する。
全国地図には、中･大字として、シマノホラ地名が１ヵ所ある。
【下平】
シモタイラ。
この小字は、県道下久堅知久平線の南側にあり、南組沢川と塩沢川の間にある。現在でも、果樹園や桑畑がある。
シモタイラの由来は何か。二通りの解釈を示す。
①シモタイラとは、「下の方にある山間の平坦地」である。天竜川の氾濫原のすぐ上の段丘だから、現地には合っている。
②シモタイラとは、「霜の降りやすい山間の平坦地」という解釈も捨てがたい。冷気が下って来やすい場所とも考えられる。
全国地図には、中･大字として、シモタイラ地名は５ヵ所、シモダイラ地名は４２ヵ所に記載されている。
【松ノ木平】
マツノキダイラ。
この小字はシモタイラ小字の南側にあり、三方をシモタイラ小字に囲まれた小さな小字である。
マツノキダイラとは、「目立つ赤松のある山間の平坦地」か。松は聖樹でもあり、地名にもよく使われる。
全国地図でも、マツノキダイラ地名が、６ヵ所に、中・大字として記載されている。
【滝沢】
タキサワ。
この小字は、柿野沢の塩沢川中流域の左岸の急傾斜地にある。
タキとは、「急な斜面を激しい勢いで下っている水の流れ」（国語大辞典）である。
タキサワとは、塩沢川そのものをいうのか、それとも塩沢川の支流をいうのか、はっきりしないが、いずれにしても、「激しい勢いの流がある谷川」ということになる。
全国地図にも、タキサワ地名は２５ヵ所、タキザワ地名は５６ヵ所と多くの記載がある。
【諏訪宮】
スワミヤ。
この小字は、タキサワ小字の南側の急傾斜地にある。
スワミヤというのだから、諏訪社を祀っていたところと思われるが、その痕跡はわからない。
スワミヤとは、とりあえず、「諏訪社を祀っていた土地」とでもしておきたい、
全国地図には、スワミヤ地名は載っていない。スワミヤそのものも、辞書類には無い。
【原】
ハラ。
この小字も、タキサワ小字の南西側の急傾斜地にある。タキサワ小字とテラサカ小字に囲まれている。
ハラとは、「未墾の入会草刈地」の意もあるが、ここでは、「山の頂と麓の中間の部分」という国語大辞典の解釈を採りたい。

【浅間・浅間平・浅間前】

アサマ・アサマダイラ・アサママエ。

柿野沢と知久平の境界にあり、分かりにくいところである。しかし、この三つの小字は、一緒にかたまっている。国道 256 号線の両側にわたっており、番匠田溜池の近くになる。

アサマには、「川や谷の浅い所」とか、「崩壊地」という意味があり、現地も、その通りであるという面もあるが、ここでは採りあげないことにしたい。アサマ関係の小字があまりにも揃っているからである。

アサマ小字にはかって浅間（せんげん）神社があったのであろう、その東にはアサママエ小字があり、北側にはアサマダイラ小字が接している。

アサマは浅間神社か、冨士の礼拝所があった所か。アサマダイラは、側稜の尾根の山頂部分に連なる緩傾斜地で、尾根続きの最高点は、冨士山に見立てられていたことも考えられる。アサママエは冨士山に見立てた山頂の手前か、あるいはアサマ小字の前ということか、決めかねている。

浅間神社は、古代末から、富士の信仰者たちによって開創され、江戸時代には浅間信仰が富士講の形で一般庶民の間に広がったという。富士山に見立てた高みに登拝することが多かったらしい。

全国地図には、アサマ地名が７ヵ所にあるが、アサママエ、アサマダイラ地名は載っていない。

【姥ヶ猿】

ウバガザル。

この小字は国道２５６号線の両側の急傾斜地にある。

この地名も分かり難い。仮説を一つ語源辞典によりながら提示したい。

ウバは動詞ウバフ（奪）の語幹で、「崩壊地名」を示す。ザル←サル←サリと転訛した語で、動詞サル（曝）の連用形が名詞化したもので、「突出地」をいう。サリと突出地との繋がりが明瞭ではないのが気になるが、これしかないか、とも思える。

以上から、ウバガザルとは、「崩壊した所がある、側稜の突出地」としておきたい。現地は、その通りの地形になっている。

全国地図には、ウバガザル地名もウバガサル地名も記載はない。

【牧之内・牧ノ内】

マキノウチ。

これらの小字は、牧野内中字の、塩沢川に沿った谷の中にある。１０ヵ所ほどに分散している。かっては、この付近一帯がマキノウチ字であったと思われるが、それにしても大きな面積を占めることになる。

マキノウチとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①マキは動詞マク（巻）の連用形が名詞化したもので、「山で取り巻かれた地」（語源辞典）をいうか。ウチ（内）は内側のことで、「谷の中の小平地」（語源辞典）であろう。従って、マキノウチとは、「側稜などの山で囲まれた小平地があちこちにある所」という意味であろうか。

②マキには、牧場の意味もある。馬の牧であろうが、マキノウチとは、「馬の牧場であった緩傾斜地であった所」を意味するか。村誌には、牧の内など小さいがすばらしい牧場であったろうし、上西門院領になってからも私牧として栄えたものと思われる、とある。

全国地図も１８ヵ所の記載がある。

【タイサ】
この小字は、柿野沢の塩沢川支流の東西に１ヵ所ずつある。
タイサ＝タイザで、下虎岩にもあり、既に触れている。この柿野沢のタイサの近くには、現在のところ寺社は見当たらない。かってはあったかもしれないが、掌握していない。とすれば、有力者の屋敷跡があれば、その屋敷に対するタイザということになる。タイザは屋敷の離れで、そこに客人を泊めたのか、芸能人などの集団が滞在することがあったのか、どうか。いずれにしても、はっきりしたことはまだ分かってはいない。
では、ここ柿野沢の有力者はどこに居住していたのか。離れに対する母屋はどこにあったのだろうか。
候補地は二つ。一つは、東西のタイサ小字を二つの頂点とした正三角形のもう一つの頂点となる位置にある峯のある所。この峯はヤシキバタ（屋鋪畑）小字にあり、現在は墓地になっている。ここに有力者がいたことが考えられる。
もう一つは、ヒガシ小字群のマエヒガシ（前東）小字のあるところに、やはり独立峯がある。ここも現在は墓地になっているようだが、ここに有力者の居住地があったとも思われる。
あるいは、二つのタイサは、それぞれ別の有力者のタイサであった可能性もある。塩沢川の支流を挟んで、それぞれが別々のタイサに繋がっていたのかもしれない。
【妻ノ神】
サイノカミ。
この小字は、柿野沢にあり、国道２５６号線の枝道に接しており、上久堅境までは４００ｍとやや離れているが、新地中字とは境を接している。
サイノカミ＝サエノカミで、「境にあって外部から村落へ襲来する疫神や悪霊などをふせぎ止めたり、追い払ったりする神」（国語大辞典）。
ここのサイノカミは新地中字との境界にある境ノ神であろう。新地は3000 台の地番と思われるが、小字が不明で、小字図が書けないでいる。
【ジャバミトビ地】
ジャバミトビチ。
この小字は２ヵ所にある。一つは、柿野沢の新地境にあり、中に堤を抱えている。もう一つは、１００ｍほど東よりの塩沢川左岸の傾斜地にある。
ジャバミはジャ（蛇）・ハミ（食）で、「崖崩れ」のこと（語源辞典）。トビチは、一般的には「離れた土地」のことをいうが、ここでは崖崩れによって土砂が崩れていった先のことをいうのではないだろうか。
以上から、ジャバミトビチとは、「崖が崩れて流れていった土砂が溜まった所」と解したい。
【家下】
イエシタ。
この小字は、タイサ小字の説明で述べた、二つの有力者候補の居住地の間にある。二つがそれぞれ塩沢川支流の東西にあり、目立つほどの高さの峯になっている。
二つの峯の頂上はいずれも墓地になっており、東のマエヒガシ小字にある峯の方が標高５６３．２ｍで、西の峯はそれより１２ｍほど低くなっている。
イエシタというのは、どちらの家の下なのか、ということになるが、あるいは、「双方の家の下」もあり得る。

【牧本】
マキモト。
この小字は、塩沢川に突き出た尾根の一部分が少し高くなっている所にある。
マキは動詞マク（巻）の連用形が名詞化した語で、「山脚が巻いた所」（語源辞典）であろう。モトは、麓のこと。
以上から、マキモトとは、「麓が巻いたようになっている小さな台地」か。村誌には牧場との関わりを肯定している記述があるが、ここでは採らない。
国土地理院の全国地図には、マキモト地名は、中・大字として３ヵ所に記載されている。
【屋鋪畑】
ヤシキバタ。
この小字は、塩沢川支流に沿って、北と南に、直線距離にして１５０ｍほど離れて１ヵ所ずつにある。北側のヤシキバタには、既に何回か登場している独立峰があり頂上には墓地もあって、近くには、有力者の屋敷跡と思われる場所もある。
ヤシキバタとは、「有力者の居住地があったと思われる畑」ということになる。南側のヤシキバタも山中の平坦地になっており少し高いところにあるので、これも屋敷跡があった場所であろう。
全国地図には、ヤシキハタ地名が１ヵ所に、中・大字として載っているが、ヤシキバタ地名は無い。
【家ノ洞】
イエノホラ。
この小字は、ヤシキバタ小字と西側のマキノウチ小字に囲まれている。
イエノホラとは何か。
イエというのは単なる屋敷ではなく、敢えてイエというのだから、「有力者の屋敷」と思われる。
イエノホラとは、「有力者の屋敷がある小さな谷」としたい。
イエノホラ地名は、全国地図には載っていない。
【下ノ沢】
シタノサワ。
この小字は、柿野沢の塩沢川が大きな支流と合流する付近にある。
シタはウエの反対語だから、ウエノサワ（上ノ沢）があると分かり易いであるが、見当たらない。とすると、このシタは動詞シタム（滑）とか動詞シタツ（滴）などの語幹で、「水がたれ流れる様子」（語源辞典）とした方がいいように思える。
従って、シタノサワとは、「岸の傾斜地から水が落ちてくるような谷川」を意味する。
全国地図には、１ヵ所だけシタノダワ地名が記録されている。
【流田】
ナガレダ。
この小字は塩沢川の大きな支流の流域にあり、近くにはジャバミトビチ小字がある。
この小字は、現在、畑と傾斜地になっているので、タ（田）はタ（処）であろう。ナガレは動詞ナガル（流）の連用形の名詞化したもので、「土砂の流れ」としたい。ナガレには傾斜地の意味もあるが、ここでは平坦地もかなりあるので、土石流のことと解したい。ジャバミトビチもあることだから、この付近は崩れやすい所と思われる。
ナガレダとは、「土砂が流れた所」であろう。
全国地図にはナガレダ地名は１０ヵ所にある。

【前東】
マエヒガシ。
この小字は２ヵ所にある。大きなマエヒガシには標高５６３．２ｍの独立峰があり、その東の方にあるもう一つのマエヒガシは小さい。
マエもヒガシもはっきりしているが、マエヒガシとなると分かりにくくなる。
マエ（前）には、正面という意味の他に、「ある時点より早いこと。以前」という意味もある（広辞苑）。
マエヒガシとは、「以前はヒガシであった所」を意味する。
近くにはオオヒガシもあり、この解釈の傍証ともなるが、ヒガシもオオヒガシも柿野沢の中心から見ると「東方にある場所」ということになるのであろうか。
全国地図にはマエヒガシ地名は、むろんのこと、載ってはいない。
【前東上ノ切・前東中ノ切・前東下ノ切】
マエヒガシウエノキリ・ナカノキリ・シタノキリ。
マエヒガシは、前述のように、「以前はヒガシであった所」。
キリには二つの意味がある。①開墾地と②焼畑である。
マエヒガシウエノキリとは、「以前はヒガシだった所の最上段の開墾地または焼畑」を意味する。
マエヒガシナカノキリとは、中段の開墾地か焼畑で、マエヒガシシタノキリとは、最も下の段にある開墾地か焼畑ということになる。
全国地図には、シタノキリ地名は無いが、ナカノキリ地名は２ヵ所に、ウエノキリ地名は１ヵ所に記載がある。
【大東】
オオヒガシ。
この小字は、前東丘陵の東側の傾斜地に２ヵ所ある。
大東とは、「ほぼ東の方」（国語大辞典）という意味があるので、このオオヒガシとは、「柿野沢の中心部からみて、ほぼ東の方角にある土地」を意味するものと思われる。
国土地理院の全国地図には、オオヒガシ地名は１８ヵ所に記載がある。
【大東上ノ切二ツ合】
オオヒガシウエノキリフタツアイ。
この小字は、「前東上ノ切」小字と「大東」小字の間に挟まれている。
フタツアイとは、「二つのものが合う所」であるが、何が合うのであろうか。解釈は二つ。
①「前東上ノ切」と「大東上ノ切」の二つが合う所という解釈。「大東上ノ切」小字は、現在なくなっているが、かっては、この「大東上ノ切二つ合」小字の中か、近くにあったと思われる。
②二つのものとは、側稜のこととする解釈もあり得る。この「大東上ノ切二つ合」小字で、二つの側稜が一緒になっている。
【天白山】
テンパクザン。
この小字は２ヵ所。一つは、ヒガシ小字群のある丘陵の南側にある、一段高い尾根の中腹にあり、もう一つは更に南の尾根に近い中腹にある。
村誌によれば、宝暦９年（1759）の柿野沢神社一覧を見ると、その中に、「ひかし」小字に天白社があり、天伯神が、このテンパクザン小字に祀られていたのではないか、と思われる。
テンパクザンとは、「天伯神を祭祀していた山」であろう。

【井端】
イバタ。
この小字は塩沢川の左岸の急傾斜地にあって、上久堅の境界に接している。
イバタとは、「流水のほとりにある土地」である。イは井（井）であるが、この場合は、掘り井戸や井水ではなく、川のことで、塩沢川をいう。
イバタについては、既に一度触れている。
【大平】
オオダイラ。
この小字は、上久堅との村境にあり、マキウチヤマ小字の北東側にある。側稜の尾根の末端にあたる。
オオダイラとは何を表しているのか。語源辞典によって見ていきたい。
オオ（大）←ヲ（峰）と転化したもので、「尾根」をいう。ダイラ（平）は「山頂の平らな場所」のこと。
合わせて、オオダイラとは、「尾根に沿った山頂の平らな場所」であろう。
全国地図には、中・大字として、オオダイラ地名は１０３ヵ所も挙げられている。
【通洞】
トオリボラ。
この小字は東小字群丘陵の南側の谷にあり、そこを流れる塩沢川の支流に沿って東西に谷がほぼ一直線に貫いているように見える。
トオリとは、動詞トオル（通）の連用形が名詞化した語で、「鼻や背などのまっすぐについている筋」（国語大辞典）という意味がある。
トオリボラとは、「真っ直ぐに伸びている小さな谷」を意味するものと思われる。
全国地図には、トオリボラ地名は記載が無い。
【辻】
ツジ。
この小字は、東小字群丘陵の東側の上久堅の境界部分にある。
ツジは一般的には、道路が十字形に交叉している所を指すが、ここには、まともな道路はない。
ツジとは、ツジ（旋毛）で、「人の頭の髪がうずまきのように巻めぐって生えているところ」のこと。この場合は、「尾根が突き出た高い所」を意味するものと思われる。
全国地図には、ツジ地名が、中・大字として、１２３ヵ所に挙げられている。「辻」の字が宛てられているのは１２１ヵ所になるが、四ツ辻の意味に用いられている所がかなりの数になるものと思われる。
【通洞上ノ切・通洞下ノ切】
トオリボラウエノキリ・トオリボラシタノキリ。
これらの小字はトオリボラ小字の上流側と下流側にある。
「通洞下ノ切」は急傾斜地にあるので、単なる平坦地や開墾地をいうのではなくて、「直線状に伸びた小渓谷の下流側にある焼畑」としたい。従って、ウエノキリも、「トオリボラの上流側にある焼畑か開墾地」ということになろうか。
【吉原】
ヨシハラ。
この小字は、塩沢川支流の最上流部にある堤の南側になる。
ヨシハラとは、恐らく、「葦が生えていた所」を意味するものと思われる。堤があることから、自然湧水の多いところであろう。

【百目】
ヒャクメ。
この小字は、マキウチヤマ小字の南側、尾根の反対側にある。トオリボラ小字の北側の急傾斜である。
ヒャクメとは何か。龍江では、下条氏が知行を与えるとき、一坪を一文といい、百坪に相当する広さの土地を百目と呼んだという（龍江村誌）。下久堅も同じ状況であったと思われるがどうであろうか。
百目とは龍江村誌によれば、「百坪の土地」ということができる。この傾斜地だから、焼畑が行われたのであろう。
全国地図には、ヒャクメ地名は載っていない。
【ショウチャクチ】
この小字は、ヒャクメ小字の尾根からさらに西に伸びる尾根を含めた南側の傾斜地で、塩沢川支流にまで達している。
ショウチャクチとは、どういうことだろうか。見当もつけにくい。思いつくままに、敢えて三説を挙げる。
①ショウチャクチ←ショウチクチ（小竹地）と転訛したもので、「笹の生えている所」の意か。
②ショウチャクチ←シホ・チ（地）・クチ（口）と転訛したもの。シホは動詞シボル（搾）の語幹で、「しぼり込んだような地形」（語源辞典）をいう。以上から、ショウチャクチとは、「だんだんと狭くなっていく入口のところ」を意味するか。
③ショウチャクチ←シホ（搾）・チャ・クチ（口）と転訛したもの。チャはチャルの語幹で、関東南部から静岡の方言で「投げ捨てる」の意（国語大辞典）から崩壊地を表すか。合わせて、ショウチャクチとは、「徐々に狭まる崖地の入口」をいうか。
他に、もっと適切な解釈がありそうに思えるがどうであろうか。
全国区地図には、むろん、ショウチャクチ地名は載ってはいない。
【ムシクボ】
この小字は、塩沢川支流の左岸にあり、右岸のトオリボラ小字の南側の急傾斜地にある。
ムシクボとは何を示すか。
ムシは動詞ムシル（毟）の語幹で「ちぎられた、もぎ取られたような地形」をいう（語源辞典）。
ムシクボとは、「崩れた崖のある窪地」か。
全国区地図には、ムシクボ地名は、1ヵ所ある。
【起ヶ洞・起ヶ洞日向・起ヶ洞日影・起ヶ洞中ノ切】
オキガホラ・オキガホラヒナタ・オキガホラヒカゲ・オキガホラナカノキリ。
オキ（起）はオキ（沖）で、「同じ平面で遠く離れたほうをいう」（国語大辞典）で、ここでは、「奥の方。沢の上流など」をいうのであろう。
オキガホラとは、「川の上流にある小渓谷」を意味する。塩沢川の上流である。
ヒナタ・ヒカゲは日当たりの善し悪しをいい、ヒナタは南向きの斜面になり、ヒカゲは北向きの傾斜地になる。
ナカノキリはウエノキリとシタノキリが消えてしまった結果と思われるが、オキガホラナカノキリとは、「川の上流部にある、中頃の高さにある焼畑」であろうか。
全国地図にはこれらの地名は無い。

【コウシロ】
この小字は、東小字群丘陵の塩沢川支流を挟んだ、南側の左岸傾斜地に、２ヵ所ある。いずれも北向きの斜面となっている。
コウシロとは何か。これも語源辞典を参考にしながら、三説を挙げる。
①コ（小）は意味を持たない接頭語か。ウシロ（後）は、「北向きで蔭になっているところ」である。従って、コウシロとは、「北向きの蔭地になっている所」をいうか。
②コウ←カ（欠）・ク（処）と転じたもので、「崖」などをいう。シロは「緩やかな傾斜地」。赤石山地で使われている語だという。合わせて、コウシロとは、「崖のある緩やかな傾斜地」のことか。
③コウシロ←コウジロと転じた語で、カム（神）・シロ（代）をいう。すなわち、コウシロとは「神領」を意味する。近くに「天白山」小字はあるが、やや突っ込み過ぎか。
全国地図にはコウシロ地名が３ヵ所に記載されており、「神代」「高代」「古城」の字が宛てられている。
【知久峯】
チクミネ。
この小字は、コウシロ小字とオキガボラヒカゲ小字の間の急傾斜地にある。尾根の頂上部も含んでいる。
語源辞典によれば、チクはツキの転訛した語で、ツキは動詞ツク（突）の連用形で「突き出た所。高い所」を意味する。ミネもミネ（峰）で「高くなった所をいう。意味が重複しているが、これ以外の解釈は難しいと思われるがどうであろうか。
チクミネとは、「尾根筋で高くなった所」を意味する。あるいは、知久氏との関係があるのであろうか。
全国地図には、チクミネ地名は記載が無い。
【滝場】
タキバ。
この小字は西流する塩沢川左岸にあり、ショウチャクチ小字の対岸に当たる。
タキは「流の早い川」をいうのが、一般的であるが、ここでは、もう少し宗教的な意味をもった場として考えたい。すなわちタキは「懸崖から激しく流れ落ちている水」のことで、「日本では古来、神聖視され、滝水にうたれて行を積むというようなことが行われる」（以上は国語大辞典）。そうした行の場ではなかっただろうか。
全国地図にはタキバ地名は１件しかなく、それも「滝馬」の字が宛てられている。
【清内林】
セイナイバヤシ。
この小字は、北西側が塩沢川支流に接している。側稜末端部の急傾斜地になっている。
セイナイバヤシとは何を意味するのか。二説を挙げておきたい。
①セイはセ（瀬）・ヰ（川）で、「流の速い川」をいう。ナイ←ナギ（薙）のイ音便化した語。従って、セイナイバヤシは、「崖があり流の速い川もある樹木の生えている所」となる。
②バヤシ＝ハヤシで、ハヤ（逸）・シ（接尾語）で、「急傾斜地」をいう（語源辞典）。合わせると、意味の重なる部分もあるが、「流が速く、崖もある急傾斜地」を意味するか。
全国地図には、セイナイバヤシ地名は載っていない。

【産水沢】
サンスイザワ。
この小字は、セイナイバヤシ小字とイヌノクイ小字の間にあって、小さな谷となっている。現在、この谷は棚状の果樹園になっていて、その西端を谷川が流れている。
サンスイザワもまた分かりにくい地名である。国語大辞典によって、二説を挙げたい。
①サンスイはサンスイ（山水）で「山中にある水」のこと。サンスイザワとは、「山中で流水となっている谷川」をいう。意味の重複が気になるが、その通の地形になっている。
②サンスイはサンスイ（三出）で、「霜」のことをいう。サンスイザワとは、「霜の降りやすい小さな渓谷」か。この谷の三方の斜面から降りてくる冷気がこの谷をゆっくりと下るさまは想像できる。現在は果樹だが、以前には桑園であったかもしれない。いずれも霜には弱い作物ではある。
サンスイザワ地名は、全国地図には記載されていない。
【犬ノ喰】
イヌノクイ。
この小字は、国道２５６号線に跨がった、上久堅との村境に近い緩傾斜地にある。
イヌノクイの語呂は、どこにでもありそうな小字を予想させたが、よく調べてみると、全国地図には１ヵ所も記載されていなかった。
イヌノクイとは何を意味するのか。「犬の喰い跡」とすれば文字通りの解釈になるが、それがどんなものか、想像することもできないので、ここでは採りあげない。
それでは、語源辞典によって見ていきたい。
イヌはイ（意味を強める接頭語）・ヌ（沼）で、「湿地」をいう。クイはクヒ（食）で、「食い違った地形」を意味する。この小字のほぼ中央部が少し高くなっていて、そこを国道が通っている。国道の両側は傾斜地になっており、それぞれが別々の谷川に流れ込んでいる。このことを「食い違っている」と見たのであろうと思われるが、どうであろうか。
従って、イヌノクイとは、「流水がそれぞれ別々の川に流れ込む湿地帯」となるか。
【番匠田】
バンジョウダ。
この小字は、国道２５６号線沿いにある番匠田溜池の南側にある。
バンジョウダとは何か。「番所のあった所」という解釈もあるが、知久城の番所にはなりにくい位置にあるので、採りあげないことにする。語源辞典によって二通りの解釈を挙げる。
①バンジョウダとはバジョウメン（馬上免）の転訛した語で、「検注使が立ち入る必要の無い田畑」をいう。検注とは、年貢を定めるため面積や耕作状況を調査すること。この小字では、年貢を免除されていたことになる。免除の理由は、安政四年（1857）に作られた番匠田溜池の維持管理のためか、あるいは近くに祭祀されていたと思われる浅間神社の神田であったか。前者とすれば、地名発生時期がやや新しすぎるかもしれない。
②バンジョウは中世の大工の呼称である。バンジョウダとは、「大工の耕作地で、年貢を免除されていた土地」であろうか。

【古垣外】
フルガイト。
この小字は、久保田沢川（沢俣田川）の右岸にある大きな小字である。側稜の頂上付近から末端部までを含み、緩傾斜地が多い。
フルガイトとは、「以前の古い屋敷跡がある所」であろうか。
国土地理院の全国地図には、１ヵ所にだけ、フルガイト地名が載っている。
【三角山】
サンカクヤマ。
この小字は、フルガイト小字の北東側の隅にある小さな小字である。番匠田溜池から流れ出る井水の左岸側となる。
サンカクヤマ（三角山）とは、字面の通で、「形が三角に見える山」であろうが、この小字の中には無い。
恐らくは、サンカクヤマ小字の上方の側稜末端部はフルガイト小字になるが、このフルガイト小字の側稜末端部を知久平の中心部からみると、形状が三角形になっている。フルガイト小字は、以前には、サンカクヤマ小字であったのかもしれない。
こんな想像をしてみたが、どうであろうか。
全国地図にはサンカクヤマ地名は２７件と多く、全て「三角山」の文字が宛てられている。
【平山】
ヒラヤマ。
この小字は、フルガイト小字の東側で山頂部に近い緩傾斜地にある、小さな小字である。
ヒラヤマとは何か。全国地図にはヒラヤマ地名が９９ヵ所にもあるので、よくある地名ということになる。
ヒラヤマのヒラ（平）は、「傾斜地」をいう。ヤマ（山）は「森林」のこと。合わせると、「傾斜地にある森林」ということになるが、これでいいのだろうか。当たり前すぎるような気もする。あるいは、「神聖な土地」という意味を含んでいるのかもしれない。
【ハイアガリ】
この小字は、柿野沢の三角山丘陵の標高５１６．３ｍの一つの峰の直下にある。
ハイアガリとは何か。これも難しい地名である。思い切って仮説を三つ。
①ハイアガリは文字通りに解釈すれば、動詞ハイアガルの連用形の名詞化した語で、「回り込みながら上る」ということになる。それは、何をするためだろうか。畑の除草と考えるのが素直であろう。畑とは焼畑である。ハイアガリとは、「除草作業も終わる斜面を上がりきった所」か。
②ハイには「小平地」の意味があるという（語源辞典）。アガル（上）は、「上方に位置する」を表す（広辞苑）から、ハイアガリとは、「高いところにある小平地」となる。結論はすっきりしているが、語順が逆であることと「ハイ即ち小平地」であるのかどうかが気になる。
③ハイはハイ（灰）で、アガリは「上ってきた所」だから、ハイアガリとは「灰が上ってきて溜まっている所」か。これも焼畑で、斜面の下端から天下点火して燃え切った焼畑の灰の一部が傾斜地の高みを少し越えた所に溜まり易いことを表しているのかもしれない。この場合の焼畑は丘陵の南向きの斜面で行われていることになる。
なお、全国地図には、ハイアガリ地名は載っていない。

【ソトデ】
ソトデ。
この小字は、柿野沢の三角山丘陵周辺に３ヵ所ある。
ソトデはソトデ（外出）か。元々は出作りで、ソトであったこの地で耕作を始めていたのであるが、後にそこに住居まで移すことになったのではないか。
出作りというのは、「焼畑を含めた耕地が遠隔地に造成された時、効率化をはかって営農地に住居をかまえ、そこで生活すること」（民俗大辞典）をいう。遠隔地というのは、江戸時代には他村である場合が多かった。自分の村の「外に出る」ことを意味する。
全国地図にも、ソトデ地名は２ヵ所あり、中・大字として記載されている。
【袋洞】
フクロボラ。
この小字は、柿野沢の三角山丘陵にあり、ソトデ小字に囲まれている。
フクロボラとは、文字通り、「袋状に側稜で取り囲まれた小さな谷のある所」であろう。辞典類には、水に取り囲まれた場所の例はあるが、山に囲まれた土地の例は無いので、多少気になるが、この解釈で間違いではないと思っている。
フクロホラ地名もフクロボラ地名も、全国地図には載っていない。
【南沢・南沢中ノ山】
ミナミザワ・ミナミザワナカノヤマ。
これらの小字は国道２５６号線の南の方にある丘陵の北東側傾斜地に、それぞれ２ヵ所ずつある。
ミナミザワとは、字面の通りで、「南の方にある山間の湿地」をいう。「南の方」としたのではないかと思われる。
また、ミ（接頭語）・ナミ（波）・サワ（沢）とする解釈もある。意味は「波打ったような地にある山間の湿地」となるが、どこにでもありそうな地形なので、ここでは採らないことにする。
ミナミザワナカノヤマは、二つのミナミザワ小字に挟まれている。意味は「南沢小字の間にある林地」であろう。もう一つのミナミザワナカノヤマ小字は、ぽつんと離れた所にあるが、かっては、ミナミザワ小字がこの付近まで広がっていたのではないかと想像している。
国土地理院の全国地図には、ミナミザワ地名が４０ヵ所、ミナミサワ地名が２８ヵ所も記載されている。
【北平】
キタダイラ。
この小字は、国道２５６号線の南側、ミナミザワ小字の北側にあって、緩い傾斜地になっている。
キタダイラとは何を意味するのか。二通りの解釈を示したい。
①キタ←キダと清音化したもので、キダ（段）は「わかち。きれめ」（広辞苑）を意味する。ダイラは山の麓付近で平坦地に近いような緩やかな傾斜地のこと。すなわち、キタダイラとは「段がある、緩やかな傾斜地」を意味するものと思われる。ここには一ヵ所の段がある。
②キタは方角を表す「北」で、ダイラは同様に、麓の非常に緩やかな傾斜地のこと。「北」というのは、南側にミナミザワ小字があるために与えられた語としか思えない。この解釈には、少し無理があるかもしれない。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、７ヵ所にキタダイラ地名が載っている。

【黒岩】
クロイワ。
この小字はキタダイラ小字の西隣にあり、緩傾斜地になっている。
クロイワは何を意味するのか。「黒っぽい岩のある所」ではないようだ。では、何に由来するのであろうか。クロはクロ（畔）で「小高くなった所」（国語大辞典）をいう。イワハイワ（岩）で、「小石まじりの地」（語源辞典）である。
合わせて、クロイワとは、「小高くなっている所がある、小石まじりの土地」とうことになる。この小字の中央部は側稜の尾根の麓になり中央部が少し盛り上がった地形になっている。
全国地図には、中・大字として、クロイワ地名は６６件も挙げられている。
【上ノ原】
ウエノハラ。
この小字は、柿野沢クロイワ小字の北側で下流側になる。
ウエノハラについては二説を挙げる。
①ハラは「平らで広い土地」（国語大辞典）で、ウエノハラとは、「上の方にある、平らで広い土地」か。西の方には、少し離れているが、ハラ（原）小字があるので、この小字に対して「上の方にあるハラ」としたのではないかと思われる。ウエノハラはかなり緩い傾斜地になっているので、平坦地とみなすことができたのであろう。
②ウエ←スエ（末）と転訛したもので、「渓流の上流部」のことをいい、ハラはハラ（開）で、「開墾地」を意味する（以上は語源辞典）。ウエノハラとは、「渓流の最上流部にある開墾地」か。
国土地理院の全国地図には、ウエノハラ地名は、中・大字として、８１件も挙げられている。
【野田・野田ノ原・野田ノ沢】
ノタ・ノタノハラ・ノタノサワ。
これらの小字は、柿野沢の白山大権現のお宮の周辺にあり、緩傾斜地になっている。
ノタとは、「ヌタの転で湿地。低湿地」をいう（広辞苑）。ヌタはヌタ（沼田）で、ヌ（沼）・タ（処）を意味する。すなわち、「湿地」か「湿田」ということになる。
ノタノハラのハラはハラ（腹）で、「山の頂と麓の中間の部分」（国語大辞典）であろう。ノタノハラとは、「山の中腹部分で、湿地のある所」であろう。
ノタノサワは、「湿地の中を小さな谷川が流れている所」となる。久保田沢川（沢俣田川）の支流が西に向かって流れている。
全国地図にはノタ地名は１５ヵ所に、中・大字として記載されている。
【野田下ノ切・野田上ノ切・野田前田上ノ切】
ノタシタノキリ・ノタウエノキリ・ノタマエダウエノキリ。
これらの小字は、野田小字群の西端に集まっている。白山大権現の境内ともいえるノダ小字の前面に、三つの小字が並んでいる。
キリはキリ（切）で、「切り開いた地」すなわち開墾地を表す（語源辞典）。シタノキリは「下側の開墾地」で、ウエノキリは、「高い方の側の開墾地」であり、ノタメダウエノキリはノタウエノキリの上側にあり、ノタウエノキリを分筆したものと思われる。

【ツル子】
ツルネ。
この小字は、野田小字群のある丘陵の北端にあって、傾斜地を下る直前の所にある。
ツルネはツルネ（蔓畝）で、「蔓のように長くのびて連なった小高い所」（国語大辞典）である。現在のツルネ小字もかっては長く尾根にそって伸びていたと思われるが、わずかに尾根の北端に残すだけになっているのではないかと思われる。
全国地図には、ツルネ地名は、中・大字として２ヵ所に挙げられており、いずれも「鶴根」の字が宛てられている。
【八原下前田向】
ハチハラシモマエダムキ。
この小字も、野田小字群のある丘陵の西端にあって、ツルネ小字の南側になる。これも小さな小字である。
長くてややこしい小字名である。ハチはハチ（鉢）で、鉢を伏せたような山をいう。野田小字群丘陵の最高地である。ハチハラ（鉢原）は、「鉢を伏せたような山の近くの中腹にある平坦な所」か。シモマエダムキは、「下前田に対面している所」である。シモマエダとは、マエダシモノキリ（前田下ノ切）のことであろうか。
以上から、「八原下前田向」とは、「円錐形の山の中腹部分にあり、野田前田小字の下の方に向き合っている所」ということになりそうだが、どうであろうか。
【外ノ平】
ソトノタイラ。
この小字は二ヵ所にある。一つは、野田小字群丘陵の西端から傾斜地を下る傾斜地に懸かる小字である。もう一ヵ所は、丘陵地の麓まで降りきるまでの緩傾斜地にある。
ソトとは、外部のこと。ここでは野田小字群丘陵の上段面から見てソトということであろう。タイラは「丘陵の中腹から麓までの間の比較的平坦な所」か。
従って、ソトノタイラとは、「丘陵の上段面から外側の急傾斜地や麓に平坦地のある所」を意味していると思われる。
全国地図には、ソトノタイラ地名は載っていない。
【西ノ平】
ニシノタイラ。
この小字は、東西からソトノタイラ小字に、ほぼ挟まれている。
ニシノタイラとは、字面通りに解釈すれば、「西の方にある山間の平地」となるが、この小字は緩急の傾斜地からなっており、平地はない。
そこで、二つ、仮説を挙げてみたい。
①タイラはタ（語調を調える接頭語）・ヒラ（傾斜地）で、ニシノタイラとは、「野田小字群丘陵との西端にある傾斜地」をいう。４００ｍほど南東の方にキタダイラ（北平）地名があるが、このキタに対するニシにしては、方角がずれていることになるので、ここでは採らない。
②ニシは動詞ニジム（滲）の語幹が清音化したもので、「湿地」のこと（語源辞典）。ニシノタイラとは、「自然の湧水がある傾斜地」のことか。
この小字の北側は柿野沢の 3000 番台なので小字名が現在のところ不明であるが、それが明らかになれば、もう少しはっきりしてくるかもしれない。

【後・ウシロ】
ウシロ。
この小字には、大きな小字と小さな小字がある。二つとも野田小字群丘陵の西側の谷にある。更に、１００ｍほど南側に「ウシロ」小字がある。
ウシロとは、「背後になっている所」であろうが、この場合、何の背後になっているのであろうか。それは、恐らく、野田小字群丘陵地の中心部分からみて、丘陵の背後になっている土地であろう。中心部といういのは、白山大権現の境内であろうか。
全国地図には、中・大字として、ウシロ地名は、２３ヵ所にある。
【天狗山】
テングヤマ。
この小字は、野田小字群丘陵の西側に延びた側稜の頂上部分から麓までの斜面に広がる。
天狗は「山の神の霊威を母胎とし、怨霊・御霊など浮遊霊の信仰を合わせ、また、修験者に仮託して幻影を具体化したもの」（民俗大辞典）という。
テングヤマとは、「天狗を祀っていた山」か。村誌には宝暦９年（1759）の柿野沢神社の表がある。それには、ウシロ小字に天狗社の小祠が２社、「天はく」「稲荷眷属」とともに記載されている。この表からは、天狗が天白や山ノ神との関連がうかがわれる。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、テングヤマ地名が４２ヵ所も挙げられている。
【伝上】
デンジョウ。原資料にはデンガミとある。しかし、町村地名大鑑にはデンジョウとあり、デンガミでは語呂が悪く、違和感が強いので、デンジョウとした。
この小字は、野田小字群丘陵の西端の傾斜地中腹にある。周辺にはウシロ小字群がある。
デンジョウとは何を意味するのか、よくわからない地名であるが、あえて三説を挙げたい。
①デンジョウ←テンジョウの転で、「天（然の）井」を音読みにしたものか（語源辞典）。デンジョウとは「自然湧水のある所」である。結論はすっきりしているが、その過程に無理がありそうな気もする。
②デンはデン（殿）で、「貴人の邸宅」（国語大辞典）。ジョウはジョウ（場）で「場所」のこと。デンジョウとは、「貴人の邸宅のあった所」になるが、音読みばかりの地名というところに引っ掛かりがある。
③デンジョウ←テンジョウ（点定）の転で、「農作物などを差し押さえたりすることができた人が住んでいた屋敷」か。点定とは、「中世、土地・家屋や農作物などを差し押さえたり、強制的に没収したりすること」（国語大辞典）である。これも解釈に無理があるか。
全国地図にはデンジョウ地名は２ヵ所にあるが、デンガミ地名は無い。
【家ノ上】
イエノウエ。
これも野田小字群丘陵の西端にあって、デンジョウ小字のすぐ北側にある。
イエノウエは、「有力者が住んでいた居住地」を意味するものと思われる。デンジョウ小字の解釈によって、多少の相違は出てくるものの、イエノウエの由来はこれでいいのではないだろうか。

【井戸ノ洞】
イドノホラ。
この小字は二ヵ所にある。一つは、柿野沢区民センターに近くにあるが、いずれもこれらの小字の中を久保田沢川が流れている。
イドはヰ（井）・ド（処）で「流水のあるところ」をいう。イ（井）は掘り井戸とは限らない。
イドノホラとは、「小川が流れている小さな谷」をいう。小川とは久保田沢川のことである。
どこにでもありそうな地名であるが、全国地図には意外にも、イドノホラ地名は載っていない。
【青木洞】
アオキボラ。
この小字も二ヵ所にある。いずれも久保田沢川の二本の支流が近くを流れている。
アオキボラとは何を意味しているのか。解釈を二つ。
①アオキ（青木）は、上伊那郡の方言で「針葉樹」のことをいう（国語大辞典）。とすれば、アオキボラとは、「針葉樹の多い小さな谷」ということになるか。
②アオは動詞アオグ（仰）の語幹で「傾斜地。崩崖」を意味する（語源辞典）。キ←サキ（崎）で「側稜が突き出ている所」を表す。アオキガホラとは、「崩れ地があって側稜の尾根が突き出ている所にある小さい谷」を意味する。この解釈は、やや無理気味か。
全国地図には、中・大字の中に、アオキボラ地名は一つも無い。
【梨子ノ木】
ナシノキ。
この小字は、ツカゴシ小字を挟んで二ヵ所にある。傾斜地の間に縦に棚田が並んでいる。
ナシノキとは何か。二通りの解釈を示したい。
①ナシノキは、文字通りで、傾斜地に「自生の梨が生えていた所」であろう。
②ナシ←ナラシと転じたもの（語源辞典）で、ナラシは動詞ナラス（平）の語幹で、「ならしたような緩傾斜地」をいう。キはキ（割）で「割れ目」のこと（語源辞典）。ナシノキとは、「山地の中を帯状の堆積地が割れ目のように入った所」となるか。結論は現状に合っているが、そこに至るまでがやや無理筋か。
全国地図には、ナシノキ地名が多く、２２ヵ所に記載されている。自生している梨が多いということであろう。
【ツカコシ・ツカゴシ・塚越】
ツカコシ。
ツカゴシ小字は３ヵ所、ツカコシ小字も３ヵ所、ツカコシ（塚越）小字は１ヵ所ある。これらの小字のある場所は大きく二つに分かれる。一つのグループは、野田小字群丘陵の南の方にあり、もう一つは国道２５６号線に沿っている。
ツカは「土が盛り上がって小高くなった所」（国語大辞典）で、コシは動詞コス（越）の連用形が名詞化した語で、「（どっちへ向かっても）越える所」をいうか。
従って、ツカコシとは、「（どっちへ行っても）小高く土の盛り上がった所を越えていくことになる場所」であろう。ツカコ（ゴ）シ小字には、そんな小高い山や側稜の末端部が複数ある。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、ツカコ（ゴ）シ地名は１９ヵ所にある。

【峠】
トウゲ。
この小字のある所には、標高６３２．２ｍの円錐形の山がある。柿野沢の国道２５６号線の南の方になる。この円錐形の山を二本の道路が通っている。
トウゲとは、「山の上りから下りにかかる境」（広辞苑）である。この小字の中にある二本の道路は、いずれにもこうした峠の部分がある。
こうした峠では通行者が行路の無事を祈って、峠の神（境界神）に手向けをしたのであろう。
全国地図にはトウ（ウ）ゲ地名は、９４ヵ所にもある。
【竿地】
サオジ。
この小字は３ヵ所にある。一つはトウゲ小字の西側傾斜地にある大きな小字と小さい小字の一つは、ツカコシ・イヌノクイ小字の近くに、もう一つの小さい小字はもっと西側のハチガイト小字の近くにある。
サオジもよく分からない地名。サオは「検地などで土地を測量する際に用いた定規の棒」（国語大辞典）ということになるが、後が続かない。検地竿がどうしたのか、見えてこない。サオシ（竿師）もすぐに出てくるが、釣り竿も含めて竿の需要が地名になるほど多かったとは思われない。
とすれば、次のように考えたいがどうであろうか。
サオジ←サオンジと転訛したもの。サは「語調をととのえる接頭語」、オンジはオンジ（陰地）で、オンチ（隠地）と同じ意味をもつ。隠地（陰地）とは、「隠れて耕作し、検地をうけないため租税の対象にならなかった田畑」（国語大辞典）である。
サオジとは、「貢租をのがれるための隠し田」（語源辞典）であったと思われる。
全国地図には、サオジ地名は、１件も記録されていない。
【久保】
クボ。
この小字は、大きい方のサオジ（竿地）小字の南側に貼り付いている、小さな小字である。側稜の南側傾斜地になっている。
クボは窪地を意味するが、ここでは「谷間」を意味するものと思われる。この小字の場合は、谷の北側半分の傾斜地しか無い。しかし、それも「谷間」ということができるのではないだろうか。
【入ノ峠】
イリノトウゲ。
この小字は側稜の尾根にあり、周囲にはハチガイト・ミヤノセ・サオジ・サワバタなどの小字がある。もう一つ、小さなイリノトウゲ小字が、すぐ北西側にある。
イリノトウゲは現在は道路が通っていないので、「川の上流部の奥まったところにある、山の上りから下りにかかる境」としておきたい。とはいっても、これも道路を意識している解釈であろう。現在は無いが、かってはこの側稜の尾根を横断する、北側のツカコシ小字集落から南側のヤマノタ小字集落に抜ける峠道があったのであろう。小さなイリノトウゲ小字の存在が、その傍証となる。現在は川沿いの道路が開けれて峠路を必要とすることが無くなったものと思われる。
イリノトウゲは全国地図には一つも記載されていない。

【八垣外】
ハチガイト。
この小字は、柿野沢にあるが、小林との境界線に沿うようにして走る道路の東西に亘っている。大きい小字と小さい小字がある。
ハチガイトとは何か。二つの解釈を挙げる。
①ハチは８で、めでたい数字でもある。ハチガイトとは「８軒ないしそれに近い数の住宅のあった所」か。
②ハチ←ヤチ（菿）と転訛したもので、「湿地」をいう（語源辞典）。従って、ハチガイトとは、「湿地帯にある居住地」を意味するものと思われる。
全国地図には、中・大字として、２ヵ所にハチガイト地名がある。宛てられている漢字は、「八貝戸」「蜂谷戸」となっている。
【宮下・宮ノ上・宮ノ背】
ミヤシタ・ミヤノウエ・ミヤノセ。
これらの小字は、柿野沢の山口熊野神社の北側にある。ミヤシタ小字は３ヵ所で、他は１ヵ所ずつであるが、ミヤノセ小字は広い。
ミヤは全て、上記の山口熊野神社のこと。ミヤノシタは「熊野神社より低い所」をいい、ミヤノウエは「熊野神社より高い所」であり、ミヤノセは広大であり、熊野神社よりも高い所もあるが、低い所もある。セ（背）は、「物のうしろ側の部分」（国語大辞典）を意味するので、ミヤノセとは、「熊野神社の裏側の土地」をいうことになる。
全国地図には、ミヤノセ地名が１ヵ所、ミヤノウエ地名は２９ヵ所、ミヤノシタ地名が８４ヵ所と、神社に対する尊崇の状況がみえて面白い。ウエは遠慮するが、シタならいいということであろう。
【引廻し】
ヒキマワシ。
この小字は野田小字群丘陵の北側の傾斜地にあり、柿野沢の白山大権現のあるノタ小字のすぐ北隣になる。
ヒキマワシは、動詞ヒキマワスの連用形が名詞化した語で、「幕、布などをまわりに張りめぐらすこと」（国語大辞典）である。この小字のある傾斜地の上は柿野沢の白山大権現の境内になっており、その北側傾斜地を張りめぐらされた幕に見立てたものと思われるが、祭日などで、実際に幕を張ったこともあったかもしれない。
ヒキマワシとは、「お宮のまわりに張った幕または幕にみたてた斜面」を意味しているものと思われる。
駄科にもヒンマシ（引廻）小字があり、舞台の幕に見立てたものと解釈したが、あるいは、実際に舞台を組んだことがあるのかもしれない。
全国地図には、ヒキマワシ地名の記載は無い。
【黒見洞】
クロミボラ。
この小字は、入ノ峠沢端丘陵の南側の堆積地である谷にある。現在は棚田が多くなっている。
クロは伊那谷南部の方言で「端。ふち」を表す。よく使っているわりには、その語源ははっきりしない。ミは「水」のこと（国語大辞典）。
クロミボラとは、「ふちを水が流れている、小さな谷」となる。この小字の南縁を伝田沢川の最上流部が流れている。
全国地図にクロミボラ地名は載っていないが、クロミ地名は７ヵ所にある。

【山ノ田】
ヤマノタ。
この小字は、入ノ峠・沢端丘陵の南側の傾斜地と堆積地の二ヵ所にある。
ヤマノタは分かりきったような地名であるが、二通りの解釈を挙げたい。
①ヤマノタを素直に解釈すれば、「山林の中にある耕作地」か。現在は、1ヵ所が水田、もう1ヵ所は畑と住宅地になっている。
②ヤマノタは「山林にある湿地」とする。ノタはヌタ（沼）で「湿地」をいう。
全国地図には、ヤマノタ地名は、中・大字として、1ヵ所に載っている。
【猫洞】
ネコボラ。
この小字は、伝田沢川最上流部の左岸の緩傾斜地にある。
ネコボラとは何か。二説を挙げる。
①ネはネ（根）で、傾斜地の麓の部分をいうのであろう。コは場所を表す接尾語。ネコボラとは「傾斜地の麓になっている、小さな谷」か。
②ネはネ（寝）で、「物が倒れる」（国語大辞典）の意がある。そこで、ネコボラとは「急傾斜地が倒れるように崩れた所のある小さな谷」を意味するか。
国土地理院の全国地図には、ネコボラ地名は1ヵ所も無い。
【河原ノ沢】
カワラノサワ。
この小字は柿野沢の上久堅との村境に近く、山口沢川の上流部が近くを流れている。側稜の尾根とその中腹までの傾斜地となっていて、水流はない。
カワラノサワとは何か。川が小字内を流れておれば解釈は簡単であるが、その川はない。そこで次のように考えたがどうであろうか。
カワラは「沢の行きづまり」（国語大辞典）であり、サワは「谷」のこと。
カワラノサワとは、「沢が行き詰まっている谷」をいう。山口沢川の支流の谷が、この小字に入ってきているが、すぐに側稜の尾根になってしまっている。この谷には、ほとんど水流はないと思われる。
もしかしたら、瓦でも焼いたことがあったのかなとも思ったが、この地域で瓦の需要が出てくるようになったのは明治以降であるというので、あきらめることにした。
全国地図には、カワラノサワ地名は無い。
【柿ノ沢・柿之沢】
カキノサワ。
カキノサワ小字は、非常に多い。少なくとも、「柿之沢」小字は4ヵ所、「柿ノ沢」小字は5ヵ所はある。
カキノサワとは何を意味しているのか。これらのたくさんの小字に共通している解釈でなければならない。
そうした意味で、カキノサワは「果樹の柿がある小さな谷」ではない。では、どのように考えたらいいのだろうか。語源辞典によってみていきたい。
カキは動詞カク（欠。掻）の連用形が名詞化したもので、傾斜地の崩れなど、「崩壊地形」をいう。サワは先のカワラノサワのサワと同じで、「谷」をいう。必ずしもはっきろとした流水がなくてもいい。
カキノサワとは、「崩壊地のある谷」ということになる。ありふれた由来であるが、カキノサワ地名が多いことから考えても、当然の結論ではないだろうか。
全国地図には、3ヵ所に載っている。

【家ノ上】
イエノウエ。
この小字は、柿野沢の伝田沢川支流の最上流部左岸にあたる。その上流側と下流側に１ヵ所ずつ、２ヵ所にある。
イエ（家）は居住地で、「有力者の居住地」としてきている。すなわち、イエノウエとは、「有力者の居住地の上の方にある土地」ということになる。有力者の居住地がどこにあったのか。二ヵ所のイエノウエ小字の位置から判断して、恐らく支流右岸のモリ小字内と思われる。
なお、ここでは採りあげないことにしているが、次のような解釈もあり得ないわけではない。
それは、イエ←ヰ（井）・エ（江）と転じたもので、イエノウエとは、「水くみ場である水路の上の方にある土地」となる。別の小字であるイエノイリのイエも同じように考えると、やや無理なので、ここでは採用しないことにした。
【家ノ入】
イエノイリ。
この小字は、二つのイエノウエ小字の南側になり、支流左岸であるが、支流からは７００ｍほど離れた位置にある。
イエノイリとは、「有力者の居住地の奥の方にある土地」ということになる。有力者はモリ小字にいたことを想定している。
【石原田】
イシハラダ。
この小字は、柿野沢の国道より南の方にある、伝田沢川の支流が開いた谷に、２ヵ所ある。支流の上流には、柿野沢配水池がある。
イシハラダとは、「石の多い平地かそこにある田んぼ」をいう。現在は水田が多いが、地名発生時はどうであったのか。
この小字は、伊那谷南部の各地にある。
【天神山】
テンジンヤマ。
この小字は、柿野沢の伝田沢川支流の左岸の傾斜地にある。側稜の先端部に当たる。
テンジンといえば、本来は天の神であまつかみのことをいうが、一般的には菅原道真の神号のことである。また祟りを怖れる御霊信仰ではなく、学問の神として祀られていることが多い。
テンジンヤマとは、「天神様を祀る山」ということになるが、宝暦９年（1759）の柿野沢神社の中にテンジンは無い（村誌）。それでも天神様あるいは天満宮関係の祠があったのではないかと思われるが、どうであろうか。
全国地図には、テンジンヤマ地名が、中・大字として、４１ヵ所に記載されている。
【森】
モリ。
この小字は、柿野沢配水池のある丘陵の尾根から南向きの傾斜地を含めた地域にある。
モリ（森）とは、神社がまつられている土地の木立という意味が多いようであるが、この柿野沢のモリについては、村誌にはお宮の記載は無い。そして円錐形の山にはなっていない。
ではモリとは何か。モリは「樹木が茂り立つ所」（広辞苑）であろうか。それだけでは無いような気もする。
全国地図には１２８ヵ所のモリ。

【梅前田】

ウメマエダ。

この小字は、伝田沢川の支流が流れる土砂堆積地にあり、二つのイシハラダ小字に挟まれている。

ウメマエダとは何を意味するのか。ウメはウメ（埋）で、動詞ウム（埋）の連用形が名詞化した語で、「支流が運んだ土砂が堆積した所」であろう。マエダは、有力者の居住地か神社等の「前方にある水田か場所」か。

従って、ウメマエダとは、「神社等の前方にあって、川が土砂を運んだ所あるいは水田」ということになる。神社か有力者の居住地があったのは、北東側か南西側のどちらかの丘の上と思われる。

全国地図には、ウメマエダ地名は記載が無い。

【沢端・サワハタ】

サワバタ・サワハタ。

これらの小字は、伝田沢川支流の最上流部周辺の土砂浸食堆積地にある。サワバタ小字とサワハタ小字が２ヵ所ずつある。

サワハ（バ）タとは何か。語源辞典によって、二説を挙げる。

①サワ（沢）は谷川のこと、ハ（バ）タはハ（端）・タ（処）で、「そば。わき」（語源辞典）である。即ち、サワハ（バ）タとは、「谷川の近くの土地」をいう。

②ハタは動詞ハタク（叩。砕）の語幹から、「崩壊地」を意味する。サワハ（バ）タとは、「谷川に添った土地で崩壊地のある所」ということになる。

なお、全国地図には、中・大字として、サワバタ地名が２件、サワハタ地名も２件が挙げられている。

【日並沢】

ヒナミザワ。

この小字は、伝田沢川の支流が開いた谷にある。左右の両岸を含む大きな小字になっている。

ヒナミザワとは何を意味するのか。語源辞典によって、二通りの解釈を挙げる。

①ヒはヒ（日）で、「日当たり」のこと。ナミはナメ（滑）で、「滑らかな緩傾斜地」をいう。以上から、ヒナミザワとは、「日当たりのいい緩傾斜地」か。谷の中心部分の下流側は、現在は棚田になっている。

②ヒナミはヒナ（日）・ミ（水）で、ヒナミザワは「日当たりのいい湿地を流れる谷川」のことか。

全国地図には、ヒナミ地名は４ヵ所にあるが、ヒナミザワ地名は無い。

【チカ洞】

チカボラ。

この小字は、ヒナミザワ小字の西隣にあって、伝田沢川の別の支流の最上流部にある傾斜地である。

チガホラとは何か。これも二通りの解釈を挙げる。

①チガホラはチ（千）・ガ（ケ）・ホラ（洞）で、チはチガヤ（茅萱）のことで、原野や山地に自生している。子どもの頃、食べたことのあるツバナはチガヤの幼穂である。和名の「千」は束生していることをいうらしい（牧野植物図鑑）。すなわち、チガホラとは、「チガヤが自生している小さな谷」か。

②チガは動詞チガフ（違）の語幹で崖や段丘のように「高さの食い違った地形」を表す（語源辞典）。チガホラとは「棚田状になっている小さな谷」を意味するか。

全国地図にはチガホラ地名は無い。

【伝田沢・伝田沢道下】

デンダザワ・デンダザワミチシタ。

これらの小字は、山口沢川上流部で上久堅との村境にある。デンダサワ小字が４ヵ所、デンダザワミチシタ小字が１ヵ所ある。

デンダザワとは何を意味しているのか。デンダ姓もあることなので、その意味は明瞭であろうと思い込んでいたのであるが、調べてみてもよくわからなかった。

しかし、やっとデンダの影を捉えたのは、インターネットのjapanknowledgeであった。デンダ＝ゼンゴであるという。やっと捉えたデンダとは、ゼンマイ（薇）のことで、下伊那郡や愛知県北設楽郡で使われていた方言であるという（方言大辞典）。このデンダについては、全く聞いたこともなかったし、『長野県方言辞典』にもない。小字調べも急がなければならないと、改め実感した。

以上のことから、デンダサワとは「ゼンマイが自生している谷」ということになる。

なお、デンダとは何か、考えていたとき、浮かんできた解釈を参考のために挙げておきたい。

デンダはデ（出）・ミ（水）・ダ（処）が撥音便化した語ではないか。デミズ（出水）だと、水窪の方言にもなっていて、「湧き出る水」をいう。これが正しいとすれば、デンダ←デミダ←デミズダで、「自然湧水の多い谷」ではないか、と考えたものだった。語の転訛に無理はあるが、結果はそれほど的外れではない、とひそかに思っていた。

デンダザワミチシタは「道路下でデンダザワ小字に近い所」か。かっては、この小字もデダザワ小字に含まれていたことも考えられる。

全国地図にはデンダザワ地名は載っていないが、デンダ地名は１ヵ所にだけあり、「善田」の字が宛てられている。ゼ⇔デの転化があることを示しているのが面白い。

【山口・山口山】

ヤマグチ・ヤマグチヤマ。

ヤマグチ小字は４ヵ所、ヤマグチヤマ小字は１ヵ所がある。いずれも柿野沢の山口熊野神社の全面である南側にある。

ヤマグチとは、「山の上り口」（広辞苑）をいう。ヤマグチ小字の分布をみていると、そのヤマには、熊野神社と山ノ神が鎮座するヤマがあるように思えるがどうであろうか。

熊野神社に近いところにあるヤマグチは「熊野神社の参道の入口付近」であり、もっと南の方に離れているヤマグチは「山ノ神が鎮座する山の入口」と考えたい。山ノ神のおわす山がヤマグチヤマであろうと想定している。

全国地図には、中・大字として、ヤマグチ地名は２ヵ所にあるが、ヤマグチヤマ地名は載っていない。

【山口道上・山口道上ノ切・山口上ノ切・山口下ノ切】

ヤマグチミチウエ・ヤマグチミチウエノキリ・ヤマグチウエノキリ・ヤマグチシタノキリ。

これらの小字は、南側のヤマグチ小字の周辺にある。

キリはキリ（切）で、「切り開いた地」で開墾地をいう（語源辞典）。ウエノキリは、文字通り、「高い方にある開墾地」をいい、シタノキリは「低い方にある開墾地」。ミチウエは、当然ながら、「道路の上側の地」をいう。

【大岩平】
オオイワダイラ。
この小字はヤマグチ小字群の南側にあり、大きな面積になっている。二筋の側稜とその間の谷を含む。平坦地に近い緩傾斜地もあり、急傾斜地もある。また、知久沢川の二本の支流も流れている。
イワは「大きな岩」ではなくて、「大きさが石と土との間のもの。砂利の類」（国語大辞典）であろう。とすれば、オオイワダイラとは、「あちこちに平坦地がある、小石混じりの広い丘陵地」をいうか。
全国地図には、中・大字として、オオイワダイラ地名が、２ヶ所に記載されている。

【中瀬田】
ナカセダ。
この小字は、オオイワダイラ小字の南側の山中に１ヶ所と玉川右岸にもう１ヶ所ある。
ナカセダとは何を意味するのか。これもまた分かりにくい地名であるが、あえて二説を挙げる。
①ナカ（中）は「山と山との間の谷」か。セダはセ（狭）・ダ（処）で「狭い所」をいう。従って、ナカセダとは「側稜の間の狭くなった谷、あるいは水田」を意味するのであろうか。
②２ヶ所のナカセダが繋がっていたとすれば、ナカはナガ（長）が清音化した語で、「長く延びた地形」をいう（語源辞典）。セダは先述のように「狭いところ」。以上を合わせると、ナカセダとは「長く延びた狭い谷」をいうか。
ナカセダ地名は全国地図に１ヶ所だけ記載されている。宛てられている文字は柿野沢と同じ「中瀬田」である。

【井戸ノ下・井戸ノ上】
イドノシタ・イドノウエ。
これらの小字はスゲノモリ小字に北と東の二面で接している。谷の中にあり、現在も半分ぐらいが水田になっている。
イドノシタは「水流の下流側」であり、イドノウエは「水流の上流側」をいう。

【スゲノ森・スゲノモリ】
スゲノモリ。
これらの小字は３ヶ所にあるが、ひとかたまりになっている。玉川右岸の急傾斜地を含み、県道米川・駄科停車場線の東方になる。
スゲノモリとは何か。二説を挙げる。
①スゲノモリとは字面の通り「樹林の下草にスゲ属の植物が生えている神聖な森」をいう。カヤツリグサ科スゲ属で、ヤブスゲやカンスゲなど林下や樹陰の湿地に自生していることが多い。カンスゲは夏、葉を刈って菅笠を作る。
②スゲは動詞スグ（挿）の連用形の名詞化した語で「差し込まれたような地形」をいう。スゲノモリとは「尾根が差し込まれたように突き出ている所にある神聖な森」か。
モリは「神社などのある神域で、神霊の寄りつく樹木が高く群がり立った所」（国語大辞典）で、この柿野沢のスゲノモリも、宝暦９年（1759）の記録によれば「すけの森」に「日月神」が１社ある（村誌）。日月神が何であるかはっきりしないが、庚申像ではないかと思われる。
全国地図にスゲノモリ地名の記載は無い。

【笹ヶ洞】

ササガホラ。

この小字は、県道米川駄科車線の東方にあって、オオイワダイラ小字に三方を囲まれていて、知久沢川支流の左岸の傾斜地にある。

ササガホラとは何か。二通り解釈を示したい。

①ササ（笹）とはイネ科の常緑多年生植物であるが、「広義には、タケの類で形が小さく、皮の落ちないものの便宜的な総称」（広辞苑）であるという。ササガホラとは、「小形のタケが自生している小さな谷」となる。しかし、このことについて、語源辞典は、「タケ属のササ起源の地名は皆無とはいわないが、一般に信じられているよりははるかに少ないはず」としていることが気になる。

②ササは「水の勢いよく流れるさま」（語源辞典）をいう。ササガホラとは、「水が勢いよく流れている沢のある小さな谷」か。この流水は知久沢川の支流になる。

【堤上】

ツツミウエ。

柿野沢の知久沢川の洞の低地から東側の山地に入る西向きの傾斜地にある。

ツツミウェとは、「堤の高方にある所」をいう。ツツミとは、「水を溜めた池」（広辞苑）である。しかし、現在は、湿地帯ではあるが、そうした堤はありそうにもない。かっては水を湛える堤があったということであろうか。

全国地図には、ツツミウエ地名が、1カ所にだけある。

【丸山】

マルヤマ。

この小字は知久沢川の氾濫にある

マルヤマとは、「形の丸く見る山」（国語大辞典）である。この小字内には、ちょっとした高みはあるが、これをマルヤマとはいいにくいのではないだろうか。とすれば、西方にあるほぼ円錐形の山をマルヤマとしていた可能性は高い。

マルヤマは伊那谷南部にもい。全国地図には、中・大字であるが、352カ所にものぼる。やはりマルヤマは神聖な山で、あるいは山ノ神のいる場所であったのかもしれない。

【犬ノ食・犬ノ喰】

イヌノクイ。

この小字は、知久沢川の最上流部にある谷に沿って、2カ所にある。

イヌノクイ小字群は、柿野沢の上久堅との村境近くにあって、国道256号線を挟んでいる。そこでは、イヌノクイとは、「流水がそれぞれ別々の川に流れ込む湿地帯」とした。

ここ、知久沢川流域のイヌノクイについては、少し変えて次のように考えたい。

イヌは、村境のイヌと同様で、イ（接頭語）・ヌ（沼）で「湿地」のこと。クイはクヒ（食）で、「食い込んだような地形」（語源辞典）

をいう。以上から、イヌノクイと・は、「食い込んだように突き出ている湿地」としておきたい。

イヌノクイ地名が連鎖反応で名づけられたと思われるが、それにしても、ここに多いのは何故だろうか。

【山口熊ノ社朱引外】

ヤマグチクマノシャシュビキガイ。

この小字は、熊野神社の境内の北側、つまり裏側にある。

シュビキ（朱引）とは、「朱で線をひくこと」で、「物事のさかいめ」をいう（国語大辞典）。すなわち、ここでは、神社と神社の外との境界を意味する。

ヤマグチクマノシャシュビキガイとは、「山口の熊野神社の境内の外側の土地」を意味するものと思われる。

この熊野神社は、延宝８年（1700）に建て替えられている、「熊野三社権現宮」であろう。村誌の宝暦９年（1759）柿野沢神社の中にある。

【榎田】

エノキダ。

この小字は、小林の県道米川・駄科停車場線の両側に広がっており、南原との境界にある。

エノキダとは何か。三通りの解釈を示したい。

①エノキダとは「榎が自生または植えられていた所」をいう。エノキはニレ科の落葉高木で、神聖な樹木として一里塚や道祖神の傍らに植えられることが多かったという（語源辞典）。この南原との境に道祖神があったのか、それとも無かったのかは明らかではないが、一つの解釈として挙げておきたい。

②エノキダは、エ（家）ノ（格助詞）・キダ（段）で、「有力者の居住地がある段状の土地」か。

③エは美称、ノキ←ヌキ（抜）と転じたもので、エノキダとは、「崩れた所がある土地」（語源辞典）となる。なお、ダは接尾語のダ（場所）である。

全国地図には、エノキダ地名は、中・大字として１３ヵ所に記載されている。

【吉原】

ヨシハラ。

この小字は、小林の県道米川駄科停車場線の両側にあり、山口沢川に添っている。エノキダ小字の下流側になる。

ヨシハラ小字は、いくつか既に登場してきている。

ヨシハラとは何か。二説を挙げておきたい。

①ヨシハラとは、「芦の生えているような耕作してない湿気のある土地」。柿野沢のヨシハラについても、ほぼ同じ由来としてある。

②ヨシは動詞ヨス（寄）の連用形が名詞化した語で、「山寄りの地」をいう。ヨシハラとは、「山寄にある耕作してない平地のある所」か。

全国地図には、ヨシハラ地名は３１ヵ所に記載されている。

【崩岩】

クズレイワ。『下伊那地名調査』にはホウガンとあり、『町村地名大鑑』にはクズレイワとある。音読みの地名は少ないので、後者を採ることにした。

この小字は、山口沢川右岸で、県道米川・駄科停車場線の両側に広がる。ヨシハラ小字の北側つまり下流側になる。

クズレは、動詞クズル（崩）の連用形が名詞化した語で「崩壊地」をいう。

クズレイワとは、「崖のようになっ

ていた岩盤が崩れた所」か。

【鳥前】

トリマエ。

この小字は、吉原丘陵尾根と伝田沢川に挟まれた北向きの急傾斜地である。

トリマエとは取り分ではない。よく分からないが二説を挙げる。

トリは動詞トル（取）の連用形が名詞化したもので、「切り取られたような地形」から、「崩壊地」を意味する。

①マエは「前方」である。トリマエは「山口熊野神社の前方にある崩壊地」となるが、お宮は南を向いているので「前方」とはいえない。ただ地名発生時にはお宮が北を向いていたことも考えられるし、なんでも近くにあるものを「前の方にある」と表現した可能性もないわけではない。

②マエは「過去に～だった所」（語源辞典）の意とすれば、トリマエとは、「過去に崩壊地であった所」となる。

なお、トリマエ地名は全国地図には無い。

【神田】

カミダ。

この小字は、県道米川・駄科停車場線に添っており、山口沢川と伝田沢川が合流する付近にある広い小字である。

カミダ←カミタと濁音化したもので、カミダとは、「神社に所属している田。この田からの収穫で神事や造営の費用、神職の給料などをまかなう」（国語大辞典）ことを意味する。

カミダはどこの神社に関わっているのか。北東に２００ｍほどの所にある神明社がもっとも有力に思われる。

カミダ地名は全国地図に、中・大字として１６ヵ所に記載されている。

【梶田・梶田山】

カジタ・カジタヤマ。

これらの小字は、カミダ小字の北側にある。カジタ小字を県道米川・駄科停車場線が通っている。

カジタとは何か。仮説を二つ。

①カジタはカジ（鍛冶）・タ（処）で、「鍛冶職人が住んでいた所」をいう。カジタヤマは、吉原丘陵の北西端の出っ張りになっており、カジタ小字からは円錐形の山に見える。現在、その痕跡はないが、鍛冶に関わる神を祀っていたのかもしれない。因みに江戸期の下久堅の神社や祭神に金山様は見えない（村誌）。

②カジは動詞カジル（掻。囓）の語幹で「引っ掻かれたような地形」をいう（語源辞典）。カジタとは、「崩壊地のある所」を意味する。カジタヤマは、やはり神聖な山であって、そこには春になれば田んぼまで降りてくる山ノ神が鎮座する所だったかもしれない。

全国地図には、中・大字として、カジタ地名が４ヵ所に記載があるが、カジタヤマは載っていない。

【油免ん】

アブラメン。『下伊那地名調査』にはユメンとあり、『町村地名大鑑』にはアブラメンとなっているが、一応、音読みにした。

この小字は、カジタ小字とカジタヤマ小字の間にある。

寺社などの灯明用の油を支出するために設けられた免田と思われる。租税分を灯明油の代に当てたのであろう。

その寺社というのは、最も近いところにある神明神社と思われる。

全国地図には、アブラメン地名が１ヵ所、ユメン地名が２ヵ所にある。

【八垣外向平】
　ハチガイトムキダイラ。『町村地名大鑑』はハチガイトムカイダイラとなっていて、語呂は、この方がいい。
　この小字は、ハチガイト小字から見ると、谷を挟んだ対岸にある。吉原丘陵の尾根から北東側の斜面になる。
　「八垣外向平」とは、「ハチガイト小字の向こう側にある、平坦な頂上のある土地」ということになる。
【沢向平】
　サワムキダイラ。
　この小字は、吉原丘陵の北端に近い北向きの傾斜地にある。伝田沢川左岸である。
　伝田沢川右岸には、サワ小字がある。サワムキダイラとは、「サワ小字の伝田沢川を越えた向こう側にある、頂上に平坦部のある土地」か。
　もちろん、全国地図には、サワムキダイラ地名は無い。
【サワ・沢・沢上ノ切】
　サワ・サワウエノキリ。
　これらの小字は、吉原丘陵の北東側の麓にある。伝田沢川の右岸になる。
　サワは、「山間の比較的小さな渓谷」（広辞苑）である。ここは伝田沢川が掘った渓谷である。
　サワウエノキリについては二説を挙げる。
①サワウエノキリとは、「サワ小字の上流側にある、滑らかな緩傾斜地」を意味するものと思われる。キリはキル（切）の連用形が名詞化した語で、辞書類にはないが、現地に従って、「切り取られたように滑らかな緩傾斜地」としたい。
②キリはキリ（切）の連用形で、「開墾地」をいう（語源辞典）。サワウエノキリとは、「サワ小字の上流側にある開墾地」を意味する。
【桧洞・桧木洞道下・桧木洞道上】
　ヒノキボラ・ヒノキボラミチシタ・ヒノキボラミチウエ。
　これらの小字は、丘陵の中腹を通る道路（小林三島神社の前を通り柿野沢区民センター近くに抜ける）と伝田沢川との間の傾斜地にある。
　ヒノキボラ小字は２ヵ所、他は１ヵ所ずつ。
　ヒノキボラとは、「ヒノキが自生しているか、植林された傾斜地」とする。
　ヒノキボラミチシタとは、「ヒノキボラ付近の道路の下側にある土地」であり、ヒノキボラミチウエとは、「ヒノキボラ付近の道路の上側にある土地」となる。道路とは、上記の三島神社の前を通る道であろう。
　ヒノキは榑木として天竜川を流した主要樹種である。
　全国地図には、ヒノキボラ地名は載っていない。意外である。
【稲葉上ノ切・稲葉尻下ノ切】
　イナバウエノキリ・イナバジリシタノキリ。
　これらの小字は、吉原丘陵の北東側麓にある。伝田沢支流の右岸になる。
　イナバは伊那谷南部に多い地名で、「稲干場」をいう。イナバジリは「稲干場の末端部分」で、これ以上、下になると稲の乾きが悪くなる場所であろう。このイナバジリ地名も伊那谷には多い。稲干場として利用できる日当たりの具合が大切だったからだろうか。
　キリは先に述べたように、「開墾地」か「滑らかな緩傾斜地」かであるが、後者の肩を持ちたい。
　全国地図にはイナバジリは無い。

【榎洞道下】
エノキボラミチシタ。
ヒノキボラミチシタ小字と並んでいる、小さな小字である。
エノキボラとは、「エノキが自生している傾斜地」であるが、ここで、エノキを強調する必要があるのかどうか。
もしかして、エ（家）・ノキ（抜）で、「家が呑み込まれた崩壊地」であったのか。と、馬鹿なことまで考えてしまう。
エノキボラミチシタとは、「エノキが自生している傾斜地にある道の下の方」としておきたい。
全国地図には、エノキボラ地名もエノキホラ地名も載っていない。
【清水・清水上ノ切・清水下ノ切】
シミズ・シミズウエノキリ・シミズシタノキリ。
これらの小字は、伝田沢川とその支流に挟まれた緩傾斜地の平坦地にある。
言うまでもなく、シミズは「自然湧水の豊かな所」をいう。
キリは、先にも述べた通りで、①キリ（切）で「開墾地」をいうか、②切り取ったように、「滑らかな緩傾斜地」を意味する。どちらが正しいのか、判断がつかないでいる。
全国地図には、シミズ地名は２３６ヵ所と非常に多いが、シミズウエノキリ地名は１つも無い。
【中釣根】
ナカツルネ。
この小字は、柿野沢区民センターの前の道路に添って、１５０ｍほど南西側に移動した所にある。伝田沢川右岸で沢の洞に突き出している尾根にある。
ナカ（中）は、「谷と谷との間」をいう。ツルネは既に柿野沢のツルネ小字で述べたように「蔓のように延びた尾根の小高くなっている所」をいう。
以上から、ナカツルネとは、「谷と谷の間の蔓のように延びた尾根の小高くなっている所」を意味する。
意外であるが、全国地図には、ナカツルネ地名は１件の記載もない。
【小作田】
コサクダ。
この小字は、県道米川・駄科停車場線の東方の細い道路にある。伝田沢川が開析した谷に中である。
伊那谷南部では、各地にある地名である。
コサクダとは何か。語源辞典に添って、二通りの解釈を示したい。
①コサク（古作）は、「古くから耕作している所」で、ダ（処）は場所を示す接尾語。即ち、コサクダとは、「古くからの耕作地」か。長野原のコサクダの由来はこれであった。
②コ（小）は接頭語で「小さい」の意。サクは「谷」のこと。コサクダとは、「小さな谷」を意味する。
全国地図には、中・大字として、コサクダ地名が、２ヵ所に載っている。
【井戸久保】
イドクボ。
この小字は、神明神社の南側、コサクダ小字の北側にある。細いが長い谷が、この小字を貫いている。
イドは井（井）・ド（処）で流水のこと、クボ（窪）で窪地をいう。イドクボとは、「流水のある小さな谷」ということになるか。
全国区地図には、中・大字として、１ヵ所にだけ、記載がある。

【美ノ蔵】
ミノゾウ。
この小字は、県道米川・駄科停車場線に接し、神明神社の南西側にある。
ミノゾウとは何を意味しているのか。ミノゾウは珍しい小字名で、全国地図にも、載ってはいない。
ミノゾウとは、「美濃高須藩が集めた年貢米を貯えていた蔵のあった所」ではないだろうか。下久堅が天領から高須藩に変わったのは天和元年(1681)。それ以降に発生した地名であろう。
【早稲田】
ワセダ。
この小字は、ミノゾウ小字の中にある。
ワセダとは、「本田より二、三ヶ月前に家人だけで植える自家用の食糧米にする田」（語源辞典）である。早稲種とは限らないようだ。
全国地図には、中・大字として、9ヵ所に記載がある。
【トドメキ】
この小字は、知久沢川右岸にあって、ミノゾウ小字の下流側になる。
この伊那谷南部にも多いので、どこにでもある地名と思っていたが、全国地図には１ヵ所にしかない。しかしトドロキ地名は」４５ヵ所、トドロ地名は１６ヵ所と多い。この種の小字名は伊那谷南部には多い。天竜川に注ぐ小河川も、大雨などで水量が増した時には、川音を轟かせたものと思われる。
トドメキは動詞トドメク（轟）の連用形が名詞化した語。トドメキとは、「川音が轟く所」を意味する。この川とは知久沢川のことで、山口沢川と伝田沢川が合流して、知久沢川になっているようだ。
【長平】
ナガヒラ。
この小字は、知久沢川右岸にあって、県道米川・駄科停車場線の両側に広がる長い小字である。
ナガ（長）は「長く延びた地形」（語源辞典）をいう。側稜の尾根も、知久沢川の谷も長く延びている。ヒラ（平）は傾斜地のこと。
従って、ナガヒラとは、文字通り、「尾根も谷も長く延びている傾斜地」ということになる。
全国地図には、中・大字として、ナガヒラ地名は、１ヵ所だけある。
【古道】
フルミチ。
この小字は、ナガヒラ、ミノゾウ、ハラの小字に囲まれている。
フルミチとは、字面の通りで、「以前に使用されていた道のあった所」を意味する。すでに利用されていないので、道路は消えている物と思われる。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、９件の記載がある。
【原】
ハラ。
神明神社のある平坦地に近い緩傾斜地にある。
ハラ（原）は、「平で広い土地。特に、耕作しない平地。野原。原野」（広辞苑）である。
この小林のハラ（原）は、「広い平坦地で、神聖な場所のある所」であろう。神明神社があるために神聖な土地で手をふれることのない場所も広く、そのために耕作しない所もあったと思われる。
全国地図には、中・大字として、４５０ヵ所も登録されている。

【池ノ洞・池ノホラロ】
イケノホラ・イケノホラグチ。
これらの小字は、小林のジョウヤマ小字の尾根とヒャクメ小字の尾根の間にある洞の中にある、細長い小字である。西端を知久沢川の支流が、北に向かって流れている。
イケノホラグチ小字は、イケノホラ小字の北西隅にある。
イケノホラとは、文字通り、「溜池の多い小さな谷」をいう。
イケノホラグチとは、「イケノホラへの出入口」を意味する。この小さな谷は、行き止まりになっているので、このイケノホラグチが入口になっている。
全国地図には、意外なことに、イケノホラ地名は記載が無い。
【百目】
ヒャクメ。
この小字は、ナガヒラの谷とイケノホラの谷の間にある、側稜の細長い尾根にある。
柿野沢にもヒャクメ小字があって、龍江村誌に従って、「１００坪の土地」としておいたが、実際の小字の面積は、１００坪の１０倍に近かった。
この小林のヒャクメ小字も、その面積は、１００坪の１０倍以上になる。
このことをどう解釈したらいいのか。
ここのヒャクメ小字も側稜の尾根付近だから、耕作されたとすれば、焼畑しか考えられない。この焼畑に税をかけるに当たって、平地の１００坪分に相当すると判断されたのではないだろうか。現在のところ、それ以外の考えは出てこない。
ヒャクメとは、「平地の１００坪分の貢租がかけられた焼畑」と思われるが、どうであろうか。
【石ノ塔・石塔】
イシノトウ。
これらの小字は、県道米川・駄科停車場線にほぼ添っており、百目の側稜と中平側稜の間の谷にある。
イシノトウとは何をいうのだろうか。三説を挙げる。
①文字通りに解釈すれば、イシノトウとは、「石塔などがある場所」となるが、現在はその形跡はない。小字名の発生当時に、なんらかの石塔の類が、この小字に中にあったのかもしれない。
②トウは細い尾根を塔に見立てたか。イシノトウとは、「小石まじりの塔のような尾根の頂上部のある所」か。
③トウはトウ（塘）で「川や池の岸の土手」（国語大辞典）をいう。イシノトウとは、「石垣が土手になっている堤」か。
全国地図には、イシノトウ地名は、中・大字として、３ヵ所に挙げられている。
【下垣外】
シモガイト。
この小字は、知久沢川右岸にあり、県道米川・駄科停車場線の沿う低地にある。
シモガイトとは何か。二通りの解釈を示したい。
①文字通りに解釈すれば、「低地にある居住地跡」ということになる。
②シモ（下）はシモ（霜）とみることも可能である。この小字は、知久沢川氾濫原の最も低いところにあり、霜害は十分に考えられる。
全国地図には、中・大字として、７ヵ所にシモガイト地名が載っている。

【下平・下平北ノ道・下平落】

シモダイラ・シモダイラキタノミチ・シモダイラオチ。

これらの下平小字群は、小林三島神社のある中平段丘の下の段丘面にまとまっている。

シモダイラとは、「(中平に対する)下の段丘面となる山間の平地」を意味する。シモダイラ（霜平）は、ナカダイラ（中平）小字が上段にあるので、中↔下の関係が明瞭であるので、可能性は薄い。

シモダイラキタノミチについては、二通りの解釈ができる。①「下平段丘の北端に道のあった所」と解するのが、素直な解釈であるが、現在、その道が無いのが気になる。②ミチは動詞ミツ（満）の連用形で、「ぎりぎりのところまで迫る」（語源辞典）の意。シモダイラキタミチとは、「下平段丘の北端のぎりぎりの所」を意味するか。

シモダイラオチについても、二通りの解釈を示したい。①オチ(落)は「崖」（語源辞典）を表す。シモダイラオチとは、「下平段丘の崖の近くの地」か。すぐ隣にはナギシタ小字がある。②オチ（洿池）で、「くぼんだ地に水がたまって、池のようになったもの」（広辞苑）をいう。シモダイラオチとは、「下平段丘で、凹んで水が溜まり易い所」か。現在は水田になっているが、池は無い。小字名発生当時には池が存在していた可能性は高い。

なお、全国地図には、中・大字として、シモダイラ地名は４２ヵ所もある。

【家下】

イエシタ。

この小字は、下平段丘の南西側斜面にある。

イエシタとは、「(下平段丘にあった)有力者の居住地の下側の傾斜地」をいうか。

全国地図には、イエシタ地名は１ヵ所ある。

【半場・半場平】

ハンバ・ハンバダイラ。

これらの小字は、下平段丘の南西端にある。

ハンバとは、「開墾し残した丘」（国語大辞典）か。なぜ、開墾を半端に終わらせたのか。恐らくは、残りをイナバとして利用することを考えていたのではないだろうか。

ハンバダイラは、「開墾し残した傾斜地で一部平坦地のある所」か。この傾斜地は南西向きになっており、イナバにとっては条件のよい土地ではないかと思われる。

全国地図には、ハンバダイラ地名は載っていないが、ハンバ地名の記載は１０ヵ所にのぼる。

【前田】

マエダ。

この小字は、下平丘陵の西端に近い所にある。

マエダとは、「前方にある田んぼ」であるが、何の前かというと、それはマエダ小字の北側にあるカイト小字かシャグウジ小字であろう。カイトには有力者が住んでいたと思われるので、その居住地の前であろうし、シャグウジ小字に関係するのであれば、そのお宮の前ということになる。

シャクジ（民俗大辞典）系の社祠は長野・愛知・静岡の三県が最も多く、古代諏訪信仰にかかわるという見方もある。現在は年々消滅を続けている信仰とか。社宮神、社護神、尺宮司の字を当てることが多いという。

【社宮地・社宮地洞】
シャグジ・シャグジボラ。『下伊那地名調査』では、シャグウジとなっているが、『町村地名大鑑』ではシャグジとなっている。後者の呼び方が多いので、それに従った。
これらの小字は、下平段丘の北端とその下の段丘に下る斜面上にある。
シャグジは、「シグクジを祀る地」を意味する。シャグジは石祠が多いといわれているが、この下平段丘のシャグジはどうであろうか。
シャグジボラは、「シャグジを祀る場にある小さな谷」である。
シャグジは石神（いしがみ）とは異なるという。風邪、百日咳を病むものがシャグジにお参りする例が多いらしい。シャグジには、多様な音転呼称があり、伝承も多岐に及ぶが、解明はほとんどされていないようだ。
【垣外】
カイト。
この小字は、下平丘陵の北端にある。
カイトは「有力者の居住地跡」であろう。下平丘陵の有力者か。
【ナギノシタ】
この小字は、上の中平段丘との間にある傾斜地の麓にある。
ナギノシタは字面の通りで、「崩壊地の麓」を意味する。中平段丘の北西端が崩れてナギノシタ小字を埋め、さらに、その先のシモダイラオチ（下平落）まで土砂が流れたのかもしれない。
なお、全国地図には、ナギノシタ地名の記載は無い。
【越前】
コシマエ。
この小字は、下平丘陵北端の下る傾斜地にある。
コシマエとは何か。
コシはコシ（腰）で、「山の麓に近い所。すそ」（国語大辞典）。マエは「その前」だから、コシマエとは、下平段丘の北端から見て、「段丘の麓の前面にある傾斜地」をいうか。
全国地図には、コシマエ地名は、中・大字として、３件が挙げられている。
【宮ノ下・宮下】
ミヤノシタ。
これらの小字は、小林三島社の北側傾斜地に３ヵ所ある。
ミヤノシタとは、文字通り、「お宮の下の方」をいう。
どこにでもある地名で、伊那谷南部にも多い。全国地図でも、ミヤノシタ地名は、６５ヵ所が、中・大字として挙げられている。
【川辺】
カワベ。
この小字は、ミヤノシタ小字の下側にあって、久保田沢川の左岸になる。
カワベとは、「川の近辺」のこと（国語大辞典）。
当然すぎるような地名で、全国地図にも３３ヵ所が、中・大字として記載されている。
【五輪平】
ゴリンダイラ。
この小字は、中平段丘の北西端から下平段丘へ降りる斜面にある。
ゴリンダイラとは、「五輪塔があった平地」と思われる。現在でも中平段丘の先端には墓地がある。
五輪塔は、平安中期から、供養塔・墓塔としてつくられたという。
全国地図にも、ゴリンダイラは、中・大字として、４ヵ所に記載されている。

【中平・中平ヒラ】
ナカダイラ・ナカダイラヒラ。
ナカダイラ小字は、中平段丘の中心部を占め、ナカダイラヒラ小字は中平段丘の北西端の下る傾斜地にある。
ナカダイラとは、「側稜の中腹部分にある広い平坦地」をいう。ナカダイラ⇔シモダイラで、ナカとシモを対置させているのであろう。
ナカダイラヒラとは、「中平の末端の傾斜地」を意味するか。ヒラには「傾斜地の意味もある（語源辞典）。
全国地図には、ナカダイラ地名は４４ヵ所も記載があるが、ナカダイラヒラ地名は１ヵ所も無い。
【ウルシ洞】
ウルシボラ。
この小字は２ヵ所にあるが、いずれも中平段丘の南西端の傾斜地にある。南西～南向きの斜面となっている。
ウルシボラとは、「ウルシが自生していたか栽培していた小さな谷」をいう。
江戸時代には家具調度にも漆塗りが行われ、燈火用の蝋の需要も増大していたので、四木三草の一つとして、幕府も諸藩も奨励していた。
だから、ウルシが栽培されていたことは十分に考えられる。
しかし、全国区地図には、ウルシボラは載っていない。
【井戸尻】
イドジリ。
イドジリ小字は２ヵ所にある。一つは中平段丘の南西端の傾斜地に、もう一つはジョウヤマ小字の南側の傾斜地にある。いずれも小さな洞になっていて、湧水の滲みだしがありそうな場所である。
イドジリとは、「泉のしみ出る口」のことか。シリはシリ（後）で、「末端」とか「出口」の意味がある（語源辞典）。
【堀畑】
ホリバタ。
この小字は、中平段丘の西端の緩斜面にある。
ホリバタとは何か。二説を挙げる。
①「堀畑」は「堀田」すなわち「堀上田」と対になっていた畠である可能性もある。堀田にするために畦や畝を盛り上げた、その上が畠地になっていたのではないだろうか。思いつきも混じった仮説である。
②ホリ←ハリ（墾）で、「開墾地」のこと（語源辞典）。ホリバタとは、「開墾された畑地」か。あるいは、「開墾された段丘端」かであろう。
全国地図には、ホリバタ地名は、中・大字として、３ヵ所に挙げられている。
【茶畑】
チャバタ。
この小字は、中平段丘の南西端を下る傾斜地にあり、南西に向いている。
チャバタとは、「茶を栽培していた畑」のこと。
江戸中期までは、一般に出回る茶のほとんどは番茶だった。茶葉を蒸してそのまま天日干しにしたという。それ以前は、各地各様の製法で自家用に作られていたらしい。
これらの番茶を製造する茶葉を栽培したのが、この地方の茶畑ではなかったかと思われる。こうした茶畑地名は伊那谷南部の各地にある。
国土地理院の全国地図にも、チャバタケ地名は、中・大字として、９ヵ所に記載されている。

【樽ノ入】
タルノイリ。
この小字は、イケノホラ小字の南側にあり、イケノホラ小字を流れる知久沢川支流の最上流部になる。
タルはタルミ（垂水）の略で、滝のことをいう。伊那谷南部の方言とされている（国語大辞典）。
タルノイリとは、「滝となっている所よりさらに奥の上流部」を意味している。知久沢川支流は、このタルノイリから始まっている。
全国地図には、タルノイリ地名は記載が無い。
【蟹堀場】
カニホリバ。
この小字は、小林の城山丘陵の頂上部から南側の急傾斜地に懸かる小字である。ジョウノウチ小字を挟んで、東西の両側に一つずつあるが、双方の地形が異なっているので、かっては一つに繋がっていたと思われる。
カニホリバとは何を意味しているのか。二説を挙げたい。
①三穂にもカニホリバ（可に堀場）小字があって、そこは、「等高線が曲がりくねった急傾斜地で崩落跡のある所」とした。カニ←カネ（矩。曲）の転化したものと考えたからである（語源辞典）。この三穂での解釈を、小林のカニホリバにも適用したい。
②もう一つの解釈はやや戯れに近いが、次のように考えるのは酷すぎるだろうか。このカニホリバ小字の周辺の小字も巻き込むと、その谷に侵食された地形は、蟹の鋏に見立てることもできる。カニホリバとは、「蟹の鋏に似た地形の谷のある所」はどうであろうか。
全国地図には、カニホリバ小字は記載が無い。
【家浦】
イエウラ。
小林の城山丘陵の尾根部分にある。ヤシキ小字やジョノウチ小字のある地域で、イエウラ小字はヤシキ小字の北側にある。ヤシキの玄関が南側にあったということを意味しているように思える。
イエウラとは、「ヤシキの裏側にある土地」か。
全国地図には、イエウラ地名は載っていない。
【城山】
ジョウヤマ。
この小字は、当然のことながら、城山丘陵にある。城山丘陵の末端にあり、この小字の南の尾根続きには、ジョウノウチ（城ノ内）小字やジョウ（城）小字などが固まっており、ここに小林城の中心があったと思われる。
問題は、小林城の中心部とジョウヤマ小字の関係である。ジョウヤマ小字の部分が、戦国時代に、村人たちの緊急時の避難場所であったのかどうか。あるいは緊急避難場所を兼ねた小林城前衛の城であったのかどうか。
小林城は、神峰城主知久四郎左衛門奥阿の二男入道行阿は小林に城を築いて姓も小林と改め、子息小林山城守、その子河内守円心、その子盛当、その子貫仲がここに住んでいたという（村誌）。
ジョウヤマとは、とりあえず、「村人たちの緊急時の避難場所であった所」としておきたい。
全国地図には、中・大字として、ジョウヤマ地名は９７ヵ所にも記載されている。

【妻ノ神・妻之神】
サイノカミ。
この小字は、小林の柿野沢との境界を流れる久保田沢川（沢俣田川）とジョウヤマ小字との間にある。
「道祖神は、さえの神というように、入りこもうとする邪悪をしりぞける神であり、クナド（フナド）の神というようにエロティックな行為を示している神でもある。もっとも人間にはずかしい行為を示すことは、それ自身、悪い者を追い払う効果をもたらすものであった」（民俗地名語彙事典）のが、サイノカミである。
境界に石像が安置されることが多いが、小林のサイノカミは痕跡があるのかどうか。
全国区地図には、サイノカミ地名は、中・大字として、２９ヵ所に挙げられている。
【城・城ノ内】
ジョウ・ジョウノウチ。
これらの小字は、城山丘陵にあり、ジョウヤマ小字の尾根に連なる小高い所に位置する、小さな小字である。
ジョウもジョウノウチも、「小林城の城塞があった所」を意味する。
国土地理院の全国地図には、ジョウ地名は４６ヵ所が、ジョウノウチ地名は１９ヵ所が、中・大字として記載されている。
【前田・前畑】
マエダ・マエバタ。
これらの小字は、城山丘陵のジョウ小字群のなかにある。マエダ小字は１ヵ所、マエバタ小字は２ヵ所にあるが、「マエ」の基準は、ジョウ小字と思われる。
マエダは、「小林城の前の南側になっている所」で、マエバタは「小林城跡の前方にある畑」と思われる。小林城の城門は南にあったと想定した上での判断であるが。
全国地図には、マエダ地名は１３９ヵ所もあるのに、マエバタ地名は２ヵ所にしかない、というのが不思議である。
【屋敷・家ノ上・家前】
ヤシキ・イエノウエ・イエマエ。
これらの小字も、城山丘陵のジョウ小字群の中にある。
ヤシキは、「小林城に関わる有力者の住居」であろう。イエノウエは「ヤシキ小字の隣にある、少し高い所」か。イエマエは、「ヤシキ小字の前側にある土地」となる。南側が前側と思われる。
【向平】
ムカダイラ。
この小字は、小林の成田不動尊を祀る丘にある。
ムカダイラとは、「向かいにある山頂が平らな小丘」をいう。何の向かいかというと、それは小林城のある中心部分であろう。
全国地図にはムカダイラ地名は載ってないが、ムカイダイラ地名は７ヵ所に記載がある。
【スギヤマ】
この小字は、ムカダイラ小字の南東側裏山にある。北北西向きの斜面である。
スギヤマは「杉が植えられていた傾斜地」であろう。現在は、果樹園が多いが、高い所は針葉樹林になっている。
スギは家・桶・樽・曲げ物など種々の用に供し、樹皮は屋根を葺くときに使い、葉は線香の材料であった。
全国地図には６１件の記載がある。

【堤洞】
ツツミボラ。
この小字は、久保田沢川左岸にあり、久保田沢川から側稜の尾根までを含む地域になっている。
ツツミボラは、文字通り、「水を貯える池のあった小さい谷」であろうが、現在、池は見当たらない。しかし、尾根のわずかな平地があって、より高い尾根から湧水が供給されていたかもしれない。
ツツミボラ地名は、全国地図には記載が無い。
【後・後平・後平上】
ウシロ・ウシロヒラ・ウシロヒラウエ。
これらの小字は、城山丘陵の東の方角にある。
ウシロとは、「正面に向いている場合、ほぼ視野外の方角に当たるところ」（国語大辞典）をいう。
これらの小字のウシロとは、何のウシロなのか。それは、城山丘陵のジョウ小字群であろう。ジョウ小字群の正面は南側を向いていると思われるので、この場合の視野外というのは東～東北東の向となるが、どうであろうか。
ウシロとは、「ジョウ小字群から見て、東～東北東の方角に当たる場所」であり、ウシロヒラとは、「ジョウ小字群の東側にあり、ジョウ小字群から見て、陰になる傾斜地」となり、ウシロヒラウエとは、「ウシロヒラ小字の上流側になる所」であろう。
全国地図には、ウシロヒラ地名が１件だけ記載されている。
【五輪前】
ゴリンマエ。
この小字は、ゴリンダイラ（五輪平）小字の南側にある。
先にゴリンダイラについて述べているので、そこで触れておけばよかったのに落としてしまった。
ゴリンマエとは、「五輪塔の前にある土地」であろう。五輪塔は南に向いていたのであろう。北面した風景の方がすばらしいのであるが。
【井戸入・井ノ上・井下】
イドイリ・イノウエ・イシタ。
小林と柿野沢の境界付近にあり、久保田沢川（沢俣田川）に分布している。
イドイリ小字は２ヵ所にある。大きい方は柿野沢に、小さいのは小林にある。イノウエ小字は久保田沢川に沿った１ヵ所、イシタ小字は久保田沢川左岸に２ヵ所ある。
イドイリとは、「久保田沢川の上流部」をいうか。柿野沢のイドイリは久保田沢川支流の、やや大きな洞になっている。小林のイドイリは、その下流側にあり、「谷あいを川が流れているところ」と解する方が適切かもしれない。
イノウエとは、「流水の上の傾斜地」か。久保田沢川左岸にあり、傾斜地の底部を川が流れている。
問題はイシタ。イシタを素直に解釈すれば、「流水の下側の地域」になるが、むしろイノウエとした方が適切なほど、イシタ小字の最下端を久保田沢川が流れている。では、イシタとはどう解釈すればいいのか。
イシタとは、「ヰがシタになっているところ」、すなわち、「流水が下の方を流れているところ」とするしかない。こう考えたがどうであろうか。
全国地図には、イノウエ地名は５６件、イシタ地名は２件だが「石田」の字を宛てている。イドイリは無い。

【同心田・道心田】
ドウシンダ。
これらの小字は、城山丘陵の北東側傾斜地、久保田沢川（沢俣田川）の左岸にある。急傾斜地で水田も畑もないが、焼畑の可能性はある。「道心田」小字は上流側に、「同心田」小字は下流側にある。
ドウシンダとは、何を意味しているのか、はっきりはしない。字面からみれば、「近世、下級武士であった同心に与えられていた水田」となるが、そうではあるまい。はっきりはしないが、敢えて挙げると次のようになるかもしれない。
ドウシンダ←ドウ・シム（滲）・ダ（処）と変化したもの。ドウは川音の擬音語ドウドウのこと、シムは「水が濡れ通る」（広辞苑）こと、ダは「場所」を表す接尾語。
すなわち、ドウシンダとは、「川音が響き、水がしみ出す場所」を意味する。
なお、国土地理院の全国地図には、ドウシンダ地名は１件の記載も無い。
【ソト平】
ソトダイラ。
この小字は、久保田沢川（沢俣田川）の右岸にある。
ソトダイラとは、「平地もある外側の土地」で、外側とは、小林から見て柿野沢の地籍にある土地を意味しているものと思われる。そういう意味で、ソトデ小字の由来と少し異なっているように思われる。ソトに対するウチの範囲が、それぞれの小字の場所から考えて、ソトデの方がソトダイラよりも広いと思われる。
全国地図には、ソトダイラ地名は載っていない。
【松ノ木平】
マツノキダイラ。
この小字は、三角山丘陵の頂上部を含めた広い範囲を占めている。
マツノキダイラとは、「アカマツが目立つ、頂上部の平坦地」であろうか。マツは聖樹としても扱われたので、他の樹木よりは地名になりやすかったようだ（語源辞典）。
全国地図には、中・大字として、マツノキダイラ地名は、６ヵ所に記載されている。
【貝付】
カイズケ。
この小字は、久保田沢川（沢俣田川）の支流が開いたイドイリ小字の洞の奥にある。
カイズケとは何を意味するのか。難しい地名である。しかし、そのままにしておくことはできないので、二説を挙げておきたい。
①カイ←カヒ（峡）と転じたもので、「山と山との間」（国語大辞典）をいう。ズケ←ツケ（付）で「あるもののそば」（語源辞典）の意。カイズケとは、「山と山との間の峡谷の近くの土地」をいうか。カイズケ小字の南端は、久保田沢川支流の深い谷になっている。
②カイはカイ（階）でキダハシのこと。ズケ←ツケの転で、ツケは動詞ツク（漬）の連用形が名詞化したもの。カイズケとは、「階段状の地形になっていて湧水のある所」か。カイズケ小字の北側は幅のある洞で緩傾斜地になっている。
全国地図には、カイズケ地名は、１件も無いが、カイツケ地名は１ヵ所あり、「貝付」の字を宛てている。

【林ノコシ】
ハヤシノコシ。
この小字は、沢俣田川の右岸にあって、カイズケ小字に囲まれている。
コシはコシ（腰）で、山の腰に当たる部分であろう。ハヤシノコシとは、「側稜の森林になっている傾斜地で、側稜の中腹部分」をいう。
全国地図には、ハヤシノコシ地名は載っていない。
【雇地】
ヤトイジ。
この小字はカイズケ小字の南側にあり、側稜の尾根を含めた南向きの傾斜地にあり、一部は大きく崩れている。
ヤトイジとは何を意味しているのか。これも分かりにくい地名である。二説を挙げたい。
①ヤト（谷間）・イジ（井地）で、イジ（井地）は「溝」のこと（語源辞典）。ヤトイジとは、「谷間の中にある溝」か。イジがややしっくりしない。
②ヤトイジ←ヤトシジとイ音便化したと考える。ヤトは谷間で、ヤチやヤツと同じ（国語大辞典）。シジは動詞シジク（縮）の語幹で、「小さく縮んだ状態」（語源辞典）を意味している。
全国地図には、ヤトイジ地名は記載がない。
【久保尻】
クボジリ。
この小字は、久保田沢川（沢俣田川）の支流が開いた谷の中ほどにある。
クボジリとは、字面の通りで、「窪地（谷間）の下流の方にある土地」をいうのであろう。
全国地図には、なぜか、クボジリ地名は載っていない。
【風張】
カザハリ。
この小字は、柿野沢の角領白山社の南側にある南向きの傾斜地となっている。
カザハリとは、「風の強く吹き当たる所」（語源辞典）である。南よりの風が強く当たる場所であろう。
この地に、どうしてカザハリ地名が生まれたか、はっきりはしないが、隣の角領白山社とも関わりがあって風鎮めが行われたのかもしれないし、あるいは逆に風を必要とする窯などがあったのかどうか。
先に『伊那谷南部の気候地名』であげた、下久堅のカザハリであるが、位置が違っていることに気づいた。悉皆調査をやったおかげで、角領の小字地番が、明らかになったことによる。機会があったら訂正しておきたい。
全国地図には、中・大字として、６ヵ所にカザハリ地名が挙げられている。当てられている文字は全て「風張」となっている。
【ソリメ】
この小字は、柿野沢角領の国道２５６号線の両側に一つずつある。
ソリメとは何を意味するのか。これも分かりにくい地名である。二説を挙げる。
①ソリ（反）は傾斜地をいう。佐久地方の方言である。メ（目）は、畑などの境目をいうのではないだろうか。すなわち、ソリメとは、「緩い傾斜地の畑など、水平な境目になる筋のある土地」か。
②ソリ（反）は「休耕中の焼畑】をいう（国語大辞典）。メ←ベ（辺）の転。ソリメとは、「休耕中の焼畑のあたり」か。
全国地図には、ソリメ地名は３件。

【角須】
カクス。
この小字は柿野沢の角領にあり、国道256号線の南側になる。
カクスとは何か。これも語源辞典によって、二通りの解釈を挙げておきたい。
①カクはカ（欠）・ク（処）で、「外側へ流れ落ちる小さな土手」のことか。スはス（砂）を表す。即ち、カクスとは、「外側に流れ落ちる小さな土手に囲まれた砂地」を意味するか。
②スは「押し流されて堆積した土砂」をいう。カクは「崩壊地」のこと。以上から、カクスとは、「崩壊地もあり、押し流された土砂が堆積した所」か。
全国地図には、カクス地名は一つも載っていない。
【角領・角領白山】
カクリョウ・カクリョウハクサン。
この小字は、柿野沢角領の国道256号線の両側に分布している。
カクリョウとは何を意味しているのであろうか。カクリョウ（廓寥）という語がある。「からりとして広大なさま。広い大空のさま」（国語大辞典）を意味する。確かに、この小字の北端になる独立峰に立てば、こうした状況が理解できると思われるが、地名には不適切と判断して、ここでは採りあげない。
それでは、カクリョウとは何か。語源辞典に添って、二説を挙げておきたい。
①カクは、動詞カクム（囲）の語幹で「（何かに）囲まれた地」。リョウは「所領地」で、この場合は村請新田ではないだろうか。江戸時代、村が領主に申請し、村として開発した新田である。一定期間は免租だれていたらしい。以上から、カクリョウとは、「尾根などの高みに囲まれた村請新田であった所」ではないだろうか。
②カクはカミ（神）が転化した語。カクリョウとは、「神社の所領地」であったかもしれない。その神社は特定できないが、近くには、角領白山社・白山大権現・富士浅間社などの神社がある。
全国地図には、カクリョウ地名は、中・大字として、４ヵ所に記載されている。当てられている文字は、「隠尾」と「角領」が２ヵ所ずつ。
【中島・中島尻】
ナカジマ・ナカジマジリ。
これらの小字は、カクリョウ小字に囲まれるようにして、国道２５６号線の両側に広がる。ナカジマジリ小字は２ヵ所に分かれている。両小字ともに、久保田沢川の支流に挟まれている。
ナカジマは、「流水に囲まれた土地」であり、ナカジマジリは、「流水に囲まれたナカジマ小字の上流側にある土地」であろう。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、ナカジマ地名は２６２ヵ所にもあるが、ナカジマジリ地名は１ヵ所も無い。
【半ノ木】
ハンノキ。
この小字は柿野沢角領にある。尾根の北向きの傾斜地となっている。
ハンノキとは、「ハンノキに自生地か植林地」であろう。「榛ノ木」とも書き、カバノキ科の落葉高木。山林の湿地に自生し、江戸中期には植栽が奨励された。焼畑地帯でも植林が行われており、カクリョウのハンノキ小字でも焼畑が行われていた可能性はある。

【古庚申】
フルコウジン。
この小字は２ヵ所にある。東の方は二方向をハンノキ小字に接しており、西のフルコウジン小字はイケノホラ小字とハンナカダ小字にせっしている。
フルコウジンとは、「以前に庚申様を祀った所」と思われるが、コウジンとなると、「荒神」なので、「以前に荒神様を祀った所」かもしれない。コウシンであれば「庚申」だから、庚申塔とか庚申講の名残があってもいいと思われるが、この付近ではどうであろうか。祭神の庚申は仏教では青面金剛、神道では猿田彦だと説明され画像化されているが、蚕神・作神・治病神も庚申として祀られているようだ。
全国地図には、フルコウジン地名もフルコウシン地名も載ってはいない。
【中ノ洞】
ナカノホラ。
この小字は国道２５６号線が半円形を描いて大きく曲がる所にある。北側にはイケノホラ小字があり、南側にはコボラ小字がある。
ナカノホラとは、「間にある小さな谷」を意味していると思われるが、何と何の間にあるのだろうか。それは、今のところ、イケノホラという小字とコボラという小字の間、つまり二つのホラ小字の間にあるということではないか、と考えている。
全国地図には、ナカノホラ地名も載っていない。
【小洞】
コボラ。
この小字は、先にも触れたように、ナカノホラ小字の南側にある。
コボラとは何か。
コは接頭語で、「ほとんど意味を持たない」（語源辞典）と考えたい。このコボラ小字は、北側のナカノホラ小字より、面積が大きいように見える。コボラとは、「ちょっとした小さな谷」か。
全国地図には、４件のコボラ地名が、中・大字として記載されている。
【半中田】
ハンナカダ。
この小字は、いずれも丘陵北側の傾斜地にある。現在は、果樹園と森林になっている。
ハンナカダとは何を意味しているのだろうか。
ハンは「ハンノキの植えられていた所」。ナカは動詞ナガルの語幹かナギの転で、「崩壊地形」をいう（語源辞典）。ダはダ（処）で場所を表す接尾語。以上から、ハンナカダとは、「榛ノ木が植えられていた崩壊地のある土地」としたい。恐らくは、ここでも焼畑耕作が行われていたのではないだろうか。
ハンノウダ（半納田）と読む解釈もあるが、ここでは採りあげない。
全国地図には、ハンナカダ地名もハンナカタ地名も載ってはいない。
【ナギワキ】
この小字は知久平の地域センターから小林の三島社に向かう道路の南側に、２ヵ所ある。
ナギは「薙ぎ落としたような崩壊地」のこと。ワキはワキ（傍）で、「かたわら。そば」をいう。
ナギワキとは、「崩壊地の傍にある土地」を意味する。
国土地理院の全国地図には、ナギノワキ地名は、意外にも、記載が無い。

【芝原】
シバハラ。
知久平の小字である。久保田沢川の支流（滝沢川？）右岸にあって、側稜の末端部になっていて、平坦な頂上とその周辺の傾斜地からなる。
シバハラとは何か。単に「芝草の生えている原」(国語大辞典) ではない。二つの仮説を挙げておきたい。
①シバは、動詞シバク（打）の語幹で「崩壊地形」をいう。ハラは「未墾の入会草刈地」のこと (以上は語源辞典)。シバハラとは、「崩壊地のある未墾の草刈地」を意味する。
②シバは焼畑をいう（語源辞典)。ハラはハラ（腹）で、「頂上から山の中腹部分」を表す。シバハラとは、「焼畑にしていた、側稜の頂上から流水までの傾斜地」を意味する。
この小字の隣には、イナバ小字があるので、このシバハラにも刈稲が並べられたのかもしれない。
全国区地図には、シバハラ地名が、中・大字として、３８ヵ所にも記載されている。
【ナギ下】
ナギシタ。
この小字は、地域センター敷地内の北東隅にある。
ナギシタとは、「薙いだように崩れた崖の下の方にある土地」を意味するものと思われる。
どこが崩れて、この地域センター近くまで土砂が押し出してきたのか、はっきりはしないが、国道２５６号線の向こう側の山地が直接崩れたか、国道に沿った細流が土石流となったのか、どちらかであろう。
全国地図には、意外にも、ナギシタ地名は載っていない。
【イナバ・稲葉・イナバジリ】
イナバ・イナバジリ。
これらの小字群は、国道２５６号線と地域センターの南側に分布する。イナバ小字は２ヵ所、「稲葉」小字は１ヵ所、イナバジリ小字は２ヵ所にある。
イナバとは、「刈り稲の寄せ場。稲寄せ場」（広辞苑）である。稲架が工夫されるまでは、刈り取った稲は南向きの傾斜地で干していたらしい。その場所がイナバであり、「稲葉」とか「稲場」の字を宛てていた。
イナバジリとは、「稲干し場の後ろの土地」をいう。後ろとは、イナバ傾斜地の麓に当たる地域である。年によっては、イナバジリまで使って刈り取った稲を干したのであろう。
全国地図には、イナバ地名は、中・大字として、３２ヵ所が挙げられている。
【浅間】
アサマ。
番匠田溜池の一部を含めた、その北側が、アサマ小字になっている。
アサマといえば、直ちに浅間神社を探すが、知久平の富士浅間社は離れているようなので、ここでは関係は無いだろうと判断した。
では、アサマとは何か。語源辞典によって、二説を挙げる。
①アサ（浅)・マ（間）で、「谷などの浅い所」をいう。アサマとは、「浅い谷」をいう。
②アサはアズと同じで「崩壊地形」をいう。マはマ（間)。アサマとは、「崩壊地のある所」を意味する。
国土地理院の全国地図には、アサマ地名は、中・大字として、７ヵ所に記載されている。

【浅間平】
アサマダイラ。
この小字は、アサマ小字の北側にある丘陵で、尾根の頂上から中腹までを含んでいる。
アサマダイラとは、「アサマ小字の傍にある、山頂付近が平らな丘陵」を意味するものと思われる。
全国地図には、アサマダイラ地名は載っていない。
【池ノ上】
イケノウエ。
この小字は、番匠田溜池の東側と北側の二ヵ所にある。
イケノウエとは、文字通り、「番匠田溜池という池の高い方にある土地」である。
ありふれた地名であるから、全国地図にも、中・大字として、１３ヵ所に載っている。
【東】
ヒガシ。
この小字は、番匠田溜池の北西方向にあり、国道２５６号線の両側に分布する。
ヒガシとは何か。解釈を二つ。
①ヒガシとは、素直に解釈すれば「（あるものの）東の方にある地」ということになる。あるものとは、西の方にある知久平の中心地、あるいは知久平城であろう。
②敢えてもう一つの解釈を、語源辞典によりながら挙げておきたい。ヒは動詞ヒウ（聶）の語幹で「削り取られたような地形」を意味する。カシは動詞カシグ（傾）の語幹で、「傾斜地」のこと。すなわち、ヒガシとは、「削り取られたような崖のある傾斜地」ではどうであろうか。
ヒガシ地名は、全国地図には１９６ヵ所が中・大字として記載されている。多くは方角を意味していると思われるが。
【山越】
ヤマコセ。
この小字は、国道２５６号線が蛇行する傾斜地にある。
ヤマコセとは何か。ここでも二説を挙げる。
①ヤマは樹木の多い傾斜地。コセは、長野県の一部でいわれているという、「一方が山側になった道。山陰」（国語大辞典）。即ち、ヤマコセとは、「片側が山側になっている樹木の多い、傾斜地にある道」とする。この伊那谷南部には、コセ小字があちこちにある。
②ヤマは丘陵地のことか。コセ←コシ（腰）で、「山の中腹」をいう。合わせると、ヤマコセとは、「山の中腹の部分」となる。コシ地名も、伊那谷南部は多い。
全国地図には、ヤマコセ地名は、記載が無い。
【横枕】
ヨコマクラ。
この小字は、国道２５６号線の北側、一部が地域センターと重なる。
ヨコマクラとは何か。これも二説を挙げたい。
①ヨコマクラとは、「地形の都合上、地割の幹線に併行して区分できなかった部分」（語源辞典）であるという。これでは、実状が分かりにくい。
②ヨコマクラとは、「潅漑水路の上位に田地があって用水の先取権のある所」（方言大辞典）は明瞭である。ただ伊賀の方言であるというところに問題は残るか。
全国地図はヨコマクラが１８ヵ所。

【堀・堀外】
ホリ・ホリゾト。
これらの小字は下久堅地域センターの敷地と重なっている。ホリ小字が北側に、ホリゾト小字が南側に位置している。
これらの小字は文字通りで、ホリは知久平城の堀があった所で、ホリゾトはその堀の外側を意味している。
近くにミゾバタ（溝端）小字があり、これも知久平城の堀に関連があるのではないかと思われる。。
全国地図には、ホリゾト地名は載っていないがホリ地名は３１ヵ所に記載されている。
【坂尻】
サカジリ。
この小字は、国道２５６号線に沿っており、東側にある丘陵の北西端の麓にあたる。
サカジリとは、素直に、「坂道の登り口」（国語大辞典）であり、山梨県南巨摩郡と上伊那郡の方言になっているという。この知久平のサカジリは国道に沿っても、それと直交する道を歩いても、坂道の登り口になっていることがわかる。
全国地図では、サカジリ小字が、中・大字として、４ヵ所に記載されている。
【寺坂】
テラサカ。
この小字は、サカジリ小字の国道を越えた反対側の傾斜地にある。
テラサカとは、「寺院への坂道」であろう。村誌でははっきりしないが、近くにはホウゾウボウ（宝蔵坊）小字があり、ドウスダイラ（堂須平）小字も寺院に関係している可能性もある。このテラサカ小字は、寺院に関わっていることは確かと思われる。
テラサカ地名は、全国地図の中・大字に１０ヵ所で挙げられている。
【宝蔵坊】
ホウゾウボウ。
この小字は、テラサカ小字の北東側にある小さな小字である。
宝蔵は、「宝物を入れるくら」であったり、「経典をおさめておくくら」（以上は広辞苑）である。
ホウゾウボウとは、「宝蔵という名前の僧坊」か、実際に「経典などを保存しておく僧坊」であったのか。どちらかは、判明しないが、寺院関係の小字であることだけは確実であろう。
なお、ホウゾウボウ地名は、全国地図には載っていない。
【堂須平】
ドウスダイラ。
この小字は、国道２５６号線の坂道の両側に広がる面積の大きな小字である。傾斜地の麓の広い平坦地と中腹の平坦地とその間にある傾斜地からなる。
ドウスダイラとは何を意味するのか。二説を挙げる。
①ドウスはドウス（堂司）で、「禅寺で堂の管理をつかさどる役。堂主」（国語大辞典）であるという。ドウスダイラとは、「堂主が居住する平坦地」をいうか。
②ドウス←トウシと転じたもので、トウシは動詞タフス（倒）の連用形が名詞化したもので、「崩壊地形、浸食地形」を表す（以上は語源辞典）。ドウスダイラとは、「平坦地が多いが、崩壊地もある所」を意味する。
全国地図に、この地名の記載は無い。

【赤坂】
アカサカ。
この小字は、知久平の段丘の上の丘陵に２ヵ所ある。
アカサカとは、「赤い色の土に覆われている傾斜地」である。下久堅の表土の多くは赤土だといわれている（村誌）ので、アカサカ小字はどこにあっても不思議ではないが、特に、この知久平のアカサカが目立ったということであろうか。
全国地図でも、アカサカ地名は多く、中・大字として、１３５ヵ所にもある。
【イリ】
この小字は、アカサカ小字とアサマダイラ小字の間に挟まれている、小さな小字である。現在は住宅もある。
イリとは、「引っ込んだ奥の所」（国語大辞典）であろう。現在は道路も通っており、近くには複数の家がある。
全国地図には、中・大字として、２２ヵ所にイリ地名がある。
【原】
ハラ。
この小字は、菊名原丘陵の中腹部に２ヵ所ある。
ハラはハラ（腹）で、「山の頂と麓の中間の部分」（国語大辞典）をいう。それは平坦地であっても傾斜地であってもいいようだ。
ハラにはいろいろな意味が含まれているせいか、全国地図には、４５０ヵ所もの中・大字となって、記載されている。
【菊名原】
キクナバラ。
この小字は、国道２５６号線の両側に広がっており、側稜の菊名原丘陵の頂上部分から麓までを含む広い小字になっている。
キクナバラとは何を意味しているのか。これも難解地名である。
キクナという信濃・美濃の方言がある．マツムシソウのことをいうらしい。しかし、松虫草が地名になるほど重要な植物ではないので、採りあげない。では、キクナバラとは、何を意味するのか。三説を挙げておきたい。
①キクナバラ←キリ・クナ・ハラと転訛したもので、キリ（切）は、「開墾地」をいう。クナは、「焼畑とか連作の畑」を水窪では意味するという（語源辞典）。ハラ（腹）は「山腹」のこと（語源辞典）。以上から、キクナバラとは「焼畑など作物が栽培されていた山腹」を意味する。始めは焼畑であったのであろう、やがて常畑に変わっていったものと思われる。この小字は現在、果樹園が多い。
②キク←クキ（岫）の転で「山峰」のこと（語源辞典）。ナは場所を示す接尾語。キクナバラとは、「尾根の峰もある緩傾斜地の野原」か。この解釈には、少し無理があるかもしれない。
③キク（崎嶇）は「山路のけわしいこと」（国語大辞典）。ナは場所を表す接尾語。キクナバラとは、「山路のけわしい所もある山腹」か。
全国区地図には、キクナバラ地名の記載はない。
【竹越】
タケコシ。
この小字は、テラサカ・ホウゾウボウ小字に接している。
タケコシとは、「竹のある斜面の中腹」であろうが、「御嶽信仰にかかわる何かがある斜面の中腹」の可能性もある。
全国地図にはタケコシ地名は無い。

【才ノ神】
サイノカミ。
この小字は、ドウスダイラ小字を挟んだ、東側と南西側にある。
下久堅にはサイノカミ小字が多い。この知久平のサイノカミは、シモトライワとの境界に近いが、南西側のサイノカミがやや境界から離れているが、かっては、このあたり一帯がサイノカミと呼ばれていた可能性が高い。
【溝端】
ミゾバタ。
この小字は、ドウスダイラ小字とダイゼンマチ小字に挟まれている。
ミゾバタとは、「地を細長く掘った溝の傍」で、水を流したかどうかは不明。知久平城の堀の跡と思われる。ホリ小字と結ぶと、ほぼジョウ（城）が中心になりそうだ。
全国地図には、２ヵ所にミゾバタ地名があり、「溝端」「溝幡」の字が宛てられている。
【大膳町】
ダイゼンマチ。
この小字は、ドウスダイラ小字の両側にあり、ドウスダイラ小字が後に割り込んでいるものと思われる。
ダイゼン（大膳）は家康の麾下にあって、知久平城を築いた菅沼小大膳定利の親であるといわれている（村誌）。
ダイゼンマチとは、その大膳の名をとった町であろう。マチとは「建物が集まっている場所」（語源辞典）である。
全国地図にダイゼンマチ地名は載っていないが、ダイゼン地名は中・大字として３ヵ所にある。
【赤ギ田】
アカギダ。
この小字はホリ小字の北側にある。北側にはダイゼンマチ小字やハバ小字がある。
アカギダとは何か。アカ（赤）は「赤土」の意、ギダはキダ（段）の転で「段丘」を意味する。アカギダとは、「赤土で覆われた段差の小さな段丘」か。
全国地図には、アカギダ地名もアカキダ地名も載っていない。
【流田】
ナガルダ。
この小字はダイゼンマチ小字の北東側にあるが、ハバ小字に囲まれている。
ナガルは自動詞ナガル（流）の連体形で、ダはダ（処）で「場所」を示す接尾語。従って、ナガルダとは、「土砂が低い方へ移動した場所」ということになる。土砂が崩れていった所で、ナガルダ小字は急傾斜している谷に臨んでいる。
全国地図には、ナガルダ地名は無いが、ナガレダ地名は１０ヵ所にある。
【羽場】
ハバ。
知久平には、この小字が５ヵ所にある。最も広いハバ小字はダイゼンマチ小字の北側にある。現在は果樹園と水田になっている平坦地とその北側の傾斜地を含んでいる。五つの小字に共通していることは、いずれも傾斜地があること。
ハバはハバ（岨）で、「傾斜地。土手などの斜面。がけ」（国語大辞典）をいう。群馬、山梨、岐阜、長野の方言であるという。
ここのハバも、「傾斜地のある所」としたい。
全国地図には、４０ヵ所もハバ地名が載っている。

【町張】
マチハリ。
知久平には、マチハリ小字が４ヵ所にあり、いずれも知久平城趾周辺にある。いずれも緩急の傾斜地にあり、緩傾斜地には現在でも居住地になっている。
桐林にもマチハリ（町張）小字があったが、そこでは、「巻いたように張り出した地形となっている所」とした。いま考えると、「定まった日に人々が集まり、忌みごもりして夜明かしをする所で、張り出したような地形になっている場所」も選択肢の一つにしてもよかったのではないかと思われる。
しかし、知久平のマチハリには、これらの解釈は当てはまらない。
では、ここのマチハリとは何を意味するのか。４ヵ所のマチハリ小字に共通する意味をさぐらなければならない。
マチ（町）は、「邸宅内の一区画」（国語大辞典）だろうか。ハリ←ハフリ←ハニフと転訛したもので、「赤土の傾斜地」（語源辞典）か。
以上から、マチハリとは、「家臣等の邸宅内で赤土の傾斜地のある所」ではないだろうか。
全国地図には、マチハリ地名もマチバリ地名も記載は無い。
【町井】
マチイ。
この小字も傾斜地にあり、マチハリ小字の一つと接している。
マチイとは、「家臣の邸宅内の一区画になっていて、谷川が流れている所」か。
全国地図には、マチイ地名が中・大字として、７ヵ所に載っている。
【水上】
ミズガミ。
この小字は、マチハリ、マチイ、ハバ小字などに囲まれている。
ミズカミとは、一般には川の源流を指すが、ここでは当てはまらない。ここのミズカミとは、「泉が涌く所」（語源辞典）であろう。緩傾斜地ではあるが、自然湧水があっても不思議ではない。
ミスガミ（御簾紙）という語がある。奈良の吉野に産する上等の薄紙であるというが、楮が原料であるというので、この紙漉をしていた場所とも思えたが、やや遠い感じがして、採りあげないことにした。
全国地図には、ミズカミ地名が３９件、ミズガミ地名が３件、中・大字として挙げられている。
【北平】
キタダイラ。
知久平のキタザワ小字は、４ヵ所にあるが、いずれも塩沢川に沿った左岸にある。
キタダイラとは、「北の方で、平坦地もある傾斜地」か。キタとは、テラサカ小字やホウゾウボウ小字のある、かって寺院のあった所を指すか。
【石有田】
イシアリダ。
この小字は、塩沢川左岸の傾斜地にある。ミズガミ小字の北隣となる。
イシアリダとは何か。二説を挙げる。
①イシアリダとは、文字通り、「石が多い土地」か。ダはダ（処）で場所を示す接尾語。
②アリニは副詞で「斜めに」の意（国語大辞典）。イシアリダとは「石の多い傾斜地」か。
全国地図には、この地名は無い。

【籔下】
ヤブシタ。
この小字は、塩沢川支流の両岸に懸かる。
ヤブシタとは何か。二説を挙げておきたい。
①シタは動詞シタツ（滴）の語幹で、「水がたれ流れる様子」をいう（語源辞典）。ヤブシタとは、「流水があり、低木や竹が茂っている所」をいう。
②ヤブは動詞ヤブル（破）と関連して、「崩壊しやすい傾斜面」をいう（語源辞典）。ヤブシタとは、「崩壊しやすい傾斜地のある湿地」か。
意外なことに、ヤブシタ地名は、全国地図には載っていない。
【竹之腰】
タケノコシ。
知久平のこの小字は２ヵ所にある。塩沢川左岸の傾斜地の上端に当たる。
タケノコシとは、何を意味するのか。語源辞典に沿って、二通りの解釈を示したい。
①タケは「高くなった所」（語源辞典）で、コシは二段になっている段丘の下の段丘面に当たり、そこが上段の段丘の腰の部分になる。タケノコシとは、「上の段丘の腰の部分」を意味するか。上段面である知久平城面と支流の間にはもう一つの段丘があり、その上端がタケノコシ小字に当たる。
②タケはダケと同じく崖などの「崩壊地形」をいう。コシは動詞コス（漉）の連用形で「水が湧き出る地」を意味する。タケノコシとは、「崩壊地のある傾斜地で自然湧水のある所」を意味するか。
全国地図には、中・大字として、タケノコシ地名は２ヵ所に記載されている。
【町ヶ沢】
マチガサワ。
この小字は、塩沢川支流の左岸の傾斜地にある。
マチハリ・マチイのマチは、「知久平城の家士の邸宅内一区画」としてきているので、マチガサワのマチも同様に考えたい。
マチガサワとは、「知久平城の家臣邸宅内の一区画を流れる谷川のある所」となろうか。
全国地図には、マチガサワ地名は、中・大字として、１件だけ記載されている。
【三角】
サンカク。
この小字は２ヵ所にある。一つは、塩沢川左岸にあり、その氾濫原は、現在、畑になっている。もう１ヵ所は、その北西の方角にある大きな小字で、側稜の尾根の上にある。
サンカク（三革）には、「甲・冑・盾の総称」（広辞苑）という意味があるので、武器庫のある所とすることも可能かと思ったが、一つは城から離れすぎていること、もう一つは氾濫原や傾斜地では武器庫にはならないのでは、と判断して、採りあげないことにした。
サンカクとは、文字通り、「三角形の形をした土地」であろう。大きなサンカクは側稜の尾根が三角形に近い形で出っ張っており、小さなサンカクは、ちょうど、塩沢川と傾斜地で囲まれた氾濫原が三角形になっているので、そのことを示しているものと思われる。
全国地図には、サンカク地名は、中・大字として、４ヵ所にある。

【フチ田・渕田】
フチダ。
これらの小字は、国道２５６号線と県道下久堅知久平線の交差点の南側、天竜川を見下ろす地点にある。
フチダとは何か。
フチはフチ（縁）で、「段丘の縁、すなわち先端で崖になっている所」（語源辞典）をいう。ダはダ（処）で「場所を表す接尾語」であろう。
フチダとは、「崖となっている段丘の縁のあるところ」をいうか。
全国地図には、１カ所にだけ、フチダ地名がある。
【主膳】
シュゼン。
この小字は国道２５６号線の東側高台にある。
大嶋台城の大嶋治部少輔の家来であった増田主膳が浪人になって知久平に落ち着いたらしい（村誌）。彼が住んでいた所であろうか。
【狭石】
ハザマイシ。
この小字は主膳小字の南東隣にあり、現在は遊園地や駐車場に。
ハザマ（狭間）は「狭い場所」をいう。この場合は、傾斜地の一方は見上げる崖になっており反対側は見下ろす崖になっている。
ハザマイシとは何を意味するのか。イシの解釈によって二通りの仮説を示したい。
① ハザマイシとは、「狭い平坦地で大きな石のある所」とする。現在は見当たらないが、処分されたのかもしれない。
② ハザマイシとは、「石の多い狭い平坦地」をいう。
全国地図にはハザマイシ地名は無い。
【三石・上三石】
ミツイシ・カミミツイシ。
これらの小字は、三石甌穴群の周辺にある。ミツイシ小字が２カ所、カミミツイシ小字が１カ所ある。この周辺一帯をミツイシと呼んでいたと思われる。
ミツイシとは何か。二説を挙げたい。
① 素直に解釈すれば、ミツイシとは、「三つの大きな石のある所」となる。どれとどれで三つになるのか、という疑問は残るが、まずは無難な解釈である。
② ミツ←ミズと転訛したもので、ミツイシとは、「水石」で、甌穴に水が溜まっている状態を表す。ミツイシとは、「水が溜まっている石のある所」ということになる。
カミミツイシとは、「ミツイシより高いところにある土地」をいう。あるいは、かってのミツイシの中で高い部分を表しているのかもしれない。
全国地図には、ミツイシ地名は２５カ所にある。
【岩前】
イワマエ。
この小字の中に、三石甌穴群がある。
イワマエとは、「大きな岩の前」を意味する。確かに甌穴群の東側には大きな岩がある。このことを指していると思われる。
この岩は磐座であった可能性もある。あるいは、イワマエで神事が行われたのかもしれない。

【家添】
イエゾエ。
この小字は城小字群の尾根の末端部にあり、ミツイシ・カミミツイシ・コジョウの小字に囲まれている。
イエゾエとは、「有力者が住んでいた家の近くの場所」をいうか。有力者とは知久平城に関わる城主を含めた要人であったと思われる。
イエゾエ地名は、国土地理院の全国地図には載っていない。
【城神・上ノ神】
ジョウノカミ。
これらの小字は、知久平城関係の城小字群の中にある。城址と思われる尾根の北端に近いところにある。
ジョウノカミとは、「知久平城の中に神を祀った所か、あるいはその神の神領」を意味するものと思われる。
城内で祀られていた神とは、おそらくは、現在ミヤノコシ小字にある諏訪神社境内に祀られている神々の中にあるのではないだろうか。もっといえば、その中にある八幡宮ではなかったかと思われるがどうであろうか。
なお、ジョウノカミ地名は全国地図には記載されていない。
【三井前】
ミツイマエ。
この小字は、カミミツイシ小字の南隣にある小さな小字である。
ミツイマエとは何を意味しているのか。仮説二つを挙げる。
① ミツイ←ミツイシの転で、ミツイマエとは、「(城址から見て) ミツイシ小字のこちら側にある土地」をいうか。
② ミツイマエは、ミ（御)・ツ（ノ)・イ（井)・マエ（前）ではないか。ミは接頭語で尊敬を表し、ツは格助詞で、イは「掘井戸か井水」のことと考える。すなわち、ミツイマエとは、「お城の井戸か引き込んだ井水の前の方にある土地」をいう。この場合の前とは北側であろう。
全国地図には、ミツイ地名は１２カ所にあるが、ミツイマエ地名は載っていない。
【観音】
カンノン。
この小字は、カミミツイシ小字とウチミドウ小字に挟まれている。
カンノンとは、「知久平城内の観音堂があった場所」をいうか。村誌によれば、延享元年（1744）知久平村堂宮によれば「城山」小字に、観音堂１宇とあるのが、これかもしれない。城がなくなったときに、ジョウヤマへ遷座したことも考えられる。
全国地図には、中・大字として、カンノン地名が９カ所に載っている。
【古城】
コジョウ。
この小字は２カ所にある。いずれも、城小字群のある尾根筋の北端部にある。
コジョウというのは、天正１０年に家康の命で知久平に置かれた菅沼小大膳定利が知久平城を築く以前に、「知久善右衛門が築いた城」のことであろう（村誌)。
菅沼定利の城をコジョウと呼んだ可能性も残るが、コジョウ小字が１カ所に固まっていて、ジョウ小字も別にあるので、ここでは採らない。

【内御堂】
ウチミドウ。
この小字は、ジョウ小字の東側にある大きな小字である。知久平城跡と思われる地籍の北東隅に当たる。
ウチミドウとは、「城内にある仏像を安置した堂のあった所」をいう。どんな仏像を安置していたのか、はっきりは分からないが、村誌の延享元年（1744）知久平村堂宮によれば、「西垣外」小字の阿弥陀堂か、「城山」小字の薬師堂か、あるいは双方か、ということになりそうだが、どうであろうか。
全国地図には、ウチミドウ地名は記載されていない。
【城】
ジョウ。
この小字は、ウチミドウ小字とタカツカ小字に挟まれた平坦地にある。
菅沼定利の知久平城跡と思われる。
全国地図には、ジョウ地名が４６カ所も中・大字として記載されている。
【千貫岩】
センガンイワ。
この小字は、城小字群のある知久平城跡の中で、高い場所になっている。
センガンイワとは、「千貫もありそうな大きな岩のある所」を意味する。千貫といえば 3.75 トンである。地名発生時にこの岩の重量をはかることはできなかったと思われるので、ともかく、大きな岩を、そう表現したのであろう。
全国地図には、１カ所だけ、センガンイワ地名が、中・大字として
載っている。
【曽根】
ソネ。
この小字は、知久平城址の平坦地と国道２５６号線の間の傾斜地にある。
ソネは、本来は、「石が多く地味のやせた土地。岩の丘」（国語大辞典）をいう。
ここでは、ソネとは、「岩が出ている傾斜地」のことか。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、ソネ地名が４４カ所も挙げられている。
【平】
ヒラ。
この小字も、ソネ小字と同様、知久平城址の平坦地と国道２５６号線の間の傾斜地になっているが、一部、平坦地を含んでいる。
このヒラは黄泉平坂のヒラで、各地の方言にあるように、「傾斜地」を意味する（国語大辞典）。この付近では、岐阜、静岡、愛知県北設楽郡で使われていた方言だという。
もちろん、平坦地といういい意味もあるので、全国地図には、中・大字として、４４カ所にも挙げられている。
【高塚】
タカヅカ。
この小字は、国道２５６号線に沿った、大部分が傾斜地と傾斜地の間の平坦地になっている。
タカヅカとは、盛り土をした塚で、円墳・前方後円墳などの古墳をいい、後世の十三塚や経塚を指すこともあった。
タカヅカとは、「古墳があった所」をいう。村誌によれば、丸西の前の道を隔てた畑地に高塚があったという。天竜川の氾濫原と知久沢沿岸の湿田地帯を見下ろす眺望の地であるという。
全国地図には６カ所に記載がある。

【堀】
ホリ。
この小字は、知久平城址の西側の傾斜地にある。
知久平城の堀であろう。傾斜地に堀とは、また丁寧なことだと感心する。村誌にある「菅沼定利の知久平城の堀跡」とある写真は、ここのことではないだろうか。この堀が空堀であったのか、水を湛える堀であったのか、はっきりはしないが、村誌にあるように堀に注ぐ水を確保するために、井水を用いたとすれば、水堀であったに相違ないとは思うが、この傾斜地の堀にまで水を入れていたかどうかは疑問である。
【樋口】
ヒグチ。
この小字は、知久平城址の東側にある。
知久平城を築いた菅沼小大膳が、「用水のために上久堅柏原の入から玉川に流れていた小川を切り開き、大虎岩から塩沢川に落とし入れて水量を多くしてその水を引いて城の堀の用水に使おうとしました」（村誌）とある。
ヒグチというのは、「城内に引く用水の取り入れ口」であろう。その水は村誌にあるように堀に入れたのか、あるいは堀以外にも使っていたのかもしれない。
国土地理院の全国地図にも、ヒグチ地名は、中・大字として、２８カ所に採られている。
【寿永畑】
ジュエイバタ。
この小字はウチミドウ小字とジョウ小字やヒグチ小字に接しており、知久平城内にあったと思われる地籍である。
ジュエイバタとは何を意味しているのか。わかりにくい地名である。平安時代末期の年号である寿永ではあるまい。ここでは二説を挙げる。
① ジュエイはジュエイ（戍衛）で、「まもりかためること」（国語大辞典）であり、バタはハタ（端）で、「中心から遠い、外に近い所」（広辞苑）である。ジュエイバタとは、「守りを固めていて、もっとも城壁か堀に近い所」を意味する。
②ジュエイ←ジュエと転訛した語で、ジュエ（受衣）は「弟子となって、法を伝授されたしるしとして、師から僧衣を受けて着ること」（国語大辞典）の意。ジュエイバタとは、「かって受衣が行われた場所であった畑」とも解することは可能か。近くにはウチミドウ小字もあるので。
全国地図にはジェイバタ地名もジュエイ地名も見当たらない。
【マツバ】
この小字は、知久平城址の南西端にある。傾斜地の麓には国道２５６号線がある。
マツバとは何か。二説を挙げる。
①マツバ←マトバ（的場）と転じたもので、マツバとは、「的をかけて、弓・鉄砲などの射撃を行った所」（広辞苑）か。
②マツバ←マチバ（町場）と転じた。マツバとは、「菅沼家の家臣の居住地であった所」かもしれない。
全国地図には、中・大字として、マツバ地名は４０カ所にもあり、うち３１カ所は「松葉」の字を当てている。

【宮ノ腰】
ミヤノコシ。
この小字の中に諏訪神社が鎮座する。
ミヤノコシは分かりやすい地名と思われるが、はっきりしないところもある。コシ（腰）は、岩手・新潟・岐阜・三重の各県の方言にあり、「人やものの付近。そば。周辺」を意味する（方言大辞典）。ここのコシも全く同じであると思われる。
すなわち、ミヤノコシとは、「お宮の近くにある所」をいう。お宮は、もちろん知久平諏訪神社のことである。
全国地図には、ミヤノコシ地名は、中・大字として、５カ所に記載されている。
【道バタ・ミチバタ】
ミチバタ。
これらの小字は、知久平城址の南端と思われる付近にある。
ミチバタとは、文字通り、「通路のそばになる所」であろうが、あるいは、ミチバタ←ミズバタ（水端）の転も考えられないことはない。「水堀に沿った土地」を意味するか。
全国地図には、３件のミチバタ地名が、中・大字として挙げられている。
【沖】
オキ。
この小字は、ミヤノマエ小字とウマダシ小字の間にある。
オキには多くの意味があるが、「同じ平面で遠く離れた方をいう」（国語大辞典）という解釈が適切と思われる。
むろん知久平城から見ての判断になる。オキとは「（城から見て）離れたところにある土地」をいう。
国土地理院の全国地図には、９５カ所にも及ぶ記載がある。
【馬出シ】
ウマダシ。
この小字は、オキ小字のさらに南側にあり、知久平城段丘の南端に当たる。
ウマダシとは、広辞苑にある通りで、「城門前に築いて、人馬の出入りを敵に知られぬようにした土手」であろう。久保田沢川の対岸である南原から押し寄せた敵にわからないように兵士や馬の出入りを見えないようにするための施設がここに設けられていたものと思われる。
しかし、全国地図には、ウマダシ地名は１カ所に記載されているだけである。
【サラ田・皿田】
サラダ。
これらの小字は、ウマダシ小字やイナバジリ小字のさらに南側にあって、知久平城段丘の南側の傾斜地にかかる場所でもある。
サラダとは、下伊那郡の方言で、「水を乾かすことにできる田。乾田」（方言大辞典）であるという。下伊那ばかりではなく、飛州・岐阜・愛知などの方言でもあるようだ。確かにサラダ小字のあるところは、傾斜地の上端にあり、乾燥しやすい土地であることは想像できる。
しかし、ここで、あえてもう一つの解釈を示しておきたい。
サラ←サル、ザレの転で、崩壊地形に関わる地名でもあるという（語源辞典）。動詞サル（去。曝）に関連しているらしい。ダは場所を示す接尾語である。サラダとは、「崩壊地のある所」となる。ありうる地形になっている。
全国地図には、２カ所だけ、中・大字として記載されている。

【泰座平】
タイザヒラ。
この小字は、知久平城段丘の南側傾斜地にある。
タイザは下虎岩にもあり、柿野沢にもあった。『旧下久堅村の小字２１』に書いた内容をここで繰り返す。
Ⅰ．タイザ地名は伊那谷南部に多い。タイザ分布がどこまで広がるのか、確かめてはいないが、全国的には少ないと思われる。（全国地図に載っているのは２カ所、それも「間人」の字が当てられている）
Ⅱ．タイザ小字の貴人住居・寺社との関係は、タイザ小字との位置が近いことからあきらかである。
Ⅲ．タイザ小字のある所は、貴人の居住地や境内の中ではなく、必ずある程度の距離を置いている。中には、天竜峡のタイザのように、直線で５００ｍ離れている所もある。
以上のことから、タイザとは、「寺院の仏事や神社の祭を行うために組織された集団が使用した寺院や神社とは別棟の離れ屋があった所」とした。あるいは、「有力者の対屋（離れ屋）を使用したこともあったかもしれない」ということを付け加えたい。
知久平のタイザは、諏訪神社の対屋（たいのや）があったところである。ただ傾斜地になっているので、気にはなるが、現在でも建物はある。
なお、駄科のタイザでは、神事に登場する猿楽など芸能集団との関わりを考えたが、今でも捨てきれない。
タイザヒラとは、「諏訪神社の対屋があった傾斜地」であろう。
【胡桃沢】
クルミザワ。
この小字は、知久平城段丘の南端にあって、谷が食い込んでいるところにある。
クルミザワとは何か。その由来は当然すぎて、問題がないようにも思えるが、敢えて二説を挙げたい。
①クルは動詞クル（刳）の語幹で、ミは「辺」の転で漠然とした「場所」を示す接尾語か（以上は語源辞典）。以上から、クルミザワとは、「沢の浸食で崩れた所のある小さな谷」を意味する。現地の地形には合っている。
②素直に解釈すれば、クルミザワとは、「クルミ科植物が自生していた小さな谷」ということになろうか。
全国地図には、中・大字として、クルミザワ地名は、７カ所で取りあげられている。
【宮ノ平・宮平】
ミヤノヒラ（ミヤノタイラ）・ミヤタイラ。
「宮ノ平」小字は、原簿には５カ所にあり、うち４カ所がミヤノヒラと仮名が振られており、１カ所がミヤノタイラになっている。意味することはどちらも同じと思われるが、ここでは、ミヤノヒラで考えていきたい。
ヒラには、大きく分ければ、傾斜地と平坦地という矛盾した二つの意味がある。ここのヒラは、現地の地形からみて、広い平坦地を表していると思われる。
ミヤノヒラとは、「諏訪神社のある広い平坦地」としたい。
ミヤタイラも全く同じことを意味している。
国土地理院の全国地図には、ミヤノヒラ地名が３カ所、ミヤノタイラ地名は９カ所あるが、ミヤタイラ地名は一つもない。

【西平】
ニシダイラ。
この小字は、２カ所にあるが、いずれも、知久平城段丘の西側にある、ひとつ下段の段丘の傾斜地にある。
タイラとは、辞書類のほとんどが、平坦地とか傾斜のない所としている。しかし、現地は傾斜地になっている。この矛盾をどう考えたらいいのか。
長野県の方言にデーラがあり、「ゆるやかな傾斜のところ」をいう（長野県方言辞典）。また鹿児島ではタイラが「傾斜地」を意味していることがあるという（方言大辞典）。これは新潟で使われているというダイラが、「山の中腹から麓のあたり」を意味しているという（国語大辞典）。このわずかな手づるを頼りにしたい。
ニシダイラとは、「諏訪神社の西の方にある傾斜地」としたいが、どうであろうか。
全国地図には、ニシダイラ地名が１６カ所、ニシノタイラ地名は５カ所、ニシタイラ地名は、２カ所に、中・大字として挙げられている。
【伍真】
ゴシン。
この小字は、知久平城段丘の南西端とその傾斜地の二ヶ所にある。
ゴシンにはゴシン（御神）もあり、神体を意味するが、現地からみて、ご神体が安置されていた場所とは考えにくい。
ゴシンはゴシン（護身）か。護身とは、「真言行者の身を守護して魔障を防ぐこと。護身法を行うときに、真言行者が読経修法などに際し、それを成就させるため、心身を守護する印や真言を結ぶこと」（国語大辞典）であるという。
ゴシンとは、「護身法を行う場があった所」をいうのではないだろうか。段丘の端の崖の上とか傾斜地は、そうした場にふさわしい地であったのかもしれない。
ゴシンもはっきりしない地名であるが、これ以外に、現在のところ思いつく解釈はない。もちろん、もっと適切な解釈があるかもしれないのであるが。
国土地理院の全国地図には、ゴシン地名が、中・大字として、２件が挙げられている。当てられている漢字は「護神」と「五新」である。
【坂下】
サカシタ。
この小字は、知久平城段丘の南の傾斜地にある。
サカシタとは何か。単純と思える地名であるが、二説を挙げる。
①文字通りの解釈であれば、サカシタとは、「傾斜地の下の地域」となるが、この小字の地は傾斜地であり、傾斜地の下方ではない。傾斜地の麓の方の地名が傾斜地全体に広がったとみることもできるが、少し無理のような気もする。
②シタは動詞シタツ（滴）の語幹で、「水が垂れ流れる様子」を示している（語源辞典）とすることもできる。この小字の東端には流水があるし、この傾斜地からも自然水がしみ出ているのではないだろうか。以上から、サカシタとは、「水がしみ出ている傾斜地」としたいが、どうであろうか。
国土地理院の全国地図には、サカシタ地名は、中・大字として、８３カ所にも記載がある。①の意味で多いのかもしれない。

【境沢】
サカイザワ。
知久沢川に久保田沢川が合流する付近の右岸にある。南原との境界域に当たる。
サカイザワとは、「境界地域にある谷川の周辺」を意味する。
一般に村境には才ノ神を祀って悪霊を防ぎ止めたり、虫送りをしたり、村人が集まるであったが、ここの村境はどうであったろうか。
全国地図には、１２カ所にサカイザワ地名が記載されている。
【橋場】
ハシバ。
この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線の知久沢川に架かる橋のあるところに近い。
ハシバとは、「かって知久沢川を渡る橋が架けられていた場所」であろう。ハシバ小字も伊那谷南部の各地にあるが、いつ頃、かけられていたのかは明らかでない。
全国地図には、中・大字として、ハシバ地名は３８カ所に記載がある。
【西田】
ニシダ。
この小字は、天竜川氾濫原のひとつ上の段丘と、その間の傾斜地も含んでおり、南原との境界に当たる。主要地方道飯田・富山・佐久間線に沿った場所にある。現在も水田は無く、果樹園を中心とした畑地になっている。
ニシダとは単純な地名であるが、これも二説を挙げたい。
①ニシダとは、文字通り、「西の方にある地域」であるが、何にたいして西なのか。それは、知久平城と思われるが、あるいは諏訪神社かもしれない。ダは水田ではなくて、場所を示す接尾語であろう。
②ニシは動詞ニジル（躙）の語幹の静音化で、崩壊地形か浸食地形をいう（語源辞典）。ニシダとは、「崩壊地のあるところ」をいう。この小字は、知久沢川に沿っており、川沿い以外でも傾斜地があり、地形的には納得できる解釈ともいえる。
全国地図には、ニシダ地名が、中・大字として、２７ヶ所に記載されている。
【下祝】
シモイワイと原簿にあるが、シモハフリが転じたものか、間違いか。
この小字は、ニシダ小字の北隣にあり、主要地方道飯田・富山・佐久間線の下段にある平坦地となっている。
村誌によれば、上祝・下祝は諏訪神社関係の神主であり、元禄二年（1689）知久平村地図には、上祝三軒・下祝六軒の分家を記しており、下祝は坂井氏、主として八幡神の一切の事務を司る社掌であり、神社西方約三百メートルの字下祝にある、と書かれている。
シモハフリ（あるいはシモイワイ）とは、「諏訪神社の神主であるシモハフリが居住していた場所」を意味する。
なお、上祝は姓は宮内氏であったが、明治の初めに知久氏と改姓して東京へ移住しているという（村誌）。
【宮下】
ミヤシタ。
この小字は、国道２５６号線の下段の段丘にある。
神社があれば必ずといっていいほど、この小字はある。ミヤウエよりも付けやすい地名であろうか、数は多い。
ミヤシタとは、「諏訪神社より下の方になるところ」をいう。

【蟹沢】
カニサワ。
国道２５６号線と天竜川氾濫原との間にあって、知久平処分場の上手になる。
カニサワとは何を意味しているのか。ここでも語源辞典によって、二説を挙げたい。
①カニ←カナ（掻薙）の転で、カンナの古語。「掻き薙がれたような土地」を意味する。カニサワとは、「引っかかれたような崩壊がある谷川」をいうか。流路の短い谷川であるが、傾斜は急になっている。
②カニ←ハニ（埴）と転訛したもので、「粘土」のこと。カニサワとは、「粘土層のある所を流れている谷川」を意味するか。
国土地理院の全国地図には、カニサワ地名は、中・大字として、２５カ所に挙げられている。
【ゴミダ】
この小字は、天竜川の氾濫原とその上の段丘の間の傾斜地にある。現在も水田にはなっていない。
ゴミダとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。
①ゴミ←コミと転訛した語で、動詞コム（浸）の連用形が名詞化したもの。「水が浸かりやすい地」をいうか。ダは場所を示す接尾語。ゴミダとは、「天竜川の水が浸かりやすい土地」を意味するか。
②ゴミ←ゴウ・ミの転で、ゴウ（川）・ミ（廻）で、「川のあたり」をいう。ゴミダとは、「天竜川に近い土地」をいうか。
全国地図には、１カ所にだけ、ゴミダ地名があり、「五味田」の字が当てられている。
【川端】
カワバタ。
この小字は、天竜川の氾濫原に３カ所ある。そのうちの一つには、知久平処理場がある。
カワバタとは、「川のほとり」（広辞苑）のこと。天竜川のかわぶちにある。
全国地図にも、中・大字として、カワバタ地名が、６９カ所にもある。
【川原】
カワハラ・カワラ。カワラはカワハラの約で同じことを意味している。
天竜川の最も川よりにある小字で、カワハラとは、「川辺の水がなくて砂石の多い所。川沿いの平地」（広辞苑）をいう。
当然のことではあるが、全国地図には、中・大字として、カワラ地名が１２６カ所、カワハラ地名が５６カ所と多い。
【下河原・下川原】
シモガワラ・シモカワラ。
いずれも同じをことを示している。
いずれも、「川下にある川原」を意味する。天竜川に沿った下流側にある川原をいう。
全国区地図には、シモガワラ地名でも３９カ所に、中・大字として挙げられている。
【平岩】
ヒライワ。
この小字は、天竜川氾濫原とひとつ上の段丘との間の傾斜地にある。ゴミダ小字の東側のやや高いところにある。
ヒライワとは何か。国語大辞典にあるように、「表面が平らで、板のような岩」を意味する。「ヒライワがあった所」か。近くの古墳の天井石か。

【塚本】
ツカモト。
この小字は二ヶ所にある。一つは、タカツカ小字とヒライワ小字に囲まれており、もう一つは、もっと北側の天竜川沿いにある。
ツカモトとは何か。ツカは村誌にある高塚古墳のこと、モトは「存在の基本となるところ」（国語大辞典）をいう。村誌によれば、知久平には、二つの古墳が記録されている。いずれもツカモト小字に関係していると思われる。南側のツカモトは、「高塚古墳があった所」を、北側のツカモトは、「島外垣古墳のあった所」を意味するものと考えている。
全国地図にも、ツカモト地名は１１ヶ所が中・大字として挙げられている。
【土井】
ドイ。
この小字は、国道２５６号線の西の方にあって、タカツカ・シロシタ・ヒナタの小字に囲まれている、小さな小字である。天竜川氾濫原とその上の段丘との間の傾斜地にある。
ドイ（土居）とは、「中世、聚落の周囲の防御のためにめぐらした土塁。転じて、土豪の屋敷」（広辞苑）という。ここ知久平のドイは、「知久平城の家臣の居住地があった所」であろう。
全国地図には、ドイ地名が中・大字として１１４カ所も記載されている。
【城下】
シロシタ。
この小字は、国道２５６号線の西側にある。国道を越えた東側には、シロガミ（城神）小字がある。
シロシタとは、文字通り、「知久平城の下の段になる地域」をいう。
全国地図には、１４カ所に、中・大字としての記載がある。
【水ナシ】
ミズナシ。
この小字は、国道２５６号線と天竜川の間に、３カ所ある。
すぐ近くを天竜川が流れているのに、ミズナシとはどういうことなのか。天竜川左岸の水神橋下流域は岩盤が顕れている所で、現在でも、近くには水田が無い。岩盤の割れ目などから自然湧水はあっても、地表には現れないのかもしれない。
ミズナシとは、「流水や湧水の無い地域」であろうか。
なお、飯田付近の方言として、ミズナシが記録されていて、「がらがらの岩の沢」の意（国語大辞典）とされている。
全国地図にも、ミズナシ地名は２３カ所が挙げられている。
【垣外・北垣外】
カイト・キタガイト。
これらの小字も、国道２５６号線と天竜川の間にある。いずれも小さな小字で、カイト小字は５カ所にある。
カイトとは、「住居跡」のこと。知久平城の家臣か商家の住居が並んでいたと思われる。
キタガイトはカイト小字の「北の方にある住居跡」ではないであろう。近くのカイト小字は、ほとんどが逆にキタガイト小字の北の方にあるからである。
キタ←キダで、「階段」のこと。キタガイトとは、「階段のある住居跡」あるいは「階段状の土地にある住居跡」ということになろうか。
全国地図には、カイトが８ヶ所、キタガイトは１０ヶ所ある。

【城尻】
シロジリ。
この小字は天竜川氾濫原とその上の段との間にある傾斜地にある。小さな小字である。
シロジリとは、「城の末端部」を意味するものと思われるが、知久平城がここまで広がっていたのかどうか。天竜川の水際の斜面にも、なんらかの防御施設があったのかもしれない。
全国地図には、シロジリ地名は記載されていない。
【二反田】
ニタンダ。
この小字は、国道２５６号線の西側にある。二つのミズナシ小字に接している。
ニタンダといえば、「二反歩の田んぼ」ということになりそうであるが、そうではないだろう。現在でも水田は無いし、ミズナシの小字に接しているので水も少ないのではないか。それに面積の変動はありうるが、二反歩より４倍近い面積になっているので、無理がありそうだ。
では、ニタンダとは何か。これも語源辞典によりながら見ていきたい。
ニはニ（丹）で、「赤土。粘土」のこと。タン←タナ（棚）が転訛したもので、「段丘」をいう。ダはタ（処）で場所を表す接尾語。以上から、ニタンダとは、「赤土のある段丘面」を意味しているのではないだろうか。
全国地図には、ニタンダ地名は１６ヶ所に記載されている。
【平ヤシキ】
ヒラヤシキ。
この小字は、天竜川沿いの崖に上にある。
ヒラヤシキとは何であろうか。解釈を二つ。
①ヒラには、「傾斜地。台地」等の意味がある（国語大辞典）。ヒラヤシキとは、天竜川端の「台地の上の住居跡」か。
②ヒラには、「一般の人」の意味もある。ヒラヤシキとは、「（家臣などの有力者でない）一般の人の住居跡」も考えられないわけではない。
なお、全国地図には、ヒラヤシキ地名は載っていない。
【阿島垣外】
アジマガイト。
この小字は、国道２５６号線の西側にある。水神橋手前の交差点より南になる
アジマとは喬木村の阿島と関連があると思われる。村誌によれば、阿島が知久領の北端であったことがあるという。
アジマガイトとは、「阿島に関わる有力者の住居跡」であろう。
当然のことであるが、全国地図にはアジマガイト地名は無い。
【マキメ】
この小字は、天竜川左岸の水神橋に沿う地域にある。
マキメとは何を意味しているのか。二説を挙げる。
①マキは動詞マク（巻）の連用形が名詞化した語で、「崖が半円形に巻いている所」（語源辞典）で、メはメン（面）の転で崖の面をいう。すなわち、マキメとは、「崖が半円形に取り巻いている面になっている所」をいう。
②マキは同じで、メはベ（辺）の転（語源辞典）で、マキメとは、「崖が半円形に巻いている辺り」のこと。
全国地図には１ヶ所だけある。

【上川原】
カミカワラ。
この小字は、水神橋より上流側の天竜川左岸にある。皮に沿った長い小字である。
水神橋の下流側にはシモカワラがあるので、それに対して上流側にある川原に付けられた小字名である。
全国地図には、中・大字としてカミカワラ地名が２８ヶ所にある。
【山蔭】
ヤマカゲ。
この小字は、県道下久堅・知久平線と天竜川の間にある。現在、砕石光条のある所。
ヤマカゲとは、文字通り、「南側にある丘陵の蔭になるところ」であるが、必ずしも日陰になるとは限らない場所である。
全国地図には、ヤマカゲ地名は、３ヶ所に記載されている。
【沢】
サワ。
この小字は、知久平の南原との境に近く、二面を天竜川と知久沢川に接している。
サワとは、「低くて水が溜まり、蘆や荻などの茂った地」（広辞苑）をいう。この小字が発生した当時は、この付近の状態は、このようであったに違いない。
なお、サワについては、面白い解釈がある。知久平のここでは当てはまりにくいが、紹介だけしておきたい。
サワはサハ（騒）で「水音などによる擬音」（語源辞典）ではないか、というのである。確かに、天竜川の音に知久沢川の音が重なって、騒々しい音になることもあるのかもしれない。
全国地図には、サワ地名が６１ヶ所と多く記載されている。
【黒沢】
クロサワ。
この小字は、天竜川沿いで南原の最も北側にある小字である。
クロサワは何を意味しているのか、意外と難しい。
クロはクロ（壠）で、「小高くなった所」（国語大辞典）のことか。サワは「谷。渓谷」をいう。
以上から、クロサワとは、「小高い丘があって、一方の低い方は渓谷になっている所」ということであろうか。広い小字で、天竜川の側と知久沢川の下流域では、急傾斜地になっていて、その渓谷をサワとしたのではないかと判断したのであるが、他に適切か解釈があるかもしれない。
全国地図には、８２ヶ所に、クロサワ地名が、中・大字として記載されている。
【丈六・南丈六】
ジョウロク・ミナミジョウロク。
これらの小字は、２ヶ所ずつあるが、大きくひとかたまりになっている。主要地方道飯田・富山・佐久間線の西側であるが、天竜川端まで延びている。
ジョウロクとは、一丈六尺（５m近い）のことで仏像のことをいう。
対岸の駄科にもジョウロク小字があって、それは「仏像に見立てた岩のある場所」としたが、この南原のジョウロクも同じことを意味しているものと思われる。
ミナミジョウロクは「南側にあるジョウロク」ということになる。小さなジョウロク小字が、さらに南にあるので困るが、とりあえず以上のようにしておきたい。

【掘立平】
ホッタテダイラ。
この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線の東側にある急傾斜地となっている。現在も一部は果樹園になっているが、大部分は竹藪である。
ホッタテダイラはホツ（秀ツ）・タテ（立）・ダイラ（平）か。
ホツは下伊那や水窪では「側稜」を意味する（国語大辞典）。上の台地から見ると、台地の末端が水平に出張っている。このことを表現しているのではないだろうか。
タテは動詞タツ（立）の連用形で、切り立ったような岸壁をいう。
ダイラは、「山中の平らな所」のこと。タイラにも同様な意味があり、東北から北陸、静岡、岐阜などで使われているという（以上は国語大辞典）。
ホッタテダイラとは、「中平段丘が張り出していて岸壁となっている、平坦地もある土地」ということになる。
全国地図には、ホッタテダイラ地名の記載は無い。
【北平・上北平】
キタダイラ・カミキタヂラ。
キタダイラ小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線とそのひとつ東側の道路に沿った広い小字である。
キタダイラとは何か。二説を挙げる。
①一般的な解釈であるが、「北の方にある平坦地」をいう。北とはナカダイラに対する北側になっていることをいう。南原のキタダイラはこれでいいと思われるが。
②もう一つ、可能性があると思われる解釈を示したい。キタ←キダ（段）と清音化した語で、階段状の地形をいう。キタダイラとは、「緩い傾斜地で、低い階段状になっている平地」を意味する。
全国地図にも、キタダイラ地名は、中・大字として７ヶ所に記載がある。
【北垣外】
キタガイト。
この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線の西側で天竜川まで繋がる、急傾斜地と緩傾斜地からなっている。
キタガイトとは何か。これも二説を挙げたい。
①キタ←キダ（段）で階段状になっている地形をいう。ガイト←カイトで住居跡のこと。キタガイトとは、「階段状の地形になっていて、住居跡もあるところ」を意味する。
②キタは方向をしめすキタ（北）で、キタガイトとは、「北の方にある住居跡」で、北とは、ナカダイラ小字か文永寺からの方角であろうか。正確には北西方向になるが。
全国地図にも、１０ヶ所にキタガイト地名が載っている。
【ホ田下】
ホタシタ。
この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線に沿っており、ジョウロク小字とヤクシドオリ小字に挟まれている。現在は、大部分が水田になっている。
この地域では、ボタもホタも殆ど同じ意味に使われている。ホタとは、「草地の傾斜地が付いた、やや広い畦」をいうのではないだろうか。その傾斜地は石垣に変わることもある。ホタシタとは、「幅のある傾斜地でもある畦の下の所」をいうか。あるいは、シタには湿地をいうこともある。
全国地図にはホタシタ地名は無い。

【西平】
ニシダイラ。
この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線の西側にあって、天竜川まで続く急傾斜地も含んでいる。
ニシダイラとは、一般的に解釈すれば、「西の方にある平坦地のある所」のこと。西というのは、中平段丘の西端のことをいうのか、あるいは文永寺の西の方を表しているのか。そして西方浄土への想いも込められているのだろうか。
一般的でない解釈も示しておきたい。ニシは動詞ニジム（渉）の語幹が清音化した語で、「湿地」を意味する（語源辞典）。ニシダイラとは、「自然湧水もあり平坦地のある地域」をいう、という解釈も成立しそうだ。
全国地図には、中・大字として、ニシダイラ地名が16ヶ所に挙げられている。
【薬師通り】
ヤクシドオリ。
この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線の東西にあるが、南端に文永寺に向かう道路がある。
ヤクシドオリとは文字通り「薬師堂に向かう道」をいうのであろう。その薬師堂ないし薬師如来がどこに鎮座していたのかは、はっきりしていない。常識的には文永寺にあったのではないかと思われるが、よく分からない。
ヤクシドオリ小字は、ほぼ東西にのびていて、その西にはニシダイラ小字がある。東方の薬師如来が西方の阿弥陀の浄土へ導くことと関わりはあるのであろうか。
下虎岩にもヤクシ小字がある。薬師堂らしい姿は浮かび上がってはこないが、下久堅における薬師信仰の広がりを見ることができると思われる。
全国地図には、ヤクシドオリ地名はないが、ヤクシ地名は15カ所にある。
【中平】
ナカダイラ。
この小字の周辺には、キタダイラ・テラシタ・ウリダ・タイザ・ヨネヤ・ヤクシドオリ・ホタシタなどの小字がある。
ナカダイラとは、「南原の中心にあるところの平坦地」をいう。緩傾斜地になっているが、南原の中心地であったと思われる。
全国地図にもナカダイラ地名は、中・大字として44カ所に記載がある。
【ヨネヤ】
この小字も南原の中心地にあってナカダイラ・タイザ・ハクサン・ネギヤの小字に囲まれている。
ヨネヤとは何を意味しているのであろうか。ヨネヤはヨネ（米）・ヤ（屋）で、この地方の方言から、「稲・粟・稗・麦などの皮を取り除く作業をする家」を意味するのではないだろうか。
方言大辞典によれば、下伊那には、「稲・粟・稗などの皮を取り除いたもの」をヨネ（米）と呼んでいる。また愛知県北設楽郡では

「稲や稗・麦のような穀物を精白すること」をヨネというらしい。

穀物の皮を取る作業は水車で行われたと思われる。近くには流水もある。動力用の水車が杵や臼と結びついて精米や製粉に利用されるようになったのは江戸時代中期以降という（国史大辞典）。下久聖はどうであったか。

【泰座】

タイザ。

この小字は、文永寺の下側、南西方向にある。周辺には、テラシタ・ウリダ・ナカダイラ・ヨネヤ・シラヤマ・ゴンゲン・テンジンヤマ・セイジョウイン等の小字がある。

タイザとは、すでに、『下久堅の小字２１、９７』にあるように、「寺院の仏事や神社の祭りを行うために組織された集団が使用した寺院や神社あるいは有力者の住居とは別棟の離れ屋があった所」であろう。

その座は、宮座か法座か、あるいは芸能集団の座のいずれかであろう。

この南原のタイザは、文永寺関連の法座か、近くのゴンゲン小字に関わる宮座があった所と思われる。

【石原】

イシハラ。

この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線の東側にあり、水田と住居のある所。

イシハラ＝イシワラは、「小石の多くある所」（広辞苑）をいう。

この地名も各地にあり、全国地図にも７８ヵ所で挙げられている。

【岩ノ平】

イワノタイラ。

この小字は、この小字も、主要地方道飯田・富山・佐久間線の東側にあり、イシハラ小字の南隣になる。ほとんどが水田で、一部が畑となっている。

イワノタイラも、「石の多い平坦地」を意味するものと思われる。北側にあるイシハラ小字と同じ状況を小字名にしたものであろう。

全国地図には、イワノタイラ地名は載っていない。

【下垣外】

シモガイト。

この小字は主要地方道飯田・富山・佐久間線の西側にある。

シモガイト小字は小林にもある。

南原のシモガイトは何を意味するのか。小林のシモガイトと同様に、二説を示しておきたい。

①南原中央部のナカダイラ小字よりも低い所にあるので、シモガイトとは、「低い方にある住居跡」ということになる。ただカミガイト小字とかカイト小字が近くに見当たらないのが、この説の欠点になる。

②シモガイトとは、「霜が降りやすい住居跡」ではないか。平坦地になっている場所もあり、霜の道の一部になっている可能性はある。

全国地図には、中・大字として、７ヵ所にシモガイト地名はある。当てた漢字には、「霜」は全く使われてはいない。

【清水】

シミズ。

この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線の西側にある。

シミズ小字は、竜丘では東山道と絡めて考えたが、ここでは旅人のための清水ではなかったかもしれない。

シミズとは、「自然湧水のある所」

であろう。近くに上流から流れてきている流水はあるが、自然湧水もあったと思われる。

近くの村人たちが、この清水を飲料水として利用したであろうし、あるいはこの清水に集まって情報交換をすることもあったのであろう。

全国地図には、２３６ヵ所という数のシミズ地名が記載されている。

【ホッキ・下ホッキ】

シタホッキ。

これらの小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線と天竜川の間の急傾斜地にあるが、一部は水田にもなっている緩傾斜地である。

ホッキとは、飯田市付近と下伊那郡の方言として方言大辞典に挙げられているように「がけなどの険しい所。川辺などの険しい所の道」をいう。

なお、方言大辞典には、下伊那郡ではホキ・ホケ・ホッケなどともいい、飯田市付近では、「尾根の一番低い所」をホッキと呼んでいる、とある。

シタホッキについては二説を挙げる。

①シタは天竜川の下流側を意味する。シタホッキとは、「下流側にあるホッキ」ということになる。

②シタはシタシタから転じた語で、「湿地」を表す（語源辞典）。シタホッキとは、「湧水のあるホッキ」という解釈もあり得る。ここには現在も住宅があり、一部、水田もあり、自然湧水のあることをうかがわせる。

伊那谷南部にはよくある地名であるが、全国地図にはホッキ地名は、全く記載されていない。

【ネギヤ】

この小字は、ナカダイラ小字の南隣にある。

ネギヤは祢宜屋で、「神官の住居」をいう。ネギとは、「神主の下、“祝”の上に位する神職」（広辞苑）とあるが、この地域では、これらの神職の位を分けてはいなかった。

ここネギヤ小字に住んでいた神官が関わっていた神社は、すぐ南にゴンゲン小字とシラヤマ小字があるので、白山権現を祀った神社と思われる。

【山伏塚】

ヤマフシヅカ。

この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線の両側に広がっていて、シタホッキ小字とキオチ小字に挟まれている。

山伏塚とは、「山伏を葬ったという伝説を持つ塚」（民俗大辞典）をいう。

山伏塚には二種類ある。㋑入定塚で、自ら生きたまま塚に埋められた場合。㋺山伏が刑死したとするものと不慮の遭難で死んだとするものがあるが、いずれも死後に祟ったという。山伏の霊魂は一般人のそれよりも強力で、祟りも強いと考えられていた。塚を築くことで御霊を鎮め、逆に現世利益をもたらす神に転ずることを願った。

南原の山伏塚がどうなのかは、よく分からない。

ヤマブシツカ小字は、竜丘にも三穂にもあったが、全国地図には、ヤマフシヅカ地名はなぜか記載が無い。

【権現・白山】

ゴンゲン・シラヤマ。

この小字は、シラヤマ小字を挟んで、２ヵ所にある。

ゴンゲンとは、「白山権現を祀っていた所」であろう。すぐそばに、シラヤマ小字があるからである。

権現とは、「仏・菩薩が日本の衆生を救うために、権（かり）に神の姿をとって現れた存在」（民俗大辞典）で

あるという。白山権現もすでに平安時代中期から現れていたらしい。権現号は、強力な霊験を発揮する神霊と考えられていたらしい。

全国地図には、ゴンゲン地名が１８ヵ所、シラヤマ地名も１８ヵ所、ハクサン地名は４１ヵ所にもある。

【京山・御経山・京塚山・京塚】

キョウヤマ・オキョウヤマ・キョウヅカヤマ・キョウヅカ。

これらの小字をキョウヅカ小字群と呼びたい。これらの小字群は、白山権現小字の南隣にあり、文永寺の南南西方向にある。御経山の頂部は、現在は墓地になっており、京塚山にも墓地がある。

どの小字にもあるキョウは、これだけ揃っていると、仏教の経典である「経」以外には考えられない。「京塚」「京塚山」は当然であるが「京山」も「御経山」も、「経典を埋めた山」に関わる地名であろう。

経典を経筒に納めて経塚に埋める。それは仏教的作善行為の一種で、平安時代の中期、ほぼ十世紀の終わりごろ、わが国で創められたいう（国史大辞典）。鎌倉時代には追善供養的な性格が顕著になり、室町時代には廻国納経の一手段に用いられるようになる（同書）。

経塚の最初の頃は、土を盛り上げて造営したと思われるが、後には、その場の目立つ峰に経筒を埋納するようになっていったのではないだろうか。

このキョウヅカ小字群のある南原南部の、この丘陵は、経筒を埋納するのに適した丘陵であったと思われる。

全国地図には、キョウヤマ地名が２ヵ所、キョウヅカヤマ地名が１５ヵ所、キョウヅカ地名が２６ヵ所となっているが、オキョウヤマ地名は記載が無い。

【角垣外】

カクガイト。

この小字は、京塚丘陵の西麓になる緩傾斜地にある。

カクは、「とがった所」（広辞苑）と思われる。地形も小字も頂角の小さな二等辺三角形に近い形になっている。

カクガイトとは、「住居跡でとがった所がある敷地」か。

全国地図にはカクガイト地名は載っていない。

【神明・神明前】

ジンメイ・ジンメイマエ。

これらの小字は、京塚丘陵のはるか西の麓の緩傾斜地にある。

ジンメイ←シンメイの濁音化。シンメイとは、「天照大神を祭神として祀っていた所」（広辞苑）であろう。ジンメイ小字には、神明社があったと思われる。現在は神社も祠も見えないので、どこかへ遷座しているのかもしれない。ジンメイマエ小字はジンメイ小字の南隣にあるので、神明社は南向きの社であったのだろう。

全国地図にはジンメイ地名が２ヵ所、シンメイ地名が３６ヵ所に、中・大字として記載されている。

【二ツ澤】

フタツザワ。

この小字は、京塚丘陵の北西麓にある。キョウヤマ小字の一つ下段の緩傾斜地になっている。

フタツザワとは何か。

サワ（沢）は、「小川」を意味する。愛知県北設楽郡では、「清水のわきでる小川をサワと呼んでいる（方言大辞典）というが、ここ南原のサワはその通りの地形になっている。フタツザワ

の解釈を二通り挙げておきたい。
①素直に解釈すれば、「二ヵ所に泉があって小川となっている所」になる。
②フタは動詞フタルの語幹で「水が溢れる」意。ツは場所を示す接尾語。フタツザワとは、「湧水の小川がる所」。

【木落】

キオチ。

この小字は、京塚丘陵の西麓から天竜川までの間の広い小字になっている。

キオチとは何を意味しているのか。これも難しい地名である。語源辞典によってみていきたい。

キ←キハ（際）で、「端」のこと。オチ（落）は「傾斜地。崖」をいう。キオチとは、「端が崖になっている所」となる。現地はそのような地形にはなっているが、この解釈が正しいのかどうか、はっきりしない。しかし、他の由来は思いつかないでいる。

全国地図には、キオチ地名は載っていない。

【落】

オチ。

この小字は、京塚丘陵の西麓にある。キョウヅカ小字やカクガイト小字の西隣になる。

オチには、先にみたように、「傾斜地。崖」の意味がある。オチとは、「崩れたところのある土地」のことと思われる。

全国地図には、オチ地名が、中・大字として、１０ヵ所に記載されている。

【下府垣外・下府垣外山】

シモフガイト・シモフカイトヤマ。

シモフガシト小字は、京塚丘陵の南部の中腹にあり、それより高い所にシモフガイトヤマ小字がある。現在も居住地となっているところ。

シモフとは何か。語源辞典によって二説を挙げたい。
①シモ（下）は高い所に比べて低い所をいう。京塚丘陵は深く、東の方に更に高いところがある。そのことをいう。フはフ（生）で、「～になっている所」を表す。シモフガイトとは、「東側の高い所に比べて、低い方にある住居のあるところ」か。
②シモ（下）は「中心から離れた部分」のこと。南原の中心部から離れていることをいうのかもしれない。シモフガイトとは、「地域の中心部から離れた所で、住居のある所」か。

その他、シモ（霜）も考えられないわけではないが、ここでは挙げない。

シモフガイトヤマは、「シモフガイト小字から見て山になっている所」であろう。

【橋ノ免】

ハシノメン。

この小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線の両側に跨がり、西は天竜川に達している。対岸の竜丘はクロセガフチ（黒瀬ヶ淵）小字である。

南原と竜丘の黒瀬ヶ淵をつなぐ天竜橋は、明治２年に作られたが、これは第二代の橋で、これより４００年前に、小笠原氏が土橋を架けているという。第二代の橋は明治６年には通行不能になってしまったらしい。以後、第４代の橋まではこのハシノメン小字のある所に架けられたようだ。（以上は村誌による）。

ハシノメンとは、何を意味する。ハシは黒瀬ヶ淵に架けられた天竜橋のこと。メン（免）は、免租のこと。ハシノメンとは、「天竜橋の管理維持のために租税が免じられている田畑のある所」をいう。

メン←ベ（辺）と転訛したもので、ハシノメンとは、「天竜橋の橋脚付近」という解釈もありうるか。

【宝徳洞】

ホウトクボラ。

この小字は、ハシノメン小字の東隣にあって、他にヒカゲタイラ・シモフガイト・ジンカの小字に囲まれている。

ホウトクボラとは何を意味しているのか。年号ではないとは思うものの、見当もつかない。これも語源辞典によりながら敢えて二説を挙げたい。

①ホウ←ハフ←ハブと転じた語で、「赤土地である、特に傾斜地」。トクは動詞トク（解）の連体形か、ばらばらに解けることから「崩壊地」をいう。ホウトクボラとは、「小さな谷の傾斜地で一部崩れて赤土がでている所」だろうか。

②ホウは動詞ホホムの語幹から転じたもので、「包み込まれたような地形」、トクは同じ、動詞トク（解）から転じた語。ホウトクボラとは、「崩れもあり両岸から包み込まれたような洞」か。

いずれも、後に瑞祥地名「宝徳」に変わったものと思われる。

全国地図には、ホウトクボラ地名は無い。

【陣花・陣花山】

ジンカ・ジンカヤマ

これらの小字は、一続きになっていて、京塚丘陵の谷を一つ越えた南側の丘陵にある。

下虎岩にもジンガ小字があって、二説を挙げた。それに従いたい。(『旧下久堅村の小字１０』)

①ジンカとは、「山腹の平坦地」を意味する。

②「陣営を張った所、あるいは陣屋があった所」をいう。

ジンカヤマとは、「ジンカ小字からみて山になっている所」であろう。

なお、村誌は、今田の井上氏と戦って勝った知久頼氏が和睦を受け入れた所で、陣和→陣花と転じたとしている。

なお、全国地図には、ジンカ地名は載っていない。

【下平・下平下】

シモダイラ・シモダイラシタ。

主要地方道飯田・富山・佐久間線を越えて、その両側に、シモダイラシタ小字があり、西方は天竜川にまで達しており、東隣にはジンカ小字がある。その傾斜地の東隣がシモダイラ小字となっている。もう一つ小さなシモダイラシタ小字があるが、これはシモダイラ小字に囲まれている。これらの小字は、急傾斜地を除けば、水田が多い。

シモダイラ（下平）小字は伊那谷南部には多い。「下」か「霜」かで、意味が大きく異なってくるが、たとえ霜を意味する場合でも、「霜」の字を使うことはほとんどない。

シモダイラシタは「シモダイラ小字の下段にある平坦地」を意味する。では、シモダイラとは何か。二説を挙げたい。

①シモダイラとは、「霜の降りやすい平坦地」ではないだろうか。陣花山や陣花の冷気が小さな谷を流れて、シモダイラの平坦地で一旦は溜まるのではないかと思われる。

②シモダイラとは、「丘陵の下の麓の方にある平坦地」をいう。一般には、この解釈の方が多いと思われるが、ここの下平は対する「中平」とか「上平」小字が、近くにはないのが、気になる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、シモダイラ地名は４２件が

記載されている。

【半場】

ハンバ。

この小字は、鼬ヶ沢右岸の急傾斜地の上にある緩傾斜地のほぼ平坦地といえる場所にある。

ハンバ小字は下久堅地区でもかなりの数がある。バンバ・ハバ・ババなどと同じ「崖地」を表すことが多い。この南原のハンバも「崖地や急傾斜地のある所」を意味すると思われる。

全国地図には、ハンバ地名は、中・大字として、１０ヵ所に挙げられている。

【鼬澤】

イタチザワ。

この小字は、鼬ヶ沢右岸の最下流域にある。

イタチザワとは何を意味するのか。三通りの解釈を示したい。

①イ（接頭語）・タチ（断）・サワ（澤）と考える。イは「主として動詞に冠し、語調をととのえ、意味を強める」（広辞苑）で、タチは動詞タツの連用形の名詞化した語、サワは谷川のこと。イタチザワとは、「崖が断ち切ったようになっている谷」をいう。鼬ヶ沢河畔に立って、崖を仰ぎ見ているという図が想像できる。

②イ（偉）は「高く聳えている所」、タツ（立）も動詞の連用形で、高くなった所」（以上は語源辞典）。意味が重なっているが、イタチザワとは、「見上げると、高くなっている谷」か。

③イタチザワとは、「動物の鼬が住んでいる谷」ということも考えられないわけではない。

全国地図には、中・大字として、イタチザワ地名が１ヵ所ある。

【二階田】

ニカイダ。

この小字は、鼬ヶ沢右岸の急傾斜地とその上の緩傾斜地の段丘を含む。現在、三分の一ほどは、棚田になっている。

ニカイダとは何か。これも二説を挙げたい。

①ニカイダ←ニカキダのイ音便変化したもの。ニカは、動詞ニガム（苦）の語幹で「しわが寄ったような地形」（語源辞典）をいう。キダ（段）は「階段状になっている所」。ニカイダとは、「皺が寄ったような地形で階段状になっている所」ではないだろうか。

②ニ（丹）・カキ（欠）・ダ（田か処）で、「赤土で崩壊地もある田んぼ、または土地」を意味するか。カキは動詞カク（欠く）の連用形が名詞化した語（語源辞典）である。

全国地図には、ニカイダ地名は１件も無い。

【尾科澤】

オシナザワ。

この小字は、鼬ヶ沢右岸の急傾斜地にある。

オシナ小字は龍江にもあるが、ここ南原のオシナザワにはどんな意味があるだろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①オ（尾）は、「山裾の末端」のこと。シナは動詞シナフ（撓）の語幹で、「しなやかに曲がった状態」をいう。オシナザワとは、「山裾の末端になっている沢筋が、しなやかに曲がっている所」をいう。

②オは「語調をやわらげる働きをする接頭語」。シナはシナフで「傾斜地」のこと。オシナザワとは「急傾斜地に沿って、川が流れている所」をいうか。

【古垣外】
フルガイト。
この小字は、陣花山の南にあるミナミガホラ小字に包まれている。洞末端部の緩傾斜地にある。現在も居住地になっており、水田や竹藪がある。
フルガイトについても二説をあげる。
①フルガイトとは字面のとおり、「そこに住居があったと言い伝えられてきている場所」か。わざわざ、フルを付ける必要があるのかどうか、疑問もある。
②フルは動詞フルフ（震）の語幹で、「揺り動かされた地」、即ち「崩壊地」をいう（語源辞典）。フルガイトとは、「崩壊地もある住居跡の残る所」を意味するか。
全国地図には、フルガイト地名が、中・大字として、一つだけ挙げられている。
【井下】
イシタ。
この小字は、鼬ヶ沢右岸にあり沢に沿った長い急傾斜地になっている。この急傾斜地の中腹を井水が流れている。
イシタとは何か。二説を挙げる。
①素直に解釈すれば、「井水より下側になる部分のある地域」である。鼬ヶ沢から引いた井水は南原を潤している。イシタ小字の上端を井水が流れている。
②鼬ヶ沢対岸の龍江側には、イノウエ（井ノ上）小字がある。この場合のイ（井）は鼬ヶ沢を意味している。とすれば、イシタとは、「流水が下の方にある地域」ということになる。語順は逆になるが。
全国地図には、中・大字として、イシタ地名は、２ヵ所に挙げられている。
【ムシナ洞井下】
ムジナホライシタ。
この小字は、農免道路竜東南部線の南東側である柿野沢の急傾斜地にある。
ムジナホライシタとは何を意味するのか。
ムジナには二つの解釈がある。㋑アナグマやタヌキの棲息している場所、㋺ムジ・ナ（場所を示す接尾語）。動詞ムシル（毟）の語幹で、「もぎ取られたような地形」（語源辞典）をいう。ムジナとは「崩壊地のあるところ」になる。
ホラ（洞）は、この小字のある、えぐられた谷であろう。ここには湧水も流れているのではないだろうか。
ここでもイシタ（井下）が問題になる。これも二説に絞りたい。㋑この小字のある洞を流れる自然湧水のことか。㋺鼬ヶ沢下流側にある広いイシタ小字が、かってはここまで広がっていた。こう考えると、「広大なイシタ小字の一部であるムジナホラ」となる。これなら、辻褄が合うがどうであろうか。
以上、それぞれの㋑㋺以上を組み合わせると、４通りの解釈が出てくる。
①「穴熊か狸が棲息している谷川の下流部分」とするか。
②「イシタ小字の近くで、崩壊地のある所」か。
③「イシタ小字の近くで穴熊か狸が棲息しているところ」か。
④「イシタ小字の近くで崩壊地のある所」か。
全国地図には、これだけ複雑な地名は記載がないと思われる。

【小四郎平ノ井下】
コシロウヒラノイシタ。
名前の長い小字で２ヵ所にある。一つは、南東側は農免道路竜東南部線のイタチガ沢大橋に接しており、もう一つは、農免道路の南東側に離れていて、急傾斜地の中にある。
ここでもイシタ（井下）地名が問題になるが、ここでは次のように考えてイシタ問題を棚上げにしておきたい。
次に登場するオオヒノキボライシタを含めると、イシタ小字群という表現が生きてきそうだ。最も上流側に小さなイシタ（井下）小字があり、大小のイシタ小字を含めたイシタ小字群は、広大な面積になる。
これらのイシタ小字群は、全体が、かってはイシタと呼ばれていたのではないだろうか。それが、南原と柿野沢の境界地だったためかどうか、より小さな小字に分割されなければならなかった。以上のように考えることはできないだろうか。
コシロウヒラノイシタとは、「イシタ小字の近くで、小四郎さんが関わる傾斜地」であろうか。
【大樋洞井下】
オオヒノキボライシタ。
この小字も、イシタ小字群に属する。農免道路竜東南部線の南東側に接しており、鼬ヶ沢に沿った右岸にある。
オオヒノキとは何か。ここでも二説を挙げる。
㋑文字通りで、「桧の大きな樹」の意。
㋺オオ（美称の接頭語）・ヒ（樋）・ノ（助詞）・キハ（際）で、「水路のほとり」（語源辞典）をいう。オオヒノキとは、「鼬ヶ沢のほとり」を意味する。
以上から、オオヒノキボラシタとは、①「イシタ小字の近くで、桧の大樹が生えている小さな谷になっている所」か。鼬ヶ沢に落ちる小さな谷川がある。②「イシタ小字の近くで、鼬ヶ沢のほとり」のことか。
【京塚平】
キョウヅカダイラ。
この小字は京塚丘陵よりかなり離れた南西方向にあり、先のキョウヅカ小字群とは直接に関係はしていないと思われる。農免道路竜東南部線から北西方向に延びる尾根の一つの頂上になっている。標高５７８．０ｍの高さになっている。
この場合のダイラは、「山頂の平らな所」（語源辞典）であろう。
キョウヅカダイラとは、「経筒が埋められているものと思われる山頂の平らな所」であろう。
全国地図にはキョウヅカダイラ地名は記載がない。
【山ノ川・外山ノ川】
ヤマノカワ・ソトヤマノカワ。
これらの小字は、南原南東部にあり、いずれも尾根と尾根の間の広い谷になっている。
ヤマノカワとは、「山林や耕作地のある大きな洞で自然湧水を集めた川が流れている所」をいう。現在は、洞の中心部に複数の堤があり、その下流側は棚田になっている。上流部は森林もあるが、ほとんどが果樹園と畑である。
ソトヤマノカワのソト（外）は南原の中心部かみて、外側のことをいう。ソトヤマノカワとは、「ヤマノカワ小字の向こう側すなわち外側にあるヤマノカワ」をいう。こちらは内側にくらべて、森林が多く、水田は少なくなっている。

【小田平】
オタヒラ。
この小字は、イシタ小字の北側の高い所にあり、尾根の頂部を含む緩傾斜地になっている。現在も自然湧水を利用した小さな水田がある。
オタヒラとは何か。これも語源辞典に依りながら、二説を挙げる。
①オタはヲタ（小田）で、「狭い水田」をいう。オタヒラとは、「狭い水田がある緩傾斜地」を意味するか。
②オタ←ウタと転訛したもので、「湿地」のこと。オタヒラとは、「湿地のある緩傾斜地」か。
全国地図にはオタヒラ地名は載っていない。
【明前原】
ミョウマエバラ。
この小字は、ヤマノカワ（山ノ川）小字の周辺部の３ヵ所に散在している。
ミョウマエバラとは、何を意味しているのか、全くわからない。それでも何か解釈の手がかりになるように、探ってみたい。
ミョウは、「ちえの光」（明）であったり、「人の目には見えないところで人間世界をみている神仏」（冥）であったりするが、それだけでは、小字名に繋がらない。そこでミョウを「明神」としたらどうであろうか。ジン（神）が略されたとみるわけである。
「明神」とは、「浅間明神」をいう。こうなると、近くにあるフジヤマ小字も生きてくる。
ミョウマエバラとは、「浅間明神の前にある緩傾斜地」としたい。このマエバラ（前原）が、浅間明神の礼拝地と思われる。
やや無理気味の解釈であるが、他には浮かんでこない。
全国地図には、ミョウマエ地名は１ヵ所あるが、ミョウマエバラ地名もミョウマエハラ地名も載ってはいない。
【南ヶ洞】
ミナミガホラ。
この小字は、現在、あゆみ会南原苑のある所で、ヤマノカワ小字の一つ北側の大きな洞にある。
ミナミガホラとは、「南原の中心地付近から見て、南の方角にある洞」を意味する。
当然のような地名であるが、全国地図には、なぜか、ミナミガホラ地名は載っていない。
【赤ナギ】
アカナギ。
この小字は、ミナミガホラ小字の北西隅にある小さな崩壊地になっている。
アカナギとは、文字通り、「赤土のみえる崩壊地」をいう。
全国地図には、中・大字として、アカナギ地名は、１ヵ所ある。
【大古ヤ・大古屋】
オオゴヤ。
この小字は４ヵ所にあるが、ほとんどがミナミガホラ小字周辺にあり、側稜の尾根や側稜側面の傾斜地となっている。
オオゴヤとは何か。オオは接頭語で美称。コヤは野小屋であろうか。焼畑か開墾に使われたのであろう。オオゴヤとは、「立派な野小屋のあったところ」を意味するか。出作りように準備された小屋と思われる。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、オオゴヤ地名は１０ヵ所に記載がある。

【富士山】
フジヤマ。
この小字は、ミナミボラ小字の周辺にあって、ミョウマエバラと入り交じって3カ所に分散している。
フジヤマとは、富士信仰（浅間信仰）で富士山に見立てたものと思われる。現在は必ずしもそうではないが、地名発生時には、周辺より高いところになっていたのではないだろうか。
富士信仰は、男女差別もなく、富士山に見立てた高みを礼拝すれば、直接富士山を仰ぎ見たと同じ御利益があるということで、江戸中期以降、幕府の弾圧を受けながらも、絶えることはなかったという。
全国地図には、30カ所にものぼるフジサン地名が、中・大字として記載されている。
【シタヤ（屋）・下ヤ尻】
シタヤ・シタヤジリ。
シタヤ小字が1カ所、シタヤジリ小字がオオコヤ小字と混じり合っている。いずれもオオコヤ小字と対になっているかのように分布している。
シタヤ小字はオオコヤ小字の下流側にある。シタヤとは、「下の方にある野小屋」か。農具などを置く小屋だったかもしれない。
シタヤジリ小字もオオコヤ小字の下方にあったり、シタヤ小字がある所では、その下方にあったりする。
シタヤジリとは何か。二説を挙げる。
①「シタヤ小字のさらに下方」であろうか。1カ所あるシタヤ小字の低い方にシタヤジリ小字がある。
②ジルは、形容詞ジルイの略で「水気の多い状態」をいう（語源辞典）。シタヤジリとは、「（オオゴヤ小字の）下の方にある小屋で湧水のあるところ」か。仮小屋とはいえ、生活をするには水は必なものだったに違いない。
全国地図にも、シタヤ地名は6カ所に記載がある。
【樋ノ口】
ヒノグチ。
この小字は、陣花山の裾の傾斜地にある。流水が合流している所でもある。
ヒノグチとは、「流水が合流している所」をいう。
全国地図には、ヒノグチ地名は3カ所、ヒノクチ地名は59カ所が、中・大字として記載されている。
【上ノ平】
ウエノタイラ。
この小字は下府垣外山側稜の一つの頂上になっていて、オオコヤ・シモヤ・アライなどの小字が、周辺にある。北の方には低い所にシモノタイラ小字もある。
ウエノタイラとは、「上の方にある平坦地」をいう。
【新井】
アライ。
この小字は側稜の尾根に近い平坦地にあり、ウェノタイラ小字とシモノタイラ小字の間にある。
ここには、イ（流水）は見られな

い。アライとは何を意味するのか。二説を挙げる。
①アライはアラ（新）・ヰ（居）で、「新しい開墾地」か。野小屋があったかもしれない。
②アライ←ニ（丹）・フ（生）と読み替えたか。アライとは、「赤土のある所」であろうか。

【桐ヶ洞】

キリガホラ。

この小字は下府垣外山側稜の北側の洞にある。

ここでは二本の流水が合流しており、合流点付近には水田もある。うち一本の流水は、キリガホラ小字の東端から流れ出て、ここを縦断し、西端でより大きな流れに合流している。

キリガホラとは何か。仮説を三つ。
①キリはキリ（霧）か。キリガホラとは、「霧が発生しやすい洞」であろうか。ホラは「谷川が流れている所」である。ここで霧が発生しやすいとすれば、この小字を縦断している流水の源流が清水であり、その水温が合流する流れよりも高いことが条件になる。これがないと、この仮説は成立しない。
②キリはキリ（切）で、「開墾地」かもしれない。キリガホラとは、「開墾された洞」か。現在、傾斜地は果樹園に、低地は水田になっている。
③キリはキリ（桐）の木のこと。キリガホラとは、「桐の木が自生していた所」となる。栽培していたのであれば、住居に近い場所になると思われるので、“自生”としたが、桐の自生は可能性が小さいか。

【下ノ平】

シモノタイラ。

この小字は、キリガホラ小字の北東隣にあって、やや高い平坦地になっている。

シモノタイラは、「下の方にある平坦地のある所」で、南の方にあるウエノタイラと対応しているのであろう。ただ、シモノタイラがウエノタイラより、時間的に先に発生していたとすれば、シモノタイラは、「霜の降りやすい平」となるかもしれない。

【堤田】

ツツミダ。

この小字は、天神山丘陵と京塚丘陵の間の谷にあり、流水もある。この小字の下流域は、ほとんどが水田になっている。

ツツミとは「土手。堤防」のこと。動詞ツツム（包）の連用形で、「水があふれぬように包む所」をいう（以上、語源辞典）。

ツツミダとは、「小川の水が溢れないように築いた土手のある水田あるいは場所」をいうか。この小字を流れる小川は南西端に寄せられている。

全国地図には、ツツミダ地名は、中・大字として、6ヵ所に記録されている。

【相ノ山】

アイノヤマ。

この小字は天神山丘陵の南側半分ほどを占める。天神山が北隣に、南隣には御経山ある。

アイノヤマとは、何を意味するのか。分かりにくい地名。二説を挙げたい。
①アイはアヒ（間）で、「（何かと何かの）あいだ」を意味する（語源辞典）。アイノヤマとは、「天神山と御経山との間にある山」をいうのではないか。二つの山は、いずれも神仏に関わる神聖な山である。
②アイはアイ（会）で、イリアイからイリが略されたものと考えることは

できないだろうか。アイノヤマとは、「入会で住民が共同で利用できる山」としたいが、どうか。

全国地図には、アイノヤマ地名は９ヵ所にある。

【羽前場・下羽前場】

ハマエバ・シモハマエバ。

この二つの小字は、いずれもツツミダ小字の北東隣にある。

ハマイバ小字は、下虎岩にもある。

ハマエバ←ハマイバと転じたものであるが、ハマイバとは何か。

ハマエバとは何か。二説を挙げる。

①ハマエバとは、「破魔打を行った場所」をいう。破魔打とは、正月の遊戯の一つで、二組が対抗して勝負で運勢を占う。たとえば、一方が藁や樹皮などで丸く作った破魔矢の的を投げ転ばすと、相手が木の枝を投げてさえぎり、境界線を越えると勝つ。といったやり方が国語大辞典には出ている。また、径２０ｃｍぐらいの丸太を１．８ｃｍぐらいの厚さに切って的にして空中を飛ばし、相手側に打ち込む、というやり方もあったようで、危険だというので、幕府に禁止されて早くに廃れたという（民俗語彙）。二組で行うので、石打と同じように村境で行われることが多かったようだ。南原のハマエバ小字は、小林との境まで、直線距離にして２００ｍほどの所にある。広辞苑効果は大きい。

②ハマエバ←ハマイバと転訛しており、ハマはハマ（浜）で、「川のほとり」のこと。イバはイバ（畏場）で、「畏敬すべき場所」であろうか。以上から、ハマエバとは、「川が近くを流れていて畏敬すべき場所」か。８０ｍほど北にはテンジン小字があり、御経山や文永寺・諏訪神社も近い。

シモハマバは、「ハマエバ小字の下の方にあるところ」をいう。小林との村境を流れる知久沢川に接している。破魔射場説によれば、こちらの方が本来の破魔射場ではなかったかと思われる。ハマイバの意味が急速に忘れられて、地名が逆転したか。あるいは、ハマエバ小字もシモハマエバ小字も、もとは同じ破魔射場であったのかもしれない。

全国地図には、中・大字として、ハマエバ地名は２ヵ所、ハマイバ地名は１３ヵ所に記載されている。「全国に無数に残っている」（民俗語彙）とはいうが、それにしてはやや少ないか。

【小松・小松北】

コマツ・コマツキタ。

これらの小字は、テンジン小字とハマエバ小字に挟まれている。また、これらの小字は、天神山や相ノ山・羽前場などがある丘陵の頂上部にある。

コマツとは何か。ここでも二通りの解釈を挙げたい。

①コマツとは、「聖樹である松が自生している所」か。コは「ほとんど意味をもたない接頭語」（語源辞典）である。この神聖な地に、どこにでもある地名では、ややものたりない感じがするが、どうであろうか。

②コは接頭語、マツはマツリ（祭。奉）を意味する（語源辞典）。ここで天神様の祭祀が行われたか、天神講があったのではないかと考えることはできないだろうか。現在は果樹園になっているが、小字名発生当時はどうであったか。マツリの場にはふさわしくはないだろうか。

事実はどうであったのか、確認はできないでいる。

コマツキタは、「コマツ小字の北側

にある地」であろう。
全国地図には、中・大字として、コマツ地名は６９ヵ所、コマツキタ地名でも１ヵ所に記載がある。
【天神・天神山・中天神・下天神】
タンジン・テンジンヤマ・ナカテンジン・シモテンジン。
天神は菅原道真の霊を祀ったものであるが、子ども組の行事として行われていたのが天神講である。年に一,二回天神社と呼ばれる小祠へ参詣し、宿や天神社などに集まり、食事をして遊ぶ。この天神講は関東地方から長野県、山梨県、静岡県東部に濃厚に分布しているという（民俗大辞典）。
テンジンは、「天神社があった所」と思われる。テンジンヤマは「天神様を祀っていた山」か。現在は文永寺にある天神坐像はこの天神山に祀られていたという。シモテンジンは「下の方にある天神社境内」か。ナカテンジンは「天神と下天神の中間の地」ということになりそうだ。
全国地図には、ナカテンジンとシモテンジンの地名は無いが、テンジン地名は１２３ヵ所、テンジンヤマ地名は４１ヵ所にものぼる。
【和平】
ワダイラ。
この小字は、テンジンヤマ小字の北側にあり、諏訪神社の境内と重なる。
ワダイラとは何か。
ワはウハ（上）の上略形（語源辞典）で、ワダイラとは、「（文永寺の）上にある段丘の平坦地」をいうか。
全国地図には、ワダイラ地名は１１ヵ所にあり、「上平」「和平」の字を宛てている。
【ウリダ】
この小字は、ナカダイラ小字とテラシタ小字の間にある。
ウリダとは何か。
ウリはウルヒ（潤）の転訛した語で「湿地」を意味する（語源辞典）。ウリダとは、「湿地にある水田、あるいは湿地」をいうか。現在も水田になっている。
全国地図には、ウリダ地名は、中・大字として、２ヵ所に記載がある。
【寺下】
テラシタ。
この小字は、文永寺の西側にある。ナカダイラ小字の東側である。
テラシタとは、文字通り、「文永寺の下側にある土地」であろう。
全国地図には、テラシタ地名は２６ヵ所にある。
【切石】
キリイシ。
この小字は、文永寺の西隣にある。カミキタダイラ小字の南側になる。
キリイシとは何か。語源辞典によって、二説を挙げる。
①キリイシとは、下伊那郡の方言で「花崗岩」のことだという。よくわからないが、キリイシとは、「花崗岩の岩があった所」としておきたい。それを切りだして石材にしたのかもしれない。
②キリイシとは、「石切場」のことか。かっては文永寺の境内であったと思われるが、石畳など寺で使用する石材を作り出していたのかもしれない。
全国地図には、４ヵ所にキリイシ地名が載っている。
【門ノ内】
モンノウチ。
この小字の中に、文永寺も南原公民館もある。
モンノウチとは、山門の内側をいい、

「文永寺境内」を意味する。
全国地図には、モンノウチ地名は２ヵ所に記載がある。
【幸神】
コウジン。
この小字は、三方をカミキタダイラ小字に囲まれ、一方にはジョウロク小字に接している。
コウジンは「荒神」のこと。コウジンとは、「荒神を祭祀していた所」と思われる。
荒神は地域共同で祀られ、祟りやすい荒ぶる性格とともに祭祀者を庇護する強い力をもつ神とされ、修験道では仏・宝・僧の三宝を神でもある。荒神信仰の性格は多様で分かりにくい神様である。
全国地図には、コウジン地名が、中・大字として、１０ヵ所に挙げられている。
【古宮】
フルミヤ。
この小字は、ウエノボウ、キクザワ、モンノウチ、カミキタダイラ、シミズボラ等の小字に囲まれている。知久沢川の急傾斜地もあるが、緩傾斜地で平坦地に近い部分もある。
フルミヤとは、字面通りで、「かって神社があった所」であろう。神社とは、近くにある諏訪神社のことと思われる。傾斜地の少ない、南の方の段丘上に遷座したか。
全国地図には、フルミヤ地名は８ヵ所にある。
【西性院】
セイジョウイン。
この小字は文永寺のあるモンノウチ小字の南隣にある。
セイジョウインは、天正１５年(1582)の検地帳に記載されている文永寺十二坊の中にある最勝坊の後身であろうか。宝永の頃までにことごとく廃寺になってしまったが、最勝坊だけは享保年間に焼失するまで、残っていたという。
とすれば、セイジョウインとは、「かって文永寺十二坊に数えられていた僧坊の一つがあった所」となる。
全国地図には、セイジョウイン地名は載ってはいない。
【坊主ナギ】
ボウズナギ。
この小字は、現在、地方主要道飯田・富山・佐久間線の東側の急傾斜地にある。行き倒れの坊さんを天竜川に投げ込んでしまったという、村誌の「坊主投げ」はここであろうと思われる。村誌の別の所には、「南丈六ボーズナギにハネ橋をつくった」とあるので、ボウズナギが正しいと思われる。
ボウズナギとは何か。村誌の伝説編にある、「行き倒れのお坊さんを天竜川へ投げ込んだ」とうのは付会と判断して、ここでは採りあげない。
ボウズとは、「丸くて毛の生えていないもののたとえ。木の生えていない山や葉の散ってしまった木などにもいう」（国語大辞典）という。つまり僧侶の頭に見立てた地形をいうこともあるようだ。
ボウズナギとは、「樹木の生えていない崖地」を意味するものと思われる。
村誌には、ここにハネ橋をつくったが、第五・六代の天竜橋（南原橋）が共に開通式もしない前に墜落したのは、ここが、昔、獣畜の死屍を捨てていたからだと記している。主要地方道が出来る前には、ボウズナギは天竜川にまで届く崖地だったのであろう。三昧所の役割を果たしていたのであろ

う。
全国地図には、この地名は無い。
【能ノ川】
クマノカワ。
この小字は、中平段丘が知久沢川へ傾く急傾斜地にある。知久沢川近傍は小林のイエシタ小字になっている。
クマノカワとは何を意味しているのか。
クマハ、クマ（曲）で、「川などの湾曲点、曲がり目」をいう（語源辞典）。とすると、クマノカワとは、「川の曲流点がある土地」ということになる。川とは、この近くでは知久沢川しかない。問題は、現在、この小字が知久沢川に接していないこと。知久沢川に接しているのはチクザワ小字である。このことをどう考えたらいいのであろうか。
クマノカワ小字名の発生当時は、この小字は知久沢川に接していたか、もっとおおらかに、「曲流点のある川に近い所」という意味で名づけたのか。どうであろうか。地形をみると、この部分で知久沢川は湾曲していることがわかる。
全国地図には、クマノカワ地名は、中・大字として、4ヵ所に載っている。
【知久沢】
チクザワ。
この小字は、2ヵ所、知久沢川左岸にあり、上流側のチクザワ小字は、フルミヤ小字とカミノボウ小字に囲まれており、もう一つの下流側はホッタテダイラ・クマノカワ・シミズボラ等の小字が周辺にある。
チクザワ小字と知久沢川とどちらの名称が、先に発生しているのか。分からないが、チクザワ→知久沢川と考えて解釈していきたい。
チクザワとは何を意味するのか。チク←ツクの転じた語で、ツクには二説がある。語源辞典によって見ていきたい。
①ツクは動詞ツク（突）の連用形で「突き出た所」をいう。チクザワとは、「谷川が向こう側に突き出た所」か。2ヵ所とも小林側に脹らんでいる。
②ツクは動詞ツク（漬）の連用形で、「水につかる所」となる。2ヵ所とも、知久沢川の氾濫原で、増水すれば水をかぶり易い地形になっている。
北の方にある知久平との関係もはっきりはしないが、直接にはないものと考えている。語呂のよくないツクサワは自然にチクザワに転訛していったのかもしれない。
全国地図には、チクザワ地名は2ヵ所に、中・大字として記載されており、いずれも「築沢」の字が宛てられている。
【清水洞】
シミズボラ。
この小字は、知久沢川左岸の急傾斜地にある。
シミズボラとは、「自然湧水のある小さな谷」である。
この湧水を利用したのは、右岸の小林の人達の方が多かったかもしれない。現在は、近くのチクザワ小字に橋が架かっているが、小字名発生当時にはどうであったか。
【上ノ坊】
ウエノボウ。
この小字は、天神山丘陵から知久沢川に下る傾斜地にある、広い小字である。傾斜地の上端には平坦な所もある。
ウエノボウとは、「文永寺の本坊よりも高い所にある僧坊」か。広いから複数の僧坊があったと思われる。

全国地図には２ヵ所に、地名がある。

【堂ノ山】

ドウノヤマ。

この小字は、南原公民館の東側にあって、ウエノボウ小字に、半分ほどは囲まれている。墓地が多い。文永寺の境内から諏訪神社へ上る傾斜地にある。

ドウノヤマとは、「仏堂があった高い所」をいう。文永寺の仏堂で、寛政二年の絵図の阿弥陀堂の位置に重なるのではないだろうか。

【キダハシ】

この小字は、知久沢川左岸にあって、南原から県道米川駄科停車場線に出る道路の両側に広がる。

キダハシとは、「階段」のことで、「地形が階段状になっている所」をいう。この小字の東部は水田で、現在も棚田になっている。

全国地図には、なぜか、キダハシ地名は記載が無い。

【カニガラ】

この小字は、キダハシ小字の南隣にある。

カニガラとは何か。語源辞典に依って見ていきたい。

カニ←カナ（掻薙）で、カンナ（鉋）の古語で、「掻き薙がれたような土地」をいう。ガラは「小石まじりの地」のこと。

カニガラとは、「掻き薙がれたような崩壊地のある小石混じりの土地」か。この小字の西側斜面は急傾斜地になっていて、崩れがあった可能性は高い。

全国地図にも、カニガラ地名は記載が無い。

【十治洞】

ジュウジボラ。

この小字は、知久沢川左岸にあって、キダハシ・カニガラ・カミダ・トドメキ等の小字に囲まれている。

ジュウジボラとは何か。仮説を二つ。

①ジュウジボラとは、ジュウ（汁）・ヂ（地）・ボラ（洞）で、「小さな谷になっていて、湧水のある土地」としたい。ジュウ（汁）は「物からしみ出る液体」（国語大辞典）のこと。

②変形四叉路になっているので、変形した十字路とみることができるかもしれない。ジュウジボラとは、「十字路のある谷」か。小字発生時の道路の状態を考えると、無理筋かもしれない。

全国地図には、ジュウジボラ地名は無い。

【神田】

カミダ。

この小字は、山口沢川を挟んで、小林・南原の両地区に跨がり、両岸の急傾斜地を含む広い小字となっている。

カミダとは何か。解釈を二つ挙げたい。

①カミダとは、一般的には、神社に所属している水田で、「その収穫で、神事や造営の費用、神職の給料などをまかなう田」（国語大辞典）をいうい。だから、ここのカミダとは、「神社に要する費用等をまかなう水田のある所」ということになる。現在でさえ、水田があるのは、この小字のごく一部にすぎない、ということが気になる。神社とは、小林の神明神社か、それとも距離は直線にして二倍ほどになる山口熊野神社か、である。

②カミは動詞カム（噛）の連用形が名詞化した語で、ダ（処）は場所を表す接尾語。カミダとは、「噛まれたように崩壊している崖のある土地」となる。

全国地図には、中・大字として、カミダ地名は１６ヵ所にある。

【上松】
ウエマツ。
この小字は、南原のミナミガホラ小字と山口沢川の間の急傾斜地にある。
ウエマツとは何か。意外と難しい。仮説を二つ用意したい。
①ウエマツとは、「高い所に松がある所」か。この小字内に標高５６１．４ｍの小さな独立峰に松があるということか。
②マツは動詞マツハル（纏）から、「魔射たような地形」（語源辞典）をいう。ウエマツとは、「高い所の方が褶曲が激しい土地」であろうか。低い方の山口沢川沿岸は褶曲がわずかしかない。
ウエマツ地名は全国地図にも多く、中・大字として、３４ヵ所に挙げられている。
【梅ヶ久保】
ウメガクボ。
この小字は、山口沢川左岸の傾斜地にある。
ウメガクボとは何か。これも二説を挙げたい。
①ウメガクボとは、「窪地に梅が生えていた所」をいう。現在は明瞭な窪地はないが、小字名発生当時は窪地があったのかもしれない。
②ウメガクボとは、「今は埋まってしまったが、かって窪地があった所」をいうか。この小字には１ヵ所、傾斜が緩んでいる所がある。そこが崩落して埋まってしまった窪地である可能性は高い。
全国地図には、３ヵ所にウメガクボ地名が、中・大字として記載されている。
【東ヶ洞】
ヒガシガホラ。
この小字は、山口沢川左岸急傾斜地の中腹にあって、カミダ・ウメガクボ・」ウエマツ等の小字に囲まれている。小さな洞地形の谷が二筋ある。
ヒガシガホラとは、「東の方にある小さな谷」であることは、ほぼ間違いないが、東にどんな意味が込められているのであろうか。
西の方をみると、複数の「富士山」小字と、「明前原」小字がある。富士講の影がみえる小字であるが、富士信仰の行のなかに、山口沢川で身を清め、「東ヶ洞」で日の出を拝することがあってもおかしくはないと思っている。いかがであろうか。
全国地図には、ヒガシガホラ地名は一つもない。
【砂田】
スナダ。
この小字は山口沢川左岸で南原にあるが、一部は稲葉？へも境界を越えて広がっている。
スナダとは、字面の通りで、「砂地の土地」を意味していると思われる。ダはダ（田）ではなく、ダ（処）で場所を表す接尾語である。スナダは現在も水田のない山地になっている。
全国地図には、スナダ地名が、１６ヵ所に中・大字として挙げられている。
【山口】
ヤマグチ。
この小字は３ヵ所にあり、その一つには山口熊野神社の境内がある。
ヤマグチとは、一般的には、「山の入口。麓」（国語大辞典）であるが、「山口祭が行われた所」ではないだろうか。山口祭とは、「樵が山から木を伐り出す時、または狩猟する人が山に入る時、その山の入口で山神をまつる祭」（民俗大辞典）であるという。

【白砂】
シラスナ。
この小字は農免道路竜東南部線の西の方にあり、ヤマグチ・ソトヤマノカワ・イシタの小字に囲まれている。また、小さい小字で、この付近の山地では標高５８５．９ｍの最も高い峰になっている。
シラスナとは、「白い砂地」をいう。花崗岩の風化した砂地になっているのであろう。
なにか他にいわれがありそうにも思えるが、今のところ、見つかってはいない。
全国地図にも、シラスナ地名は２ヵ所にある。
【犬ノ食・犬ノ喰・犬ノ敷】
イヌノクイ・イヌノジキ。
これらの小字は、稲葉と柿野沢の境界付近にまとまっている。
すでに柿野沢のイヌノクイ小字の所で触れているように、イヌはイ（接頭語）・ヌ（沼）で、「湿地」を表す。クイは、「犬が食いちぎったような地形」であった。ジキは動詞シキルの語幹で、「（何かによって）仕切られた所」（語源辞典）をいう。
以上から、イヌノクイもイヌノジキも同じように、「湿地が山地の間に食い切ったように、あるいは仕切られたように入りこんでいる土地」を意味しているものと思われる。
全国地図には、イヌノクイ地名もイヌノジキ地名も載ってはいない。
【通ノ神】
トオリノカミ。
この小字は稲葉にあり、南原にも接している。
トオリノカミとは何か。仮説を二つ。①トオリノカミ＝トオリガミか。「通り神」とは、「主として悪霊のしわざをいう語。体の変調などをそのしわざと考え、これに会うと死ぬなどという俗信がある」（国語大辞典）という。東日本に多いらしい。この場合、道を通るのは神で、旅をしている人ではないようだ。これが地名になるかどうか。②トオリノカミ＝ミチノカミで、「道の神」とは、「悪霊が侵入するのを防ぎ、通行人や村人を災難から守るために、村境・峠・辻などに祭られる神」（大辞泉）をいう。すなわち、峠の神・塞の神・道祖神などの名前をもった神のこと。稲葉のトオリノカミ小字は、南原との境界にあり、龍江とも近い。
全国地図には、トオリノカミ地名もトオリガミ地名も、記載はされていない。
【川尻】
カワジリ。
この小字は、鼬ヶ沢右岸で稲葉の龍江との村境にある。カワジリ小字より下流側は深い谷になっていて、氾濫原があるのは、このカワジリ小字まで。
カワジリとは、「川しも」（広辞苑）をいう。この付近、鼬ヶ沢の中流域で、鼬ヶ沢の“川しも”ではない。稲葉の中心地から見て“川しも”であることを意味する。
ジリは形容詞ジルイの略とする解釈（語源辞典）もある。ジルイとは、山梨県・愛知県・静岡県の方言で「水分が多くて柔らかい」ことを意味する（方言大辞典）。これを活かせば、カワジリとは、「川の近くの湿地」ということになり、地形はその通りであるが、やや持ち回りすぎか。ここでは採りあげないことにする。
全国地図にはカワジリ地名は１７。

【越神楽】
コシジンラク。
この小字は、稲葉の龍江村境に近く、周辺丘陵の５９７．５ｍの最高点の峰があり、一方には盆地を抱えた広い小字になっている。
当て字をみれば、北陸の神楽に関係するのではないかと考えてしまうが、漢字は後から付けられたものだから、この解釈は成立しにくい。
では、コシジンラクとは何か。コシをコシ（腰）とするか、コシ（漉）にするかの違いで二通りの解釈を挙げておきたい。（語源辞典による）
①コシはコシ（腰）で、「山の麓」のこと。ジンは語源がはっきりしないが、「小盆地」を意味するという。ラク＝ラカで、「場所」を示す接尾語を二つ重ねたもの」であるという。以上から、コシジンラクとは、「山の麓で盆地がある所」か。
②コシは動詞コス（漉）の連用形が名詞化した語で、「水の湧き出る所」をいう。コシジンラクとは、「自然湧水のある盆地」ということになる。
難しい地名で、全国地図には記載がない。
【辻・辻下】
ツジ・ツジシタ。
この小字は、稲葉の尾根筋にある。中・近世の道は谷道ではなくて、尾根道が多かった。管理維持が谷道にくらべて容易であったからである。尾根筋を行く道がツキ（高所）・ミチ（道）であり、これがツジに転じた（語源辞典）とするのは、説得力がある。辻とは「二本以上の道が交わった場所。ただ山頂などの高所を辻と呼ぶ地方もあり･･･」（民俗大辞典）というのも理解できる。
辻には境界性と公共性という二面性があり、盆行事も多く、先祖の霊を送るのも辻までという地方が多いらしい。この地域でも厄落としで皿を割るのは辻であった。
さて、稲葉のツジであるが、恐らくは、この小字内に、「尾根筋の二本の道が合流する場所」があるので、このことを意味していると思われる。
ツジシタとは、「ツジ小字よりも低い方にある土地」か。
ツジ地名は多いようで、全国地図には、中・大字として、１２３ヵ所にも記載がある。ツジシタ地名は載っていないが。
【イナバ】
この小字は鼬ヶ沢に玉川が合流する右岸にある。稲葉の中心地と思われ、西隣の小字には春日神社がある。
イナバといえば、一般的には、「稲干場」である。刈り取った稲を乾燥させるために近くの草地に並べて日干しにした。そこがイナバである。しかし、このイナバ小字内には、現在、水田はない。ただ対岸には水田が広がっているので、その稲を干したのであろうか。
念のために、別の解釈も挙げておきたい。
イナは「砂」の古語ヨナが転訛したもので、イナバとは、「砂の多い土地」を意味する。あるいは、スナ→ウナ→イナと転訛したのではないかともいう（以上は語源辞典）。この付近は花崗岩が風化した砂地が多いので、可能性はある。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、イナバ地名は、３２ヵ所にある。

【春日前・春日下】
カスガマエ・カスガシタ。
これらの小字は、稲葉の県道米川・駄科停車場線に沿った西側にある。
カスガマエとは、「稲葉春日神社の前」をいうが、あまり正確な表現ではないかもしれない。
カスガシタとは、「稲葉春日神社の下の方の土地」をいう。
春日明神とも春日権現ともいうが、藤原氏の氏神である武甕槌命が、この地に祀られているのかはわからない。
全国地には、カスガ地名は５７ヵ所もあるが、カスガマエ・カスガシタ地名は載っていない。
【マトラ】
この小字は、鼬ヶ沢に接し、カスガシタ小字の南側にある。緩傾斜地であるが、川の近くでは急傾斜地になっている。
マトラとは何か。難解地名で、全国地図にも載っていない。それでも、語源辞典によりながら三つの仮説を挙げたい。
①マトラ←マダラ（斑）が転じた語で、「地形が複雑に錯綜している地」か。県道米川・駄科停車場線がヘアピンカーヴしているところで、住宅地もある地形になっている。
②マはマ（真）で、「程度がはなはだしい」こと。トラは動詞トラク（蕩。散）の語幹で「ばらばらになる」意で、崖などの崩壊地をいう。合わせて、マトラとは、「大きく崩れた崖のあった所」をいうか。
③マトラ←マツウラの転。マツ←マタ（股）で、「二股に分かれた谷の分岐点」をいう。ウラ（浦）は「水ぎわ」のこと。マトラとは、「玉川の谷と鼬ヶ沢の谷が分かれる分岐点の近くの水際」をいうか。分岐点の位置はマトラ小字よりもやや上流部になるが、二本の川が合流する影響をまともに受ける場所である。
【丸山】
マルヤマ。
この小字は、春日神社のあるカスガマエ小字の南側にある。
稲葉のマルヤマは、標高５８４．９ｍの独立峰になっている。
各地にあるマルヤマと同じように、円錐形になっている。春日神社の南西方向にある。稲葉の神体山であったのだろうか。
【ウラ洞】
ウラボラ。
この小字は、二つの峯をもつ稲葉の丘陵地にある。周辺には、トオリノカミ・イワヤマ・カワジリ・マルヤマ・カスガマエ・イナバ・ツジシタの小字に囲まれている。
ウラとはウラ（裏）で、「奥。うしろの側」（広辞苑）をいう。ウラボラとは、「（稲葉の中心地からは見えない）丘陵の奥にある小さな谷」を意味する。ウラボラ小字には、峰が東西にあり、内側が外からは見えにくくなっていることを指しているものと思われる。
全国地図にはウラボラ地名は無い。
【岩山】
イワヤマ。
この小字は、鼬ヶ沢右岸で龍江との村境の急傾斜地にある。
イワヤマとは、文字通り、「岩の多い山」（広辞苑）であろう。領家帯の花崗岩地帯である。岩が残っていて、磐座があったことも考えられるか。
全国地図にも、イワヤマ地名は、中・大字として１９ヵ所にある。

【和合】
ワゴウ。
この小字は、カワジリ小字の上流側にあり、鼬ヶ沢の広い氾濫原に水田もある。
ワゴウとは何か。
ワゴウ←ワゴの長音化した語。ワゴは動詞ワゴムの語幹で、「湾曲する」の意（国語大辞典）。下伊那郡の方言として記載されている。高知県の方言ともほぼ同じ意味があり、伊那谷南部と高知県だけに検出されているのは不思議な感じがするのであるが、他に地方では調査が進んでいない、とういことであろうか。
ワゴウとは、「（川や道が）湾曲している所」をいう。
ワゴウとは、玉川と鼬ヶ沢が合流していることを表している、という解釈もありそうだが、合流点が少し離れている。
全国地図には、ワゴウ地名が、中・大字として、２０ヵ所に採られている。
【花のき・ハナノキ・花ノ木】
ハナノキ。
ここからは、上虎岩の小字になる。これらの小字は伊那南部広域農道より東の方にあり、鎮守沢川北側の尾根筋に広い地域にわたっている。主に丘陵地にあるが、谷になっている所もある。
ハナノキとは何か。岐阜・長野・愛知の湿地に自生するカエデ属のハナノキではないであろう。それでは、仮説を二つ。
①ハナノキはハナ（端）・ノキ（除）で、「端が崖になっている所がある」をいう（語源辞典）。すなわち、ハナノキとは、「縁が崖になっている場所がある地域」ということになろうか。ハシが丘陵の端であったり、棚田の並んだ端であったりするが、ほぼそうした地形になっている。
②もう一つの解釈を加えておきたい。ハナノキ＝ハンノキで、「榛の木が植えられていたことがある地域」。焼畑の時代に土壌改良のために植えられたことがあったかもしれない。しかし榛の木のことをハナノキというのは駿河だというので、遠いような気もする。
全国地図には、ハナノキ地名が２２ヵ所で、中・大字として挙げられている。
【メナブリ・メナフリ】
中字として、「目名振」の字を宛てている。
これらの小字は伊那南部広域農道の東側で、尾根筋に沿って東西に長く延びている。
メナブリとは何か。訳のわからない地名の一つである。五、六月ごろに目の中に飛び込んだりする小さなブユ（蚋）のことをメナブリと呼んでいる地方もあるが、ここではブユとの関わりは考えられない。
以下、語源辞典に依って見ていく。
メナ←マナ←マナゴ（真砂）と転じたもので、下伊那郡の方言にあるように、「小石。砂利」を意味する（語源辞典）。フリは動詞フル（震）の連用形が名詞化した語で、「揺れ動いた地」のこと。以上から、メナブリとは、「小石の多いところで、揺れ動いて崩れた場所もある土地」か。例えば、遠山地震（1718）で揺れて崩れたということも考えられないことはない。
全国地図にはメナブリ地名は記載されていない。

【ムジナクボ】
既に、シモトライワで扱った小字であるが、目名振のムジナクボについて、改めて考えてみたい。
ムジナクボとは何か。二通りの解釈を挙げる。
①ムジナクボとは、「アナグマかタヌキがいる窪地」をいう。これは下虎岩のムジナクボの解釈であった。
②別の解釈を付け加えておきたい。ムジナ←ムシ・ナ（接尾語）と転じたもので、ムシは動詞ムシル（毟）の語幹で「崩壊地形」を示す（語源辞典）。ムジナクボとは、「崩壊地のある窪地」をいう。
【石あら・石アラ】
イシアラ。
この小字は、目名振丘陵の尾根続きで奥の方にある尾根の北側斜面にある。上方は棚田になっているが、下方はキダハシ地形の荒地になっている。
イシアラとは何を意味するのか。
イシとは、「小石の多い所」、アラは動詞アラケル（散）から「崩壊地形」を示す（語源辞典）。以上から、イシアラとは、「崩壊地のある小石の多い土地」となる。棚田状の地形は、崩れた場所を示している。
三穂にもイシアラ小字があったが、全国地図には、１ヵ所だけ、中・大字として挙げられている。
【マツクボ】
この小字は、桃木平丘陵の尾根から南西側斜面と低地を含む。イシアラ小字の北側にある。
マツクボとは何か。
マツは動詞マツハル（纏）から「巻いたような地形」をいう（語源辞典）。マツクボとは、「斜面の麓が巻いたようになっている窪地」を意味していると思われる。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、マツクボ地名が１１ヵ所に記載されている。
【ミツマタ】
この小字は、上虎岩神明大神宮の尾根続きになる丘陵地にある。伊那南部広域道がすぐ西側を通っている。
ミツマタといえば、一般的には、「道路か河川が三叉になっているところ」をいうが、このミツマタ小字内にそうした所は見当たらない。ただ小字内にはなくても、近くには三叉路があるので、そこからミツマタ小字は生まれた可能性がある。小字の境界が変動したことも考えられる。
また、もしかしたら、ジンチョウゲ科のミツマタを、ここで栽培したことがあるかもしれない。上質の和紙の原料で、紙漉の盛んであった下久堅である。ないとはいえない。
全国地図には、ミツマタ地名は、中・大字として、３０ヵ所で記録されている。
【ヤツダ・八ツ田】
ヤツダ。
これらの小字は、神明大神宮丘陵の南側斜面と鎮守沢川を南に越えた北側の傾斜地にある。
ヤツダ（谷津田）＝ヤチダ（谷地田）で、「谷地にある水気の多い湿田」（広辞苑）を意味する。
ヤツダ小字は大部分が畑地や傾斜地であって、現在、水田になっているのはわずかであるが、この水田部分の地名が丘陵地に広がっていることになる。
全国地図には、６ヵ所に、ヤツダ地名が、中・大字として挙げられている。

【ナガクボ・長久保】
ナガクボ。
この小字は神明大神宮丘陵の南側の谷にある。
ナガクボとは字面通りで、「細長い窪地、すなわち谷」をいう。現在は棚田になっており、谷の南側を川が流れている。
全国地図には、中・大字として、ナガクボ地名は３１ヵ所に記載がある。
【ミナカクボ】
この小字は、ナガクボ小字の北側にあり、西隣には神明大神宮がある。
ミナカクボとは何か。特に、ミは何を意味するのか。語源辞典を参照にしながら、解釈を三通り。ミはミズ（水）の下略か、カミ（神）の上略か、ミ（廻）で「屈曲した地形」をいうか。これらの解釈によって、ミナカクボの由来も異なってくる。
①自然湧水のあるところで、「ナガクボの近くで清水の出る所」か。
②近くに神明神社があるので、「ナガクボの近くで、神聖な場所」か。
③崩壊地があって、小字名発生時が崩壊した時期より前であれば成立しない由来説であるが、「ナガクボの近くで屈曲した地形となっている所」になる。
全国地図には、ミナカクボ地名は無いが、ミナガクボ地名は１ヵ所にあり、「皆ヶ久保」の字を宛てている。
【イヌガイリ】
この小字は、ナガクボ小字の南側にあって、鎮守沢川が北端を流れている。側稜の峰を４ヵ所に持つ広大な小字である。
イヌとは、イ（意味を強める接頭語）・ヌ（沼）で「湿地」をいうか、イ（井）で湿地とするか、いずれにしても「湿地」を意味していると思われる（語源辞典）。
イヌガイリとは、小字発生当時に水田であったかどうかははっきりしていないが、あえて「湿地の水田地帯から奥へ入ったところ」を意味すると思われる。入った所は、また湿地帯であったり、側稜の尾根の頂上部であったりする。
なお、全国地図には、イヌガイリ地名は載っていない。
【カミミ子】
カミミネ。
この小字は、鎮守沢川左岸に三ヵ所に散在するが、かっては繋がっていたかもしれない位置に、それぞれがある。
カミ（上）は、「上流の方」をいう。ミネ（峰）は、「山頂」とか「尾根筋」のこと。
カミミネとは、「上流の方にある尾根筋の頂上部のある所」か。三ヵ所のカミミネ小字の内、頂上部があるのは、標高５７５．２ｍをもつ小字であるが、先に触れたように、三つが一ヵ所になっていたと思われるので、上記のような解釈に落ち着いた。
全国地図には、カミミネ地名は４ヵ所に記載されている。
【シモミ子・ナカミ子】
シモミネ・ナカミネ。
これらの小字も、鎮守沢川左岸にあって、カミミネ小字より下流側にある。
ナカミネ小字が、周辺部より高い所にあるとはいえないが、シモミネ小字は、「下流の方にある尾根筋の頂上部がある所」であることを示している。
カミとシモが名づけられて、その後に、ナカミネ小字が生まれたのであろう。

【ババサクボ】
この小字は、カミミネ小字の側稜頂上部付近から鎮守沢川に下る谷にある細長い小字になっている。
ババサは、下伊那地方の方言でもあり、ババサマ「婆様」のマを略した語であるが、「乳母さま」をも意味する。すぐに浮かんでくるのは「ウバガフトコロ」地名である。同じことを意味しているのではないか、と考えたが、このババサクボ小字は北向きの傾斜地で、とても「日当たりのいい、暖かい土地」ではない。
ババは、ハマ・ハバ・ママ・マブと同じように、「崖。傾斜地」を意味する。サは「場所」を示す接尾語。（以上は語源辞典）
ババサクボとは、「傾斜地にある窪地、すなわち谷」を意味するものと思われる。
むろん、全国地図には、ババサクボ地名は載っていない。
【ゴンシロウ】
この小字は、鎮守沢川左岸にあり、ツツミダ小字群が三方にある。
ゴンシロウとは何か。これも分かりにくい小字である。仮説を二つ。
①ゴンシロウは固有名詞で、人名か。「権四郎さんの土地であった所」あるいは、「権四郎さんが事故にあった所」か。権四郎さんが、この地にどう関わっていたのかは、分からない。
②コン←コミ（撥音便化）←動詞コム（浸）の連用形が名詞化した語。シロウ←シロで、「赤石山地では緩やかな傾斜地をいう」（語源辞典）。以上から、ゴンシロウとは、「水が溢れやすい所のある傾斜地」か。鎮守沢川は、このゴンシロウ小字のすぐ下流で合流しており、水が溢れやすい所であろう。
全国地図には、ゴンシロウ地名は載っていない。
【洞・ホラ】
ホラ。
これらの小字は、伊那南部広域農道の両側に広がる。中組配水池があり、下虎岩との境界に近い。
ホラとは、「山あいの地。谷間」（国語大辞典）をいう。下伊那郡の方言であるが、静岡・愛知でも使われている。
全国地図には、ホラ地名は、中・大字として２６ヵ所に挙げられている。
【ミネツルネ】
この小字も伊那南部広域農道の両側にあり、シモミネ小字の尾根続きになっている。
ツルネとは、ツルネ（蔓畝）で、「峰つづき」のこと。ミネツルネとは、「尾根で峰が続いているところ」をいう。シモミネ小字からミネツルネ小字まで尾根筋は続いている。
なお、全国地図には、ミネツルネ地名は記載が無い。
【セバヤシ】
この小字は、３ヵ所にあり、いずれもクマノ小字の周辺にあり、傾斜地となっている。伊那南部広域農道の周辺でもある。
セバヤシとは何か。
セバヤシは、セ（背）・ハヤシ（林）か。セは「背側。裏側」で、クマノ小字の裏側をいうのではないだろうか。ハヤシは「樹木の群がり生えている所」（国語大辞典）で、「意図して繁茂するに任せた所」だから“神の森”だという（松岡）。セバヤシとは、「神聖な場所を背面にした樹木の群がり生えている所」か。
全国地図には、３ヵ所にある。

【クマノ】
　この小字はシモミネ丘陵の南側斜面にあり、その中腹を伊那南部広域農道が通っている。
　クマノは何を意味しているのか。仮説を二つ挙げたい。
①クマノは「熊野神社に関わる何かがあった所」としたい。具体的にははっきりしないが、あるいは熊野社があった所であったかもしれないが、そこまでいかないにしても、何らかの関わりがあったと思っている。
②クマは動詞クマスの語幹で、「崩す」の意。下伊那郡や静岡県の方言である（国語大辞典）。他動詞にしなければならないところに弱みがある。ノ←ヌ（沼）で、「湧水のある所」（語源辞典）。クマノとは、「崩壊地もあり、湧水のある所」となるが、やや無理気味か。
【イドボラ】
　この小字も伊那南部広域農道にあり、クマノ小字とミヤノホラ小字に挟まれている。
　イドはヰ（井）・ド（処）で、流水のある所をいう。飲料水にしたり、ちょっとした洗い物ができるぐらいの流水があったのであろう。丘陵の中腹で湧水のある場所である。
　イドボラとは、「ちょっとした流水のある小さな谷」をいうか。
　全国地図には、イドボラ地名は２ヵ所あり、いずれも「井戸洞」の字を宛てている。
【イシバシ】
　この小字は、下虎岩との境界にあり、滝沢川に懸かっている。
　イシバシとは、「石伝いに渡るようになっていた所」、あるいは「細長い石が架けられていた所」のどちらかと思われるが、いずれにしても、始めは石伝いに渡っていたと思われる。現在もここには橋が架かっている。
　国土地理院の全国地図には、中・大字として、イシバシ地名は４６ヵ所にも挙げられている。
【コブケ】
　この小字は伊那南部広域農道と下虎岩境界線の間にある。滝沢川右岸の棚田地帯となっている。
　コブケとは何か。
　コは意味をもたない接頭語、フケ（深け）は「泥深いところ。湿地。沼地。深田（ふけだ）」（広辞苑）であるという。
　コブケとは、「湿地で沼田のある所」か。
　水仕事をして手が白っぽくなることを、子どもの頃は「ふけた」と言っていたような気がする。それがいつの間にか「ふやけた」に変わっていた。後者の方がハイカラに聞こえたという記憶もある。うろ覚えではあるが。
　コブケ地名は、全国地図には４ヵ所に記載されている。宛てられている漢字も４種類、「小深」「小浮」「小浮気」「小更」となっている。
【アシノロ・アシノクチ】
　アシノクチ。
　これらの小字は、伊那南部広域農道を挟んで主に東側に広がっている。滝沢川右岸にあってカミミネ丘陵の南側の急傾斜地になっている。
　アシはアシ（足）で「丘陵の麓」、クチは動詞クチル（朽）の連用形が名詞化した語で、「崩壊地形」をいう（以上は語源辞典）。
　アシノクチとは、「丘陵の麓の部分が崩壊しているところ」か。
　全国地図には１０ヵ所にある。

【ヤマナカ】
この小字は、周辺をクマノ小字に取り囲まれている傾斜地にある。
ヤマナカは「山のなか」（広辞苑）ではあるが、民俗的には、もっと深いものがありそうだ。神信仰と強く結びつき、里とは異質な意味をもつ空間とみなされてきた。
ヤマナカとは、「里に近い場所にありながら、里とは異なった神聖な所」であろう。クマノ小字に囲まれているのも、そうした意味をもっていると考えられていたためと思われる。
全国地図には、ヤマナカ地名が、中・大字として、なんと１１９ヵ所にも挙げられている。
【スナタ】
この小字は、宮沢川の両岸に懸かっている。多くは荒地を含む傾斜地であるが、水田もある。
スナタとは、「砂地の田んぼがある所」を意味する。「砂の多い所」ともとれるが、やはり最大の関心事は稲であったと思われるので、水田のことと考えたい。
全国地図には、スナタ地名が６ヵ所、スナダ地名が１６ヵ所にあるが、すべて、「砂田」の字が宛てられている。
【入道洞・下入道洞】
ニュウドウボラ・シタニュウドウボラ。
ニュウドウボラとシタニュウドウボラの小字がそれぞれ３ヵ所ずつある。いずれも、虎岩公民館のある丘陵とその西の丘陵の間にある谷の付近に分散している。
ニュウドウボラとは何か。決定的な解釈がないので、語源辞典によりながら三説を挙げる。
①ニュウドウ←ニ（丹）・フ（生）・ト（処）と転じたもので、「赤土」をいう。トは「場所」を表す接尾語。ニュウドウボラとは、「赤土の目立つ小さな谷」となる。
②ニュウドウ←ニブ（鈍）・ト（処）と転訛したもの。ニブ（鈍）には、「はっきりしない」という意味もあり、しばしば「湿地」をいう語と重なっているという。ニュウドウボラとは、「自然湧水のある小さな谷」を意味する。小字内には池も見られる。
③ニュウドウ（入道）とは、丸い頂の山を入道頭に見立てたもの。ニュウドウボラとは、「入道頭のような丸い山が見える小さな谷」となる。丸い山は二ヵ所にある。
シタニュウドウボラとは、「ニュウドウボラの下の方にある土地」をいうか。
全国地図には、シタニュウドウボラ地名はもとより、ニュウドウボラ地名も載ってはいない。
【アチムラ】
この小字は、虎岩公民館のある丘陵の頂上付近にある。
下伊那郡阿智村とは関係がないであろう。
アチムラとは何を意味するのか。語源辞典によってみていきたい。
アチとは、アタ・アダ・アヅにつながり、崩崖や傾斜地を示すことが多いという。ムラ←モリ（盛）と転じた語で、「盛り上がった所」をいう。古く「山。丘。高所」を示す語としてモリ・ムリ・ムレ系の言葉があったのではないか、という。アチムラとは、「崩壊地もある盛り上がった丘」をいう。
全国地図にはアチムラ地名が８ヵ所あるが、いずれも「阿智村」の字に。

【ハタナカヒラ】
この小字は、虎岩公民館のある丘陵の南側にあり、アチムラ小字の南隣になる。
ハタナカヒラとは何か。
ハタは焼畑か。ナカ←ナガ←ナギ（薙）と転訛したもので、「崩壊地」のこと（語源辞典）。ヒラは傾斜地。以上から、ハタナカヒラとは、「畑が崩壊したことがある傾斜地」か。
全国地図には、ハタナカヒラ地名は載っていない。
【サルコ石】
サルコイシ。
この小字は、滝沢川右岸の氾濫原にある小さな小字である。
サルコイシとは何か。これも分かりにくい地名である。分からないながらも、敢えて二通りの解釈を考えたい。
①サルコ（猿子）は「子どもなどの着る綿入れの袖なし羽織」（広辞苑）のこと。サルコイシとは、「猿子に形が似た大きな石」か。その形は想像もつかないが。
②サルコとは「夕方、稲の葉に上がる露」をいう方言がある。この地域ではコザルといったような気がするが、記憶は明瞭ではない。サルコ＝コザルであるとすれば、サルコイシとは、「稲の葉の露ぐらいの小石が多い所」であろうか。
全国地図にはサルコイシ地名は載っていない。
【コシマイ】
この小字は、滝沢川とその支流の氾濫原に広がる水田地帯にある。
コシマイとは何を意味するのか。語源辞典によりながら見ていきたい。
コシは動詞コス（漉）の連用形で名詞化した語。「水が湧き出る地」か。マイ（廻）は、「ぐるりと廻り込ん、廻りめぐった地形」をいう。
コシマイとは、「廻りめぐったような地形になっている、水の湧き出る土地」をいうか。水田地帯の周辺は丘陵の麓で、現在、北側と南側には流水があって、水田地帯を取り巻いている。
全国地図には、コシマイ地名は記載が無い。
【フルヤシキ】
この小字は滝沢川左岸にあって、伊那南部広域農道と下久堅運動場を繋ぐ道路が通っている。
フルヤシキとは何か。二説を挙げる。
①フルヤシキとは、文字通り、「古い屋敷跡のある所」か。現在は、屋敷跡の痕跡は無い。
②フルは動詞フルフ（震）の語幹で「揺り動かされて地」（語源辞典）を意味する。フルヤシキとは、「崩壊地のある屋敷跡」となるか。
全国地図には、フルヤシキ地名は、６７ヵ所に、中・大字として記載されている。
【ナカジマ】
この小字は、虎岩公民館にある丘陵の東側にある、かなり大きな小字。
ナカジマとは何か。全国地図にも、２６２ヵ所に中・大字として挙げられているが、その由来がはっきりしないことが多い。二説を挙げる。
①ナカ←ナガ（長）が転じたもの。シマは、尾根の頂上部をシマに見立てたか。ナカジマとは、「長い島のようにみえる尾根の頂上部のある所」か。
②ナカは「山などの間」（語源辞典）、シマは「一続きの田」をいう下伊那の方言（方言大辞典）。ナカジマは「一続きの田がある谷のある所」か。

【カジヤ洞・カシヤ洞】
カジヤボラ・カシヤボラ。
カシヤボラ小字が２ヵ所、カジヤボラ小字が１ヵ所、虎岩公民館の東側の低地にある。
カシヤボラ＝カジヤボラであろう。カジヤボラとは何か。二説を挙げる。
①カジは動詞カジル（掻。囓）の語幹で「引っ掻かれたような地形」を示す。ヤはヤツ（菹）の略で「湿地」をいう（以上は語源辞典）。カジヤボラとは、「崩壊のある湿地である小さな谷」を意味するか。
②カジヤボラとは、「鍛冶屋洞」で、「鍛冶屋か鋳物師が住んでいた、小さな谷」ということになる。この地が、近くに虎岩公民館があるように、虎岩の中心地の一つではあろうが、鉄の加工に当たる職人が定住するほど需要があったとも思われない。あるいは、農村を回って仕事をする職人の仕事場があったのかもしれない。
全国地図には、カジヤボラ地名は載っていない。
【シャグシ】
この小字は、上虎岩のナカジマ小字の南側にあり、下久堅運動場と伊那南部広域農道と南の方で繋がる道路にそっている。
シャグシとは何か。仮説を二つ。
①シャグシ←シャクジと転じたものか。社宮神の文字などが宛てられている、まだ解明されていない神様で、下久堅の他地区にもあり、長野県に多い神である。シャクジ系の社祠・神座は、長野 780、愛知 229、静岡 233、山梨 160、三重 140、岐阜 116 と分布している。
②シャグシ小字の形を杓子に見立てて「杓子に似た形をしている所」かもしれない。
全国地図には、シャグシ地名は、一つも無い。
【八舛マキ】
ハッショウマキ。
上虎岩の暁中字にある小字で滝沢川上流域にあり、周辺には、ナカジマ・シャグシ・イノクチ・トヤバ・ジジゲン・ホシガクボ・コノマ・アキワヤマ・ミダレバヤシの小字がある。
ハッショウマキとは、「種籾を八升播かねばならない面積をもつ水田がある土地」をいう（語源辞典）。ここも、いわゆる「蒔田」で、直播きが行われたものと思われる。この小字は、現在も水田と傾斜地からなり、水田面積は四割ぐらいか。棚田状になっている。
全国地図にも、ハッショウマキ地名は、２ヵ所に、中・大字として挙げられている。
【イノクチ】
この小字は、滝沢川に沿っており、ハッショウマキの下流側にある。
イノクチとは何か。解釈を二つ。
①イノクチとは、「用水の取入口」（広辞苑）をいう。滝沢川から取り入れた用水を北の方に流し、コシマイ小字の北端を西流させているものと思われる。
②イは井（井）で、「自然の流水、つまり川」のこと。クチ（口）とは、「川の合流点」（語源辞典）をいう。すなわち、イノクチとは、「自然流水の合流点」をいう。この小字には、滝沢川に南から流れ下る支流が合流する。
イノクチ地名は、各地にあり、国土地理院の全国地図でも３５ヵ所に記載がある。

【アキハ山】
アキワヤマ。
この小字は、ハッショウマキ小字の北隣の尾根頂上に近い傾斜地にある。
アキワヤマとは、「秋葉三尺坊権現が鎮座する山」のこと。火伏の神で秋葉講により全国に広まった。この秋葉権現を分祀して、このアキワヤマに祀ったと思われる。村誌の元禄二年（1689）の虎岩村神社数の蘭に、「秋葉」の文字がないので、秋葉権現勧請は、それ以降と思われる。
この小字に、秋葉権現の痕跡はあるのだろうか。
現在、静岡県の秋葉山で行われている火祭りの神事は、中部山岳地方に一般的であった焼畑神事であるともいわれる（民俗大辞典）。
全国地図には、アキワヤマ地名は無いが、アキバヤマ地名は１３ヵ所に記載されている。
【コノマ・木ノマ】
コノマ。
この小字は２ヵ所にある。一つは、アキワヤマ小字の下方の棚田にある。もう一つは、少し高い所にあり、傾斜地も含んでいる。
コノマ←コ（小）・ヌマ（沼）が転じた語か。とすれば、コノマとは、「小さな湿地または湿田」を意味するものと思われる。初期の稲作は、こうした自然湧水を利用せざるをえなかった。
全国地図には、コノマ地名が、中・大字として４ヵ所に記載されている。
【ミダレバヤシ・ミダレ林】
ミダレバヤシ。
これらの小字は、イヌガイリ丘陵の頂上部から東半分の傾斜地を含む。
ミダレバヤシとは、何を意味しているのか。語源辞典に添いながら、二つの解釈を示したい。
①ミダレ（乱）は、「しっかりしたものが崩れる」ことをいう。ハヤシは形容詞ハヤシ（逸。急）の終止形で、「傾斜地」をいう。ミダレバヤシとは、「崩壊地のある傾斜地」をいうか。
②ミダレハ、ミ（水）・タレ（垂）で、「湧水のある所」のこと。ミダレバヤシとは、「自然湧水のある傾斜地」を意味するか。
全国地図には、ミダレバヤシ地名の記載は無い。
【大ノマ】
オオノマ。
この小字は、コノマ小字の滝沢川上流部にあり、面積も大きい。
オオノマはオオ（大）・ヌマ（沼）の転じたもので、「大きい方の湿地または湿田」をいう。下流側のコヌマに対比していることは明らかで、滝沢川支流が開析した、小さな谷になっている。
全国地図には、オオノマ地名は載っていない。
【大平】
オオダイラ。
この小字は、２ヵ所にある。いずれも、小さな面積でミダレバヤシ小字丘陵の麓の部分にある。かっては、この２ヵ所は繋がっていたと思われる。
オオダイラとは何か。語源辞典によって、二説を挙げたい。
①オオは接頭語で美称。ダイラは「山中の平坦地。オオダイラとは、「山中にある平坦な土地」か。
②オオ←アハ（泡）の転訛した語で、「湿地」をいう。オオダイラとは、「湧水のある山中の平坦地」か。
全国地図には１０３ヵ所に記載。

【ジャバミ】
この小字は、鎮守沢川最上流部の右岸傾斜地にある。
ジャバミは、ジャバミ（蛇喰）で、「崖くずれ地」をいう。ジャはザレ、ゾレに通じ、「崖地」を示すものが多いという。ハミは動詞ハム（食）の連用形が名詞化した語で「物を損なう」から「浸食地形」をいう。（以上は語源辞典）
広辞苑にはジャバミとは、「山野で円形に草木が生えないところ」とあるが、やや現地の様子とは合わないので採りあげない。
ジャバミ小字は伊那谷南部の各地にあるが、全国地図には８ヵ所が、中・大字として挙げられている。
【マゴダ】
この小字は、ジャバミ小字の東隣にあって、鎮守沢川最上流部にあたる。上久堅との村境に近く、側稜の峰から南側の斜面とその麓の湿地帯までを含む。湿地帯は水田になっている。
マゴダとは何か。
マゴ←マコと濁音化したもので、マコとは、静岡県磐田郡・愛知県北設楽郡の方言で、「崖」のこと（語源辞典・国語大辞典）。ダは「水田か場所を表す接尾語」であろう。
以上から、マゴダとは、「崖地があり、水田もある所」であろうか。
全国地図には、マゴダ地名もマゴタ地名も記載が無い。
【ホリタ】
この小字も、鎮守側最上流部にあり、上虎岩の水道施設のある側稜の尾根から、洞の湿地まで広がっている。ほぼ半分が斜面で、残りの半分が水田になっている。
ホリタとは何か。ホリタは「堀上田」のことで、用排水路のない簡単な水田で、春に周辺を盛り土で囲んで、秋には一部を切り落として排水した。近世には「堀田」と呼ばれることが多かった。1960 年代頃まで平地部の各地で行われていたという（原田信男 2008）。
全国地図には、ホリタ地名は載っていない。
【ヤスヤキ】
この小字は、上虎岩の水道施設のあるホリタ小字の周辺で、３ヵ所に分散している。かっては、３ヵ所が繋がっていたと思われる。
ヤスヤキとは何か。これも語源辞典によりながら、解釈を二つ。
①ヤス←ヤズと清音化した語で、「草木の茂った所」をいう。ヤキは「焼畑」のことか。ヤスヤキとは、「草木が茂っているが、焼畑であった所」か。
②ヤス←ヤチ（菹）の転訛した語で、「湿地」を意味する。ヤスヤキとは、「湧水もあって焼畑が行われていた土地」か。
全国地図には、ヤスヤキ地名は載っていない。
【西垣外・ニシガイト】
ニシガイト。
この小字は、３ヵ所に分布しており、いずれも、滝沢川上流部にある。
ニシガイトとは何か。二説を挙げる。
①ニシは動詞ニジム（滲）の語幹が清音化した語で、「湿地」をいうものと思われる（語源辞典）。つまり、ニシガイトとは、「自然湧水のある居住地跡」ではないだろうか。
②東方にヒガシダナ小字があるので、「西の方の住居跡」か。
全国地図には、中・大字として、６ヵ所に記載されている。

【セキレン】
この小字も３ヵ所にある。いずれも、側稜の尾根から麓の流水までの傾斜地にある。
セキレンとは、何を意味するのか。セキレイ（鶺鴒）のことをセキレンというが、鶺鴒がここの地名に関わるとは思えない。
セキレン小字の３ヵ所のうち、２ヵ所は滝沢川に沿っている。もう一つは川から少し離れているのが気になるが、川に関わる小字と考えることにした。セキはセキ（堰）で、水窪や奈良県・和歌山県で方言として使われているのであるが、「木材を流し下すためなどに川の水を一時せきとめる所」をいうのであろう。
問題はレンである。レンはレン（連）ではないであろうか。セキを連ねておいて、上流から切っていけば、かなりの水量になって材木を流しやすくなる。こう勝手に考えてみたがどうであろうか。こうしたセキレンが他にあったのかどうかは全く不明である。
全国地図にもセキレンなどという地名は一つも載ってはいない。
【ツボジリ】
この小字は滝沢川の氾濫原にあって、ニシガイト小字に挟まれている。
ツボジリとは何か。
ツボは動詞ツボム（窄）の語幹で「窪地」をいう（語源辞典）。ジリは形容詞ジルイの略で「（西日本で）道などが泥でぬかっている。湿っぽい」（広辞苑）ことをいう。
以上から、ツボジリとは、「窪地で湧水のある所」を意味すると思われる。
全国地図には、２ヵ所に、ツボジリ地名が載っている。
【シモ田・シモダ】
シモダ。
この小字は、滝沢川上流部で幅のある洞になっている。２ヵ所あるが、一つは水田地帯、もう一つは急傾斜地になっている。
シモダについては、解釈を二つ挙げたい。
①住宅が集まっているトミヲカを中心にしてみれば、下方にある地域なので、シモダとは、「中心からみて下の方にある土地または田んぼ」をいう。
②霜道も考えられるので、「霜が降りやすい所」の可能性もある。
全国地図には、シモダ地名が、７７ヵ所に、中・大字として記載されている。
【ホドノクボ】
この小字は、滝沢川右岸の尾根の末端部にあって、急傾斜地と緩傾斜地からなる。
ホドノクボとは何か。語源辞典によって考えていきたい。
ホドは動詞ホドク（解）の語幹で「崩壊地形」を示す。クボは「窪地」をいう。すなわち、ホドノクボとは、「近くに崩壊地のある窪地」か。
全国地図には、ホドノクボ地名は、中・大字として２ヵ所に記載されている。
【カナヤマ】
この小字は、シモダ小字の洞の北側に、２ヵ所ある。
このカナヤマ小字からは武石が産出している。黄鉄鉱が褐鉄鉱化したもので、小県武石村の武石と同じである。
カナヤマはこの武石から出る鉄渋によって生まれた小字名である。
全国地図にはカナヤマ地名が７８ヵ所に、中・大字として記載がある。

【クボダ】
この小字は、シモダ小字の洞の北側傾斜地にあり、谷が食いこんでいる。
クボダとは、「谷が深まって凹地になっている所」をいう。ダはダ（処）で「場所」を示す接尾語。
下久堅にも何カ所かあり、全国的にも多く、中・大字として、クボタ地名は８１ヵ所に及ぶ。
【イトボラ】
この小字は滝沢川が解析した広い洞の北側にあり、緩い傾斜地になっていて、洞が食いこんでいる。
イトボラとは何か。解釈を二つ。
①イトはヰ（井）・ト（処）で、「泉のある湿地」か。イトボラは、「泉の出ている小さな谷」であろうか。
②イトには、長野県の方言で、「中。内」の意味がある（方言大辞典）。イトボラとは、「内側に曲がり込んだ洞になっている所」ではないだろうか。
全国地図には、イトボラ地名は載っていない。
【シンヤシキ】
この小字は、シモダ小字の洞の北側にあり、現在も家がある。この付近の中心と思われるトミヲカ小字の西隣になる。
シンヤシキとは、文字通り、「新しく建てられた屋敷のある所」か。
全国地図には、６４ヵ所に中・大字として、記載されている。
【トミヲカ】
トミオカ。
この小字は滝沢川左岸にあり、谷の底部の水田地帯から側稜の尾根までを含む広い範囲になっている。
トミオカは瑞祥地名である。少しでも関連があれば、トミオカと手直ししていると思われる。しかし、元の意味もあるはずなので、語源辞典によりながら考えてみたい。
トミ←トビの転じた語で、トビは動詞トブ（飛。跳）の連用形が名詞化したもの。オカはオカ（岡）で、「主稜から分かれて谷へ下る尾根。側稜」のこと。
以上から、トミオカとは、「崩れたところもある側稜の傾斜地」か。
トミオカ地名は全国地図にも多く、７３ヵ所に記載されている。瑞祥地名であるためか。
【カワラダ・カワランダ】
この小字は滝沢川が開析した谷の底部である水田地帯となっている。
カワランダはカワラダが撥音便化した語か、同じことを意味している。
カワラダとは、「河原にある水田」をいう。
全国地図にもカワラダ地名は１８ヵ所に中・大字として挙げられているが、カワランダ地名は無い。
【ヒカシダナ】
ヒガシダナ。
この小字は、イトボラ小字とカワラダ小字に挟まれた緩傾斜地にある。
ヒガシダナとは、何を意味するのか。
ヒガシはヒガシ（東）で方角をいう。この付近の中心地と思われるトミヲカ小字の東側にあることを意味しているものと思われる。ダナ←タナ（棚）が濁音化したもので、「割合狭く、やや凹凸にある山腹のゆるやかな所」（語源辞典）をいう。
以上から、ヒガシダナとは、「東の方にある、やや狭くて凹凸のある山腹の緩傾斜地」か。
全国地図には、ヒガシダナ地名は記載が無い。

【カミガイト】
この小字は、ヤスヤキ小字とイトボラ小字の間にある。ヤスヤキ小字のある側稜頂上部の南側斜面となっている。現在でも居住地になっている。
カミガイトとは、字面の通りで、「高い所にある居住地か居住地跡」であろう。
全国地図には、６ヵ所に、カミガイト地名が、中・大字として記載されている。
【ヲヲイナバ】
オオイナバ。
この小字は、喬木村境の丘陵の南側斜面にある。崩壊地もあって、現在は麓近くの一部が果樹園になっている。
オオイナバも、字面通りで、「広い稲干場」であろう。オオはあるいは単なる美称かもしれない。そうなると、「稲干場」となる。
すぐ南側には、カワランダ小字のある広い洞の水田地帯を控えているので、それだけ大きなイナバを必要としたのであろうか。
【ホンダ】
大虎第一にある小字で、滝沢川支流域の水田のあるところ。
ホンダとは、ホンデン（本田）が転訛した語で、新田に対して、「江戸時代、幕府・諸藩が租税を徴収する田地として検地帳に記載してある耕地」（広辞苑）のこと。だからホンダとは、「以前から租税を納めている水田」ということになる。
国土地理院の全国地図には、中・大字として、ホンダ地名は１２ヵ所、ホンデン地名は５０ヵ所に挙げられている。
【ドイ】
この小字は、洞底の水田地帯のカワランダ小字ト」ホンダ小字に挟まれている。
ドイはドイ（土居）で、「土手。堤」をいう（広辞苑）。ここのドイは、小字内を通っている道路のことを指しているものと思われる。この道は小字名発生当時に遡ることができるのか。あるいは、田んぼに高低差がるので、既に土手を築いてあったのかもしれない。
全国地図には、ドイ地名が１１４ヵ所もある。
【ナナホラダ・ナナホラ田・ナナ洞タ】
ナナホラダ。
これらの小字は、喬木村境にあり、側稜の頂上部と洞底部の水田地帯を含む広大な面積になっている。
ナナホラダとは、何を意味するのか。ナナは数字の７であるが、この場合は、「多くの」ということを表している。ホラ（洞）は「小さな谷」、ダはタ（処）で場所を示す接尾語。
以上から、ナナホラダとは、「たくさんの小さな谷のある所」か。あるいは、「多くの谷につながる水田地帯」か。
全国地図には、ナナホラダ地名は無い。
【明神前】
ミョウジンマエ。
この小字は、カワランダ小字の水田地帯の南側にある丘陵地の北端にある。上虎岩の諏訪神社が鎮座する所である。
ミョウジンマエとは、「諏訪神社の前面」を意味するか。
ミヤノマイ・ミヤノウラ・ウシロなどの小字があるが、その位置関係がはっきりしない。

【五斗切】
ゴトギリ。
この小字は、ナナホラダ小字に囲まれており、洞底の水田地帯の一角にある。
ゴトギリとは何を意味するのか。ト（斗）は、「播種量から田積を示し地名化したもの」（語源辞典）という。キリ（切）は「区切り」（広辞苑）。
以上から、ゴトギリとは、「籾の播種量を５斗とした面積の水田」ということになるが、大ざっぱな面積を出してみると、2500 ㎡になるので、この面積の田んぼに必要な籾の量の８倍以上にもなる。
だから、“五斗”というのは米の収穫量ではないだろうか。収穫量にしても倍も多くなるが、面積が正確とはいえないので、こちらの方が合っているのではないだろうか。
そうなると、ゴトギリとは、「コメ５斗の収穫を挙げることのできる水田」ということになるが、どうであろうか。
なお、全国地図には、ゴトギリ地名は記載がない。
【ワッバイケ・ワッパイキ・ワッパイケ】
いずれも、ワッパイケが元で、あとは転訛した語か。
ワッパはワラワ（童）の変化した語で、一般には子どものことをいうが、ここではカッパ（河童）のことであろう。愛知県北設楽郡の方言でもあるという（国語大辞典）。
ワッパイケとは、「河童が住んでいるといわれている池」を意味するものと思われる。この池に近づくことは危険と思われていたのかもしれない。
全国地図には、ワッパ地名もワッパイケ地名も載っていない。

【ホシガクボ】
この小字は２ヵ所にある。一つは、滝沢川が支流と合流するところにあり、側稜の尾根とその谷に沿って細長く伸びている。もう１ヵ所は小さな小字で、ひとつ東側の洞にある。
ホシガクボとは何か。語源辞典に依って、敢えて三説を挙げたい。
①静岡県の方言でホシはお供え餅の上側の小餅をいう。ホシは「小丘」をいう。ホシガクボとは、「小さな丘もある洞」か。
②ホシ←ボウシ（帽子）の転で、尾根の頂部を帽子に見立てたもので、ホシガクボとは、「帽子の形をした頂上部のある洞」とするか。
③可能性は少ないが、ホシはトウボシダ（唐干田）の略かもしれない。赤米をつくる水田である。ホシガクボとは、「トウボシダのある洞」ということになる。二つの小字の間には、三峯神社がある。
全国地図には、ホシガクボ地名は載っていない。
【サガザカ・サカサカ・サガ坂】
サガザカか。
これらの小字は、上久堅村境の塩沢川右岸にある。
サガザカとは何か。
サガ（嵯峨）は、「高低があって、ふぞろいのさま」をいう（広辞苑）。サガザカとは、「高低が不揃いの土地で、坂道の多いところ」ではどうだろうか。
全国地図には、サガザカ地名は１ヵ所に記載があって、「下ヶ坂」の字が宛てられている。
【チャウキ】
この小字は塩沢川支流の最上流部に当たり、相原稲荷社のある尾根の北西麓にある。
チャウキ（チウキ）とは何か。よくわからない地名。
チウ←チブ←ツブ（潰）と転訛した語か。ツブは動詞ツブス（潰）の語幹で、「崩壊地形」をいう（語源辞典）。キはサキ（崎）の略で、「山丘の先端」であるという（語源辞典）。
以上から、チャウキとは、「崩壊地もある側稜の先端部分」か。
【イリ・オオイリ】
これらの小字は、チャウキ小字の周辺にあり、塩沢川支流の最上流部になる。オオイリ小字よりもイリ小字の方が四倍ほど大きい。
イリは「川の上流部で奥まった所」をいう。嵯峨坂中字の中心部からみて、“奥の方”ということになる。
オオイリのオオは、アフ（アブ）の転訛した語で、「崩崖」を意味する（語源辞典）。すなわち、オオイリとは、「川の上流部で崩壊地のあるところ」を意味する。
【オホヒラ】
オオヒラ。
この小字は３ヵ所にあり、塩沢川右岸に沿っている。最上流部にあるのが、最も大きなオホヒラ小字で、柏原処理場がある。後の二つのオオヒラ小字は、塩沢川の下流にあって、いずれも小さくて、とてもオオヒラの名にはそぐわない。
オホヒラのオホはオオイリのオオと同じで、「崩崖」を意味していると思われる。ヒラは黄泉平坂のヒラで、「傾斜地」をいう。
合わせると、オオヒラとは、「崩れ地もあって斜面になっているところ」ということになるか。

【ヤケノ】
この小字は、塩沢川右岸の南向き傾斜地に広がる、大きな小字である。
ヤケノとは何か。解釈は二つ。
①ヤケノとは、「自然発生の野火で焼けた野」か。傾斜地の南側半分なので、野火が広がった範囲と同じであるとも考えられる。
②ヤケノとは、「野焼き、または焼畑として利用したところ」で、人の手で焼いた野ということになる。柴草を育てるために野焼きをしたか、焼畑をおこなったのか。
ヤケノ地名は、全国地図に、中・大字として１３ヵ所に記載がある。宛てられている字は全て「焼野」。
【トヤバ】
この小字は、滝沢が左岸にあって、尾根の稜線にまで達する、長い傾斜地にある。
トヤバとは、下伊那や栃木県の方言で、「網を張って小鳥をとる所」（国語大辞典）である。広辞苑にはトヤはあるが、トヤバはない。伊那谷南部の方言になっているということは、この地方では、この狩猟法が用いられることが多かったことを意味する。
ツグミ、ホオジロ、ヒワなど、現在は保護鳥になっている渡り鳥を対象に、渡りの経路にあたる山間の地や稜線にトヤバを設け、数十反のカスミ網を張り巡らし、一網打尽にする。現在は禁じられているが、岐阜県などを中心に密猟がおこなわれているという（民俗大辞典）。
トヤバ小字は、他にも、三穂や龍江にあり、伊那谷南部には多いと思われる。
全国地図には、トヤバ地名は、わずか２ヵ所にのみ記載がある。
【ヂヂゲン】
ジジゲン。
この小字は、滝沢川左岸の傾斜地にあり、トヤバ小字の低地側にある。
ジジゲンとは、何を意味するのか。全く分からない。しかし、分からないでは済まされないので、無理にも考えてみたい。
ジジ←チジで、動詞チヂム（縮）の語幹で、「波打ったような地形」（語源辞典）をいう。ゲン←ケン（険）と転じたもので、「山が険しいこと」（広辞苑）をいう。
以上から、ジジゲンとは、「波打ったような地形で、険しい急傾斜地」であろうか。滝沢川の支流が、この急傾斜地を流れ落ちている。この支流がつくりだした地形と思われる。
当然のことであるが、ジジゲン地名は、全国地図には載っていない。
【ジョロクリ・ジロクリ】
ジョロクリ→ジロクリと転じているか。
この小字は、滝沢川左岸にあり、側稜の稜線から滝沢川まで下る傾斜地にある。この傾斜地には、滝沢川の支流が流れており、洞を形成している。
ジョロクリとは何か。これも分かりにくい地名である。
ジョロ←ジョロジョロ（副詞）と転じた語で、「小さな波を立てて水の流れるさまを表す語」（国語大辞典）である。クリは動詞クル（刳）の連用形が名詞化した語で、「えぐってある部分」（国語大辞典）をいう。
以上から、ジョロクリとは、「自然湧水がながれている、抉られたような形をしている洞」か。
全国地図には、いずれも記載が無い。

【タイザ】
この小字は２ヵ所、滝沢川左岸にあり、フルヤシキ小字を挟んだ両側にある。
タイザについては、既に３回ほど触れており、『旧下久堅村の小字９７』で考えをまとめてある。
この上虎岩のタイザの元になっている寺社または有力者はどこにあったのか。もっとも近い熊野神社でも、直線距離にして７．５ｋｍも離れているので、神社とはいえない。寺院も見つからない。とすると貴人か有力者であるが、それは二つのタイザ小字の間にあるフルヤシキ小字の主だった可能性が高い。具体的に、どのように関わっていたのかは不明である。
【ミョガズカ】
この小字は、滝沢川の南側にあり、上虎岩中田中字の地籍内と思われる。
ミョガズカとは何を意味するのか。これも難しい。三つほど解釈を挙げておきたい。
①字面にこだわれば、ミョウガズカ←ミョウガヅカと転じたか。ミョウガズカとは、「ショウガ科の茗荷が自生していた小高い丘」か。この丘は、標高574.4mの独立峰になっている。
②ミョガ←ミヨ・ガ（処）と転訛したもので、ミヨとは、「（大雨で）土が掘れて深くなり埋まらない所」か。ミョガズカとは、「土が掘れて溝になっている所もある小高い丘」か。掘れた所を道路がヘアピンカーヴで迂回している。
③ミョガ←ミヨ・ガ（処）と転じた語で、ミヨは静岡の方言で「峰」をいう（語源辞典）。ミョガズカとは、「峰のある小高い丘」か。
全国地図には、ミョガズカ地名もミョウガヅカ地名も記載は無い。
【モリマイ・モリノ前】
モリノマイはこの地方の方言で、モリノマエのこと。
これらのモリマイ小字群を、伊那南部広域農道が貫いており、北の方には滝沢川が流れている。
モリは樹木が群がり生える場所で、自然植生の構成種が比較的に残っている場合が多いという（民俗大辞典）。さらに、佐々木高明氏は、山の神が山中の異界を支配する神であるのに対して、平野の里に近い樹林を聖所として祀られている神を森の神といっている。もともとは焼畑の神ではなかったかと明瞭に述べている。
モリノマエとは、「自然林に近い樹木の群がる聖地の前の方にある所」をいう。モリとは、おそらく、滝沢川の北側の右岸にある熊野神社を指すものと思われるが、すでに遷座しているお宮があったかもしれない。これだけのモリマイ小字群があるのだから、そのモリはかなり氏子の多いお宮であったのであろう。
【中田・ナカダ・ナカタ】
ナカダが一般的か。
これらの小字は滝沢川が開析した洞にある。
ナカといえば、「中央部」とか「大切な所」といった意味が多いが、これらの場合には当てはまりそうにない。現在、水田になっているところもあるが、傾斜地や住宅地になっているところもある。
そこで、ナカダとは、「丘陵地の間にある谷地」としたい。ナカとは「山などの間。二つのものにはさまれた間の土地」（語源辞典）である。

【シモナカダ・下中田・シモナカタ】
シモナカダが一般的か。
これらの小字は、モリマエ小字やシモガイト小字・イモジボラ小字と混じり合っている。いずれも丘陵の尾根と近くの斜面から谷の底まで続いている。
ナカダが洞の底部か底部に近い傾斜地にあるのに対して、シモナカダはそれよりも高いところにある。だからシモを「下」とするには疑問がある。ここのシモを「霜」にしておきたい。
シモナカダとは、「霜の降りやすい尾根の間の洞の傾斜地」を意味するか。
全国地図にはシモナカタ地名は載っていないが、シモナカダ地名は２ヶ所にある。
【イモジボラ・イモシボラ】
イモシボラ←イモジボラか。
この小字は、中田中字にあり塩沢川支流の洞の南向き傾斜地にある。
イモジには、信州下伊那地方で里芋の茎をかげ乾しにしたものをいう（綜合民俗語彙）らしいが、地名にはなりにくい。
イモジボラとは、「鋳物師が関わっていた洞」であろうが、その関わりかたは、はっきりしない。
鋳物師の居住地があったところなのか、中世に多かったといわれている村々を巡った鋳物師の寄留地のあったところなのか。この地方で、鋳物師が居住するほど仕事があったとも考えにくいが、あるいは製炭指導にも当たっていたかもしれない。
鋳物師は古くは鋳掛屋であった。なべ・かまなどの穴を「しろめ」などを溶かし込んで穴を埋めるのが、主な仕事であったが、農機具の修繕から製作にまで関わっていたのであろう。
全国地図には、イモジボラ地名は記載がないが、イモジ地名は１ヶ所に載っている。
【ナカヤヒラ】
この小字は滝沢川左岸の南の方に２カ所あり、丘陵地となっている。
ナカヤとは、この地域の中心となるような屋敷のあるところを示すか。ヒラは緩傾斜地であろう。
ナカヤヒラとは、「緩い傾斜地になっていて、この地域の中心になる所」を意味するか。

【マツバイリ】
　この小字は、滝沢川支流の左岸、傾斜地にある。
　マツバイリも分かりにくい地名である。マツ←マツチ（真土）で、「粘土」をいう（語源辞典）。粘土層のある所と思われる。
　マツバイリとは、「粘土のある滝沢川支流の上流部」か。
　全国地図には、マツバイリ地名は無いが、マツバ地名は４０ヶ所にもある。
【イッタンダ・イッタン田】
　イッタンダ。
　この小字はいずれも滝沢川支流の流域に、２ヶ所あるが、「イッタン田」は傾斜地になっていて、現在も水田ではない。もう一ヶ所のイッタンダ小字には、一反歩に近い水田が今でもある。
　イッタンダとは、「一反歩の水田がある所」（語源辞典）であろう。二つの小字は、かっては一つに繋がっていて、分筆の過程で二つの分かれたものと思われる。
　全国地図には、中・大字として、イッタンダ地名は３ヶ所に記載されている。
【ミツケボラ】
　この小字は二ヶ所にあり、一つは滝沢川左岸の一つの尾根とその東側にある小さな谷にあり、もう一つは下流側の斜面にある小さな小字である。
　ミツケボラとは何か。解釈を二つ挙げたい。
①ミツケボラとは、「見付田があった小さな谷」をいうか。見付田とは、「江戸時代、検知も石盛もできないような劣悪な土地のなかから、比較的よい土地を見つけ出し検地を実施して石盛を付した田」（国語大辞典）のこと。
②ミ（水）・ツケ（付）で、ミツケボラとは、「川のそばにある小さな谷」をいうか。この場合、川とは滝沢川支流のことで、この支流にほぼ直角に開口している小さな谷のことをいうのかもしれない。大きい方のミツケボラ小字のことであるが。
　全国地図には、ミツケボラ地名は記載が無い。
【マタギダ】
　この小字も二ヶ所にあるが、小さなマタギダ小字は、地名発生時には、大きなマタギダ小字に繋がっていた可能性が高い。
　マタは、「二股状に分かれた谷の分岐点」（語源辞典）をいう。ギタは階段状の地形のこと。
　マタギダとは、「階段状の傾斜地に耕作地もある二股状に分かれた谷分岐点」を意味する。滝沢川と支流が合流し、二つの谷の分岐点になっている。
　全国地図には、意外にも、マタギダ地名が無い。
【日ナガイナバ】
　ヒナガイナバ。
　この小字は、北西に延びる側稜の尾根筋の南～南西向きの傾斜地にある。
　ヒナガといえば春の昼間の長いことをいうが、イナバは春には合わない。同じ稲の収穫期である秋でも、場所によって、日の当たっている時間の長短はあるので、ヒナガとは「日の当たる時間の長いところ」をいうのであろう。
　ヒナガイナバとは、「日の当たっている時間が長い稲干場」を意味するものと思われる。傾斜が緩い土地であるので、日照時間が少し長くなるのかもしれない。
　全国地図には、ヒナガイナバ地名は載っていない。

【タキビラ】
　この小字は４ヶ所にある。いずれも滝沢川と塩沢川の間の丘陵に分布している。「滝平」は中字名にもなっている。
　タキビラとは何を意味するのか。ここでも二説を挙げる。
①タキは「山の側稜と側稜の間の沢」（静岡県）をいい、ビラはビラ←ヒラと、清音化した語で傾斜地を意味する。以上から、タキビラとは、「側稜と側稜の間の沢のある傾斜地」ということになる。この沢は塩沢川ではなくて、滝沢川であろう。滝沢川の左岸だけが該当地であることが気になる。
②タキは形容詞タギタギシが転訛した語で、「凹凸がある」（広辞苑）さまを表している。タキビラとは、「凹凸のある傾斜地」を意味するか。
　全国地図には、タキビラ地名は無いが、タキヒラ地名は、中・大字として１ヶ所にだけ記載されている。
【大道】
　オオミチ。
　この小字は、滝沢川と塩沢川の間の丘陵にある。
　オオミチとは、「主要な道路」をいうものと思われる。この地名発生当時は、道は管理維持に手間がかかる谷筋の道ではなく、管理維持が比較的楽な尾根筋の道であったのであろう。オオミチ小字は尾根筋にある。かっては、この道がよく使われた主要道路だったに違いない。
　全国地図には、オオミチ地名が、中・大字として、１４ヶ所に挙げられている。
【シモアダカ・シモアタカ】
　これらの小字は、いずれも、塩沢川と滝沢川の間の丘陵の南西側斜面になる。
　アダカまたはアタカは、語源辞典によれば、①ア（接頭語）・タカ（高）で「高所」をいうか、②アタ・カ（処）で「断崖」を示すこともあるという。シモはカミ（上）がないので、シモ（霜）としたい。
　シモアダ（タ）カとは、「霜の降りやすい高地」か、「霜の降りやすい断崖のあるところ」ということになりそうだ。

【ウトボラ】
この小字は、滝沢川と塩沢川の間にある丘陵の尾根がやせている所で北側の滝沢川に崩れ落ちる傾斜地になっている。
ウトはウツ（空）の転じた語で、「雨水によって山野の掘れくぼんだ所」（方言大辞典）をいう。上伊那郡の方言にもなっている。
ウトボラとは、「雨水によって掘れくぼんだ洞」を意味するか。
全国地図には、ウトボラ地名は１ヶ所、中・大字として挙げられている。
【オオサキ】
この小字は、二ヶ所にあるが、いずれも、滝沢川と塩沢川の間の丘陵の南向き斜面にある。
サキは動詞サク（裂、割）の連用形が名詞化した語で、「裂かれたような地形」（語源辞典）を意味する。
オオサキとは、「大きく裂かれたような地形になっている所」をいうか。
オオサキ小字は、大きな崩落の跡があり、掘られたところは現在、水田になっているが、その先は押し出した土砂によって急傾斜地になっている。
全国地図には、中・大字として９０ヶ所にオオサキ地名が挙げられている。
【カミヤザカ・カミヤ坂】
カミヤザカ。
これらの小字は５ヶ所にある。いずれも、塩沢川右岸の傾斜地にある。
カミヤザカとは、何を意味しているのか。二通りの解釈を示したい。
①カミヤはカミヤ（紙屋）で、「紙漉をしていた家」をいう。カミヤザカとは、「紙漉をしていた家まで行く坂道」のことか。村誌には、「少なくとも戦国時代には下久堅は中折などの紙の産地であったのであろう」とある。
②カミはカミ（上）で、ヤはヤツ（菏）の略で「湿地」をいう（語源辞典）。カミヤザカとは、「川（塩沢川）の上流部にある谷で、湧水のある傾斜地）をいうか。この小字は、塩沢川右岸にしか無いのが、気がかりか。
全国地図には、カミヤ地名は、４３ヶ所もあるのに、カミヤザカ地名は一つもない。
【アオキ】
この小字は、塩沢川右岸にある大きな小字である。
アオは「湿地」をいうことが多い（語源辞典）。キは「場所」を示す接尾語。
アオキとは、「湧水の多い所」か。現在でも、下の方には水田がある。
全国地図には、アオキ地名が、中・大字として、７９ヶ所に採られている。
【イドシタ】
この小字は、塩沢川右岸の傾斜地にある。
イドはヰ（井）・ド（「場所」を示す接尾語）で、イドシタとは、「流水か小さな池のあるところから下の方」を意味するか。
全国地図には、なぜかイドシタ地名は載っていない。
【てんパク】
テンパク。
この小字は、塩沢川と滝沢川の間にある丘陵の尾根にある。
テンパクとは、「天白神を祀った所」を意味する。
天白神は性格は多様ではっきりしないといわれているが、この場合は、「山の神」と思われる。
この小字には、祠があるので、これが天白神を祀っていたのであろう。

【シオカイメン】
　この小字も塩沢川右岸の傾斜地にある。
　シオカイメンとは何を意味するのか。海岸端にありそうな地名であるが、内陸部では難しい地名ではっきりとはしないが、語源辞典によって目処をつけたい。
　シオは動詞シホル（霑）の語幹で、「湿地」のこと。カイはカキ（欠）が転訛した語で、「崖」をいう。メンはメ（目）で、「境目」のことか。
　以上から、シオカイメンとは、「湧水のあるところで、崖との境目になっている場所」としておきたい。
　当然のことながら、全国地図には、シオカイメン地名は載っていない。
【タイトラ】
　この小字は、塩沢川の狭窄部右岸に、川に沿って細長く延びている。
　タイトラとは何か。これも難しい地名である。語源辞典によって、二通りの解釈を考えたい。
①タイ←タキ（滝）と転じたもので、「川の流れの急な所」をいう。トラは動詞トラク（散）の語幹で、「バラバラになる」の意から、「崖」を表しているか。タイトラとは、「川の流れの急な崖地」をいうか。
②同様にタイはタキ（滝）のこと。トはト（門）で「狭くなった所」を示す。ラは「場所」を示す接頭語。タイトラとは、「川の流れの急な川の狭窄部」を意味する。
　全国地図には、タイトラ地名は記載が無い。